

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 28 (2016) 年度

奈良市教育委員会

2019



口絵1 発掘区南半部 空中写真（北から） 平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査（第708次）（本文3～21頁）



口絵2 発掘区北半部 空中写真（南東から） 平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査（第708次）（本文3～21頁）



図版3 井戸SE506出土土器・鳥形鏡 平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査（第708次）（本文3～21頁）



図版4 理納遺構SX802出土奈良三彩小壺
平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査（第708次）
(本文3～21頁)



図版5 井戸SE506出土鳥形鏡
平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査（第708次）
(本文3～21頁)



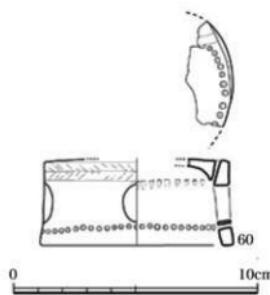
図6 軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせ 平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松庵寺の調査（第705次）（本文22～32頁）



図7 A群の瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦） 平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松庵寺の調査（第705次・第129次）（本文22～32頁）



図版8 B群の瓦(軒平瓦・丸瓦・平瓦) 平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松庵寺の調査(第705次・第129次) (本文22~32頁)



図版9 弥生時代の土器 平城京跡(左京八条四坊三坪)の調査(第709次) (本文36~43頁)

例　言

1. 本書は平成 28（2016）年度に奈良市教育委員会が主として埋蔵文化財調査センターで実施した埋蔵文化財の発掘調査・保存活用・学習推進事業の概要と研究成果を、その後の遺物整理等の成果を加え、収録したものである。

2. 平成 28（2016）年度～平成 30（2018）年度の埋蔵文化財に係る事業は、下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育総務部

文化財課

課　長　立石堅志

課長補佐　松浦五輪美

記念物係

係　長　池田裕英（平成 28・29 年度は埋蔵文化財調査センター主任）

主　任　久保邦江

主　務　原田香織（平成 28 年度は総務係）

再任用職員　篠原豊一（平成 29 年度は埋蔵文化財調査センター所長、平成 28 年度は所長補佐）

埋蔵文化財調査センター（平成 28 年度は教育総務部埋蔵文化財調査センター）

所　長　三好美穂（平成 28・29 年度は所長補佐）　森下恵介（平成 28 年度）

所長補佐　鐘方正樹（平成 28 年度は主任、平成 30 年度は管理係長兼務）

管 理 係（平成 28・29 年度は企画総務グループ）

係　長　鐘方正樹

主　任　松村健次

主　務　山前智敬　新井信介

再任用職員　岡田恭明（平成 28 年度）

調査 係（平成 28・29 年度は調査グループ）

係　長　中島和彦（平成 28・29 年度は主任）

主　任　秋山成人　安井宣也　森下浩行（平成 28・29 年度は文化財課記念物係長）

主　務　吉田朋史（平成 28 年度は主務係）

技 術 員　高岡桃子（平成 30 年度）　桑原一徳（平成 30 年度）

活 用 係（平成 28・29 年度は保存活用グループ）

係　長　原田憲二郎（平成 28・29 年度は主任）

主　務　大庭淳司　永野智子（平成 28・29 年度は主事）

主　事　村瀬　陸（平成 28・29 年度は技術員）

技 術 員　加藤梨津子（平成 28・29 年度）

3. 事業を実施するにあたっては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する

4. 奈良市教育委員会が実施する発掘調査は、本調査では、遺跡ごとの略記号と通算番号（調査次数）を、小規模調査・試掘調査では、年度ごとに番号を付して整理している。本書で報告する遺跡は、平城京跡（略記号 H J）、史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡（以下、附石橋瓦窯跡を省略）（同 DA）、西大寺跡（同 SD）、奈良町遺跡（同 N R）、平松庵寺、菅原遺跡、杉山古墳、護國神社前池中古墳である。前四者と重複する平松庵寺、杉山古墳、奈良町遺跡の一部、試掘調査の菅原遺跡、護國神社前池中古墳に遺跡の略記号は付していない。なお、本書で使用した遺跡名は、『奈良県遺跡地図』奈良県教育委員会 1998 に基づいている。

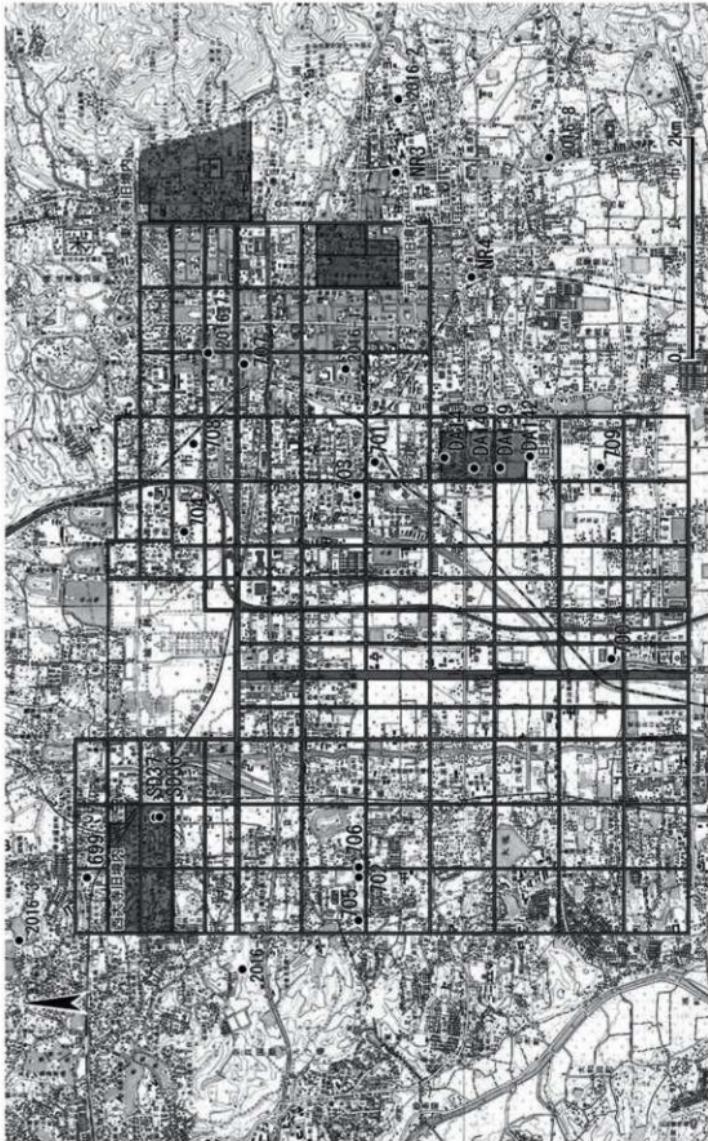
5. 平成 28（2016）年度に実施した発掘調査は 19 件、小規模調査・試掘調査は 8 件である。それぞれ一覧表と位置図に示したとおりである。
6. 平成 28（2016）年度に実施した史跡大安寺旧境内第 140 次調査については、「奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 27（2015）年度」で既に報告しているため、本書には収録していない。また、平城京跡第 708 次調査、背原遺跡 2016-5 次調査については、平成 29（2017）年度に継続して実施しており、一括して本書に掲載している。
JR 奈良駅南特定土地区画整理事業、西大寺駅南地区土地区画整理事業については、計画的に発掘調査及び概要報告の作成を実施しており、平成 28（2016）年度に実施した平城京跡第 701 次調査、西大寺跡第 36 次調査と第 37 次調査については、「奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 29（2017）年度」あるいはそれ以降に発行する「年報」において、報告する。
7. 本書に掲載した調査位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を、発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500) を使用している。
8. 奈良市内では、奈良市教育委員会以外の他機関も発掘調査を実施しており、これを区別するため、本書では下記の機関が実施した調査について、機関の略記号と調査次数・番号を組み合わせて表記している。
- | | |
|-----------------------------|--------|
| 奈良市教育委員会 | — 市 次数 |
| 独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所） | — 国 次数 |
| 奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所 | — 県 番号 |
5. 本書で使用した遺構番号は、調査ごとに付した仮番号である。遺構の種別を示す以下の記号と番号を組み合わせて表記している。
- | | | | |
|-----------|---------|------------------|---------|
| SA (柱列・廻) | SB (建物) | SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠) | SE (井戸) |
| SF (道路) | SK (土坑) | SX (その他) | |
- また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構発出面での計測値である。
7. 本書で使用する遺物名・形式・型式は、特に示さない限り、下記の刊行物に準拠している。
- | |
|---|
| 奈良時代 軒 瓦 :『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996 |
| 土 器 :『平城宮発掘調査報告書 VII』奈良国立文化財研究所 1976 |
| 『平城宮発掘調査報告書 XI』奈良国立文化財研究所 1982 |
| 古墳時代 須恵器 :田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 |
| 弥生時代 土 器 :『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003 |
9. 本書では、遺構等の位置を平面直角座標系第 VI 系（世界測地系）の数値で示した。表・図では、単位 (m) を省略している。
10. 調査に関する記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。
11. 本書の作成は、平成 30（2018）年度に埋蔵文化財調査センター所長 三好美穂の指導のもとで行い、埋蔵文化財調査センター職員全員が分担した。文責は各文末に記した。所長補佐 鐘方正樹の校閲のもと、編集は、中島和彦・森下浩行が担当した。

平成28(2016)年度実施 理蔵文化財発掘調査一覧

No.	次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積(m ²)	担当者	届出者	事業内容	事業区分	届出受理番号
1	RJ699	平城京跡(右京北道因幡一坊・西三街大路)	西大寺町田原一丁目665番の一部	H28.5.9~6.10	510	村瀬	(賣)西京丘不動産	共同住宅新築	原因者	H27.3553
2	RJ700	平城京跡(左京八条一坊四坪)	西九条町五丁目1番1号	H28.5.23~6.10	176	安井	奈良交通(株)	工事増築	原因者	H27.3411
3	RJ701	平城京跡(右京五条四坊八坪)	大森西町167-1、167-6	H28.6.1~8.30	538	池田・水野	奈良市長	現存駄駄南作付地区南整理社会資本整備総合交付事業	公共	H27.3145
4	RJ702	平城京跡(右京四条四坊四坪)	平松三丁目212番の1の一部	H28.5.23~5.26	60	鍛方・水野	(株)八洲エイジメント	宅地造成	原因者	H27.3526
5	RJ703	平城京跡(左京四条三坊二丁一十三坪)	三条松町403番1の一部	H28.6.26~7.1	120	村瀬	(株)八洲エイジメント	宅地造成	原因者	H28.3032
6	RJ704	平城京跡(左京二条三坊一八坪)	法華寺町349番、350番	H28.7.19~8.10	212	村瀬	個人	宅地造成	原因者	H28.3045
7	RJ705	平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松庵寺	平松五丁目645番、647番1、647番2、648番1、653番3、666番	H28.9.1~9.16	144	池田	(株)ヤマトロー・ボレーシヨン	宅地造成	原因者	H28.3101
8	RJ706	平城京跡(右京四条三坊三十三坪・西三街大路)	平松一丁目98番-1の一部	H28.9.28~10.3	68	村瀬	(株)八洲エイジメント	宅地造成	原因者	H28.3293
9	RJ707	平城京跡(左京三条五坊十九坪)・奈良町遭跡	芝辻町858番41、858番42	H28.10.13~10.20	153.5	鍛方	個人	共同住宅新築	原因者	H28.3299
10	RJ708	平城京跡(左京二条四坊一丁)	法蓮町363番1、364番1、365番1	H28.12.26~12.31	2922	鍛方・池田・水野	パチホーム(株)	共同住宅新築	原因者	H28.3336
11	RJ709	平城京跡(左京八条四坊三坪)	東九条町577-1、577-3	H29.3.15~3.24	60	池田・安井・村瀬	(株)You&I ボレーシヨン	宅地造成	原因者	H28.3481
12	DA139	史跡大安寺田殿内	東九条町1295-2他	H28.8.3~11.2	206	原田・吉田	奈良市教育委員会 教育長	組織認調査	緊急	H28.1010
13	DA140	史跡大安寺田殿内	大安寺二丁目1147、1148番1、1148-2	H28.7.25~9.1	130.5	鍛方	奈良市長	水路改修	公共	H27.1007
14	DA141	史跡大安寺田殿内・杉山古墳	大安寺二丁目1073-2、1076-2他	H28.10.24~10.28	16.5	水野	個人	食庫解体・廻丸新築	緊急	H28.1079
15	DA142	史跡大安寺田殿内	東九条町1159-1~3・4・5、1160-1、1161-1	H28.11.28~12.27	150	村瀬	奈良市長	史跡大安寺田殿内保存整備事業	公共	H28.1010
16	SD36	西大寺跡	西大寺南町3-7、3-8、3-11	H28.6.15~8.9	494	安井	奈良市長	西大寺駄駄南作地区土地区画整理社会資本整備総合交付事業	公共	S63.3056
17	SD37	西大寺跡	西大寺南町2-8	H28.9.5~10.7	170	安井	奈良市長	西大寺駄駄南作地区土地区画整理社会資本整備総合交付事業	公共	S63.3056
18	NR3	奈良町遭跡	紀寺町864番1	H28.6.13	9	鍛方・池田	(医)まえだ整形外科	医院新築	原因者	H28.3024
19	NR4	奈良町遭跡	村屋町15番1の一部	H29.1.11~1.13	68	池田・村瀬	リアルアセット(株)	宅地造成	原因者	H28.3370

平成28(2016)年度実施 小規模調査・試掘調査一覧

次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積(m ²)	届出者	事業内容	届出受理番号
2016-1	平城京跡(左京西条五坊十丁)	杉ヶ町51-8	H28.4.22	9.7	個人	共同住宅新築	H27.3568
-2	遺構現存せず	工事着工					
2016-4	高須町469-1、470-1、471-1、472-1、473-1	高須町469-1、470-1、471-1、472-1、473-1	H28.4.25~4.27	83	社会福祉法人 駿河福祉会	福祉施設新築	H27.3495
-5	平安・谷埋土から土師器・瓦が出土	基礎の変更により保存					
2016-3	敷島町遭跡	敷島町1121-118、1121-119 (大和中央土造敷島工区内)	H28.7.4~7.6	58	奈良市長	都市計画道路大和中央(敷島工区)街路改良工事	H22.4005
-6	遺構なし						
2016-4	平城京跡(右京西条四坊十丁・十三坪)	平松五丁目645番、647番1、647番2、648番1、653番3、666	H28.8.4~8.23	234	(株)ヤマトロー・ボレーシヨン	宅地造成	H28.3101
-5	奈良・平安・漢	本調査HJ705次を実施					
2016-5	菅原遭跡	菅原町689-11他	H28.9.5~9.6	96	三都住建(株)	宅地造成	H27.3488
-6	奈良・江戸・土坂	確認調査後工事着工					
2016-6	平城京跡(左京三条五坊十丁)	芝辻町858番41、858番42	H28.10.3	7.6	個人	共同住宅新築	H28.3209
-7	江戸・土坂	本調査HJ707次を実施					
2016-7	平城京跡(左京二条六坊三坪)	法蓮町14-7、14-8	H28.11.10	5	合同会社 ファーストエステート	賃貸住宅新築	H28.3235
-8	自然開川路	工事着工					
2016-8	渡邉神社前池中古墳	古市町1848番1	H29.2.1~2.28	81	古市町水利組合	太陽光発電所設置	H28.4003
-9	古墳の墳丘範囲を確認し、保存						



平成28年度 調査地位置図

目 次

第1章 平成28(2016)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告	1
1. 平城京跡(左京二条四坊十坪)の調査 第708次	3
2. 平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松庵寺の調査 第705次	22
3. 平城京跡(右京四条三坊十三坪 西三坊大路)の調査 第706次	33
4. 平城京跡(右京四条四坊四坪)の調査 第702次	34
5. 平城京跡(左京八条四坊三坪)の調査 第709次	36
6. 平城京跡(左京二条三坊一・八坪)の調査 第704次	44
7. 平城京跡(右京北辺四坊一坪・西三坊大路)の調査 第699次	50
8. 平城京跡(左京八条一坊四坪)の調査 第700次	55
9. 平城京跡(左京四条三坊十二・十三坪)の調査 第703次	58
10. 平城京跡(左京三条五坊十六坪)・奈良町遺跡の調査 第707次	60
11. 史跡大安寺旧境内の調査	61
(1) 塔院・六条大路の調査 第139次	62
(2) 塔院・七条条間路の調査 第142次	66
(3) 杉山古墳の調査 第141次	70
12. 香原遺跡の調査 2016-5次・2017-2次	71
13. 護国神社前池中古墳の調査 2016-8次	75
14. 奈良町遺跡の調査 第3次	80
15. 奈良町遺跡の調査 第4次	81
16. 平成28年度実施 遺跡有無確認踏査一覧	82
17. 平成28年度実施 工事立会一覧	82
第2章 平成28(2016)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	91
第3章 <資料報告>香原東遺跡出土石見型埴輪の検討	101

第1章 平成28(2018)年度埋蔵文化財発掘調査概要報告

I. 平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査 第708次

事業名 共同住宅新築	調査期間 平成28年12月26日～平成29年6月14日
通知者名 バナホーム株式会社	調査面積 2,923m ²
調査地 法蓮町363番1、364番1、365番1	調査担当者 鎌方正樹・池田裕英・吉田朋史・永野智子

I はじめに

調査地は平城京の条坊復元では左京二条四坊十坪にあたる。調査地の西側では昭和63年に市HJ第157次調査、平成元年に市HJ第174次調査を実施し、奈良時代前半には、隣接する一・二・七・八坪に四坪（町）利用の役所ないし邸宅が存在した可能性が考えられている。奈良時代中頃には坪境小路を設けて、一・二坪が単独で利用され、奈良時代後半は再び坪境小路を廃して二坪（町）以上が一体で利用されたことが判明した。このような条坊造構の存廃を伴う造構変遷は左京三条二坊一・二・七・八坪に存在した長屋王邸での造構変遷に類似しており注目される。市HJ第157次調査では、平安時代後半～鎌倉時代初頭の造構も検出し、井戸からは馬具（轡）なども出土している。この時期の調査地周辺は興福寺領莊園佐保田庄に含まれていたとみられ、それとの関連が考えられる中世の遺跡の広がりも確認できる。また、南の十一坪で平成元年に実施した市HJ第180次調査では、奈良時代の井戸から甲斐国で作られた土器が多く出土しており、甲斐国との調査があったとする考えもある（異2010）。

このようなことから、今回の調査でも奈良時代～平安時代前半の造構と平安時代後半～鎌倉時代初頭の造構が存在することを念頭に、平城京期の宅地のあり方や平安時代以降の土地利用の変遷を明らかにすることを目的とした。調査は排土置き場確保のため南北2回に分けて実施した。（図絵1・2参照）

（池田裕英）

II 基本層序

調査地が広く、発掘区内の層序は場所により異なる。北半では造成土（厚さ0.4m）、耕土（厚さ0.2m）、床土である暗灰黄色極細粒砂（厚さ0.1m）、灰色中粒砂混粘土（厚さ0.1m）と続き、現地表面から約0.7mで黄褐色シルトもしくは灰色粗粒砂の地山に至る。南半では床土の下に灰褐色小礫混シルト（厚さ0.1m）、暗灰色極細粒砂もしくは灰白色極細粒砂（厚さ0.1m）と続き、現地表面から約1.0mで黄褐色シルトもしくは黒褐色粘土を主とする地山に至る。地山上面の標高は北が66.4m、南が66.1mで南に向かって緩やかに下がる。



HJ 708次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

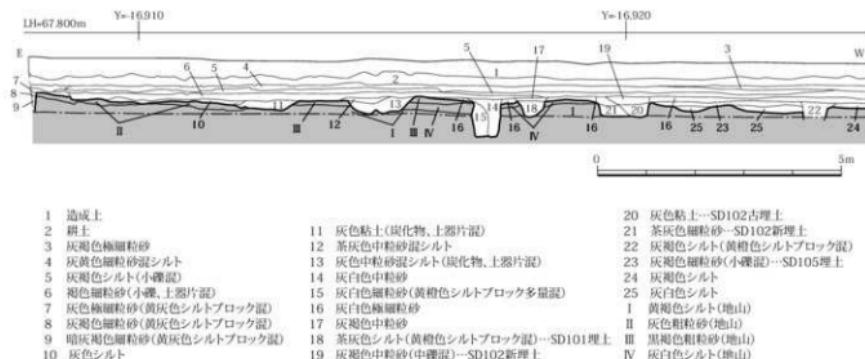


左京二条四坊十坪 坪割図 (1/2,000)

III 検出遺構

今回の調査で見つかった遺構は、掘立柱建物40棟、掘立柱解14条、素掘り溝19条、井戸11基、土坑13基である。重複関係や出土遺物から大きく3時期の変遷が考えられる。遺構の規模等の詳細は一覧表に示し、ここでは主要な遺構の概要と時期区分について記す。

建物 SB201は、身舎の桁行1間以上(2.7m)、梁行3間(8.1m)の東西棟南廂付建物である。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.7m等間、廂の出は4.2mである。身舎の柱穴掘方は一辺1.5mであるのに対し、検出面からの深さは0.3～0.6mと浅い。身舎の柱穴底部には枕



木を十字に組む。枕木上部には、径約0.5mの柱当たりの痕跡があり、その周囲に拳大の礫を充填する。

SB204は、桁行6間(14.4m)、梁行2間(3.6m)の南北棟建物である。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行1.8m等間、検出面からの柱穴の深さは0.7~0.8mである。重複関係からSA203より古い。

SB211は、身舎の桁行5間(12.0m)、梁行2間(5.4m)の東西棟四面廻付建物である。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行2.7m等間。廻の出は東西および北面が3.0mであるのにに対し、南面は3.6mと長い。身舎の柱穴は廻の柱穴よりも大きく、検出面からの柱穴の深さは身舎が0.7~1.0m、廻が0.3~0.5mである。SB211の南側には桁行5間(12.0m)、梁行2間(3.0m)の東西棟掘立柱建物SB210がSB211の身舎と柱筋を揃えて建つ。柱間寸法は桁行2.4m等間、梁行1.5m等間。SB210・211の間隔は2.7mと狭いことから、両棟は二棟一体で利用されたものと考える。類似した構造の建物は平城宮西宮や左京三条二坊の長屋王邸でも見つかっている。SB211の身舎北側柱東端の柱穴と、SB210の西端含め3つ目(南北とも)の柱穴底部には、長さ約0.35m、幅0.25m、高さ0.15mの直方体の角材を置いて礎板とする。また、SB211身舎の南側柱の西端から4つ目までの柱穴と、北側柱東端の柱穴、SB210の北側柱西端と西端含め3つ目、東端の柱穴掘方内には、重複して床束とみられる小柱穴がある。床束柱穴底部には長さ約0.4m、幅約0.15mの板材を置いて礎板とする。SB211の身舎と廻の間にも床束と推定される柱穴が東西に並ぶ。SB211の西側妻柱とSB210の南側柱の西か

ら2つ目と3つ目の柱穴には、径約0.3mの柱根が残っていた。

SB212は、桁行7間(14.4m)、梁行4間(7.8m)の東西棟二面廻付建物である。柱間寸法は桁行が西から7間目までは2.1m、東端は1.8mとなり、梁行は1.8m等間である。検出面からの柱穴の深さは0.2~0.5m。重複関係からSB210・211より古い。

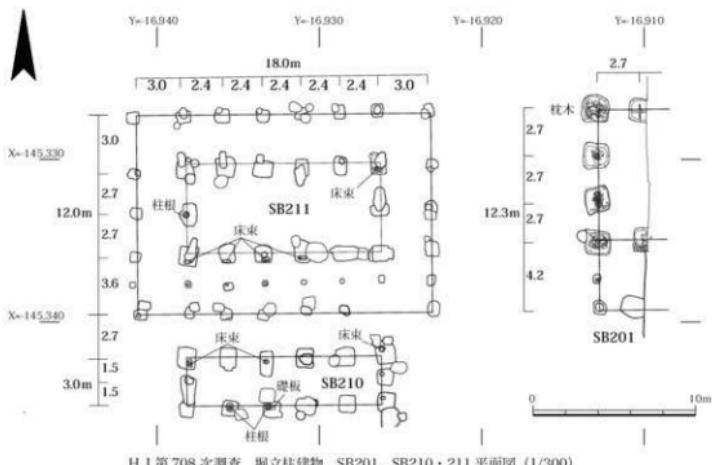
SB213は、桁行6間(16.2m)、梁行2間(4.8m)の東西棟建物である。柱間寸法は桁行2.7m等間、梁行2.4m等間である。検出面からの柱穴の深さは0.3~0.5m。重複関係からSB217より古い。東側妻柱の掘方から「宮寺」と墨書のある須恵器片が出土した。

掘立柱堀 SA206は南北方向の掘立柱堀で、11間分(23.1m)を検出した。北端は堀SA205に接続する。柱間寸法は2.1m等間である。重複関係からSD101よりも古い。

SA203は坪の東西1/2分割ラインにある南北9間(21.6m)の掘立柱堀である。北端は東西堀SA202・SA220に接続する。9間より南には続かず、堀の南は開口部となる。柱間寸法は2.4m等間、検出面からの柱穴の深さは0.7~0.9mである。

SA202は、東西堀SA220に接続する。両者とも柱間寸法は2.1m等間だが、SA202のはうが柱穴の規模が大きく、SA202の柱穴掘方は開丸方形であるのに対し、SA220はやや不整形であることから、両者は一連で建てられたものではない。SA220の西端は南北堀SA219に接続する。

SA219は坪の東西1/4分割ラインにある。柱間寸法



は2.4 m等間である。7間分を検出したが、今回の発掘区の8m南で行った市HJ第549次調査でも、これに続く柱穴を確認している。北端は発掘区北西隅の拡張部で延長上にある柱穴を確認しており(X=-145.282mライン上)、検出長はあわせて74mとなる。

SA250は東西方向の堀立柱塀で、14間分(33.6m)を検出した。柱間寸法は2.4m間である。検出面からの柱穴の深さは、地盤が砂礫層で硬い西側では0.4m程度だが、地盤が軟弱な灰白色粗粒砂や黄褐色シルトである部分では0.9m程度である。南北塀SA219との関係を確認するためSA250延長上を拡張したが、塀は坪東西1/4ライン東側(Y=-16.948m)で途切れており、以西には延びず開口部となる。重複関係からSD102・116よりも古い。

土坑 SX801は奈良三彩小壺を埋納した土坑である。南北0.22m、東西0.18mの不整円形土坑内から逆位の状態で出土した。壺はX線撮影を行ったが内部に納入物は確認できず、共伴遺物等もなかった。

溝 SD01は発掘区東端で検出した南北溝である。遺構の重複関係から奈良時代の建物より遡ることがわかる。溝は幅0.3~0.4m、深さは0.1~0.3m、方位はN0°18'55"Wである。埋土は茶灰色粘土。詳細な時期のわかる遺物の出土はなかった。この溝は南の十一坪で行った市HJ第180次調査でも見つかっており、それを中ツ道の東側溝と考える見解がある(井上2005)。

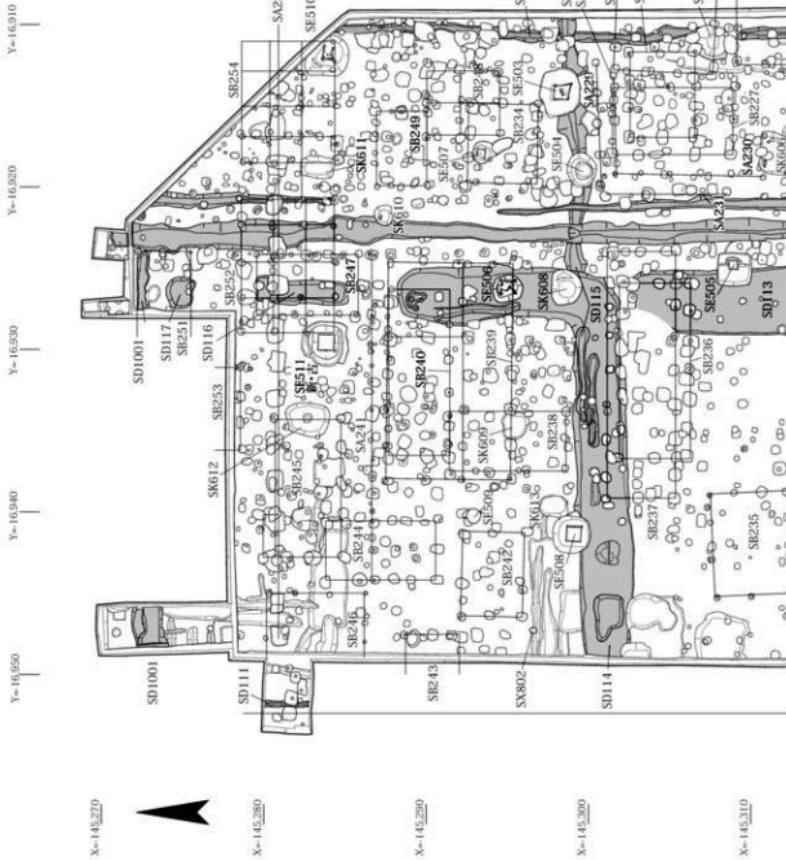
SD101・102は、坪東西1/2分割ライン上に位置す

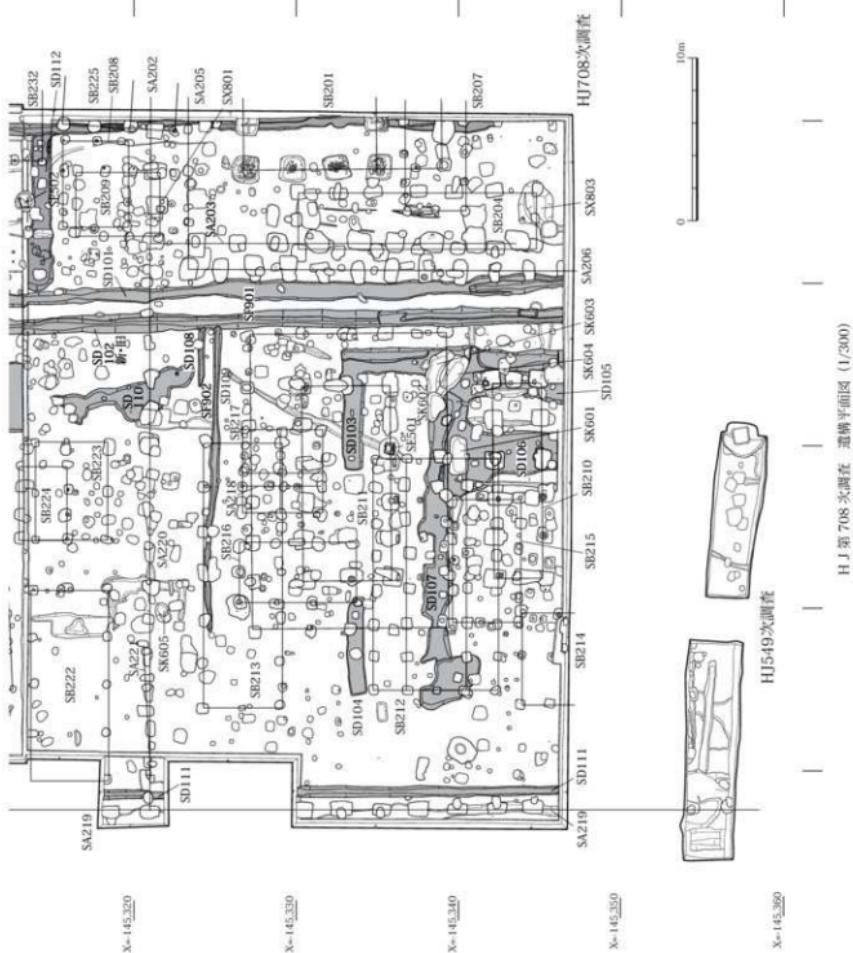


堀立柱建物 SB201 柱穴柱木検出状況 (北東から)



SB211 の柱穴断面状況および床束基礎板検出状況 (南から)







H J 第708次調査発掘区 南半全景（南から）



H J 第708次調査発掘区 北半全景（南から）



SB201 西側柱北端柱穴 枕木及び礫（東から）



建物 SB211 床東（西から）



坪内道路 SF901（南から）



溝 SD01（北東から）



井戸 SE502（南から）



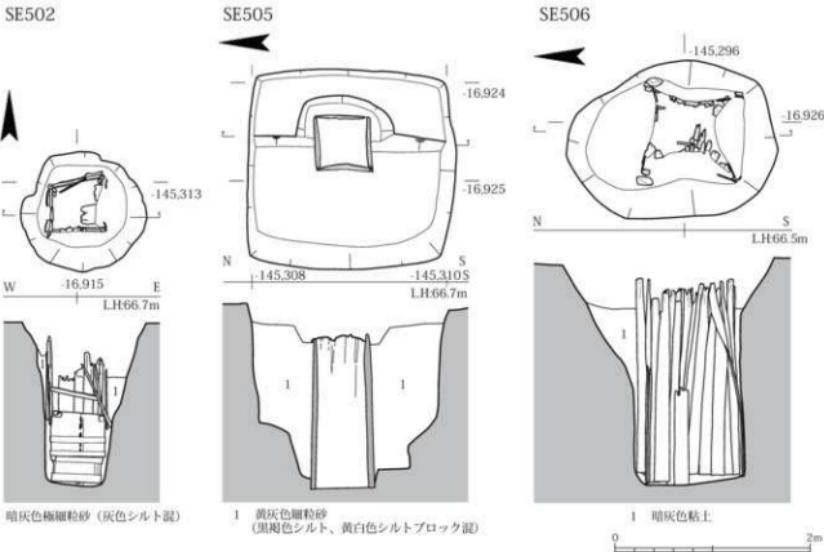
井戸 SE503（北から）



井戸 SE511（東から）



SX802 奈良三彩小壺出土状況（南から）



H J 第 708 次調査 井戸 SE 502 (左)、SE 505 (中)、SE 506 (右) 平面図・立面図 (1/50)

る坪内道路 SF901 の両側溝である。西側溝の SD102 は新古があり、SD102 新は幅 1m、深さ 0.1 ~ 0.3m、埋土は明赤褐色細粒砂である。8世紀後半の土器が出土した。SD102 古は幅 1.1m、深さ 0.6m、埋土は灰色粘土である。7世紀後半～8世紀初頭の土師器椀 C や須恵器杯 G・杯口蓋などが出土した。

SD114 は L 字形の区画溝である。幅 3m、深さは 0.25m。埋土は灰黄色砂質土である。南北方向は坪の東西 1/2 分割ラインに近い位置にあり、東西方向は坪の南北 1/4 分割ラインにある。発掘区南端には、南北方向の位置が揃う逆 L 字形の溝 SD105・107 があり、SD106 も SD107 に接続する。SD114 と SD105 の間には南北ライン上に SD110・113 が、SD114 の北側には SD116・117 がある。いずれも 8世紀後半～末の土器が出土しており、一連の区画溝と考える。

SD1001 は九・十坪間を分割する坪境道路の二条条間北小路南側溝と考える。発掘区西端で幅 1.8m、深さは 0.25m あるが、東端では削平されて幅 0.7m となり、東へ行くほど浅くなる。西端では北肩を 2 段に掘り込む。坪内道路西側溝 SD102 はこの溝を超えて 0.8m 程北に延びるが、西端の規模からみて本来は SD102 北

端まで SD1001 の北肩があったものと考える。溝心は Y=-16,947 m、X=-145,272.7 m である。溝内からは 8世紀後半の土器が出土した。重複関係から SB251 より新しい。(永野智子)

井戸 SE502 は、掘方が直径約 1.3m の平面不整円形で、深さは検出面から約 1.7m である。井戸枠は 3 段構成で、最下段に径 0.5m の、その上に径 0.55m の曲物を据え、その上に内法一辺約 0.6m の方形縦板組隅柱横枝留の枠を据えている。残存状況からみて、もう一段上部に井戸枠があった可能性も考えられる。枠内から 8世紀後半～末の土器や斎串・曲物等の木製品の他、「□六口 家作」と記された木簡が出土した。

SE503 は掘方が東西 3.0m、南北 2.5m の不整円形で、深さは検出面から約 3.0m である。掘方の中央に内法一辺約 0.85m の方形縦板組隅柱横枝留の枠を据える。枠材は残存長約 2.65m、幅 0.25 ~ 0.4m で、南側板の西端の材が建物の扉板の転用材、4 本の隅柱が柱や桁の転用材であった。横枝は 4 段分が遺存する。枠内からは 8世紀末～9世紀初頭の土器や瓦、刀子等が出土した。

SE505 は掘方が一辺約 2.1m の方形で、深さは検出面から 1.9m である。井戸枠は方形縦板組で、残存長 1.55m、

H J 708 次調査 棚出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規格(間)	桁行全長 (桁行×梁行)	梁行全長 (m)	身合柱間寸法 (m)	廻の出	柱穴の深さ (m)	備考	
SB201	東西	1以上×4	2.7以上	12.3	2.7等間	2.7等間	4.2	0.2～0.6	柱穴底部に枕木。重複関係からSD01より新しい。
SA202	東西	3以上	6.3	—	2.1等間	—	—	0.6～0.8	SA203、SA220に接続。重複関係からSB209、SX801より古い。
SA203	南北	9	22.5	—	2.5等間	—	—	0.7～0.9	SA202、SA220に接続。重複関係からSB204より新しい。
SB204	南北	6×2	14.4	3.6	2.4等間	1.8等間	—	0.7～0.8	重複関係からSA203、SX803より古い。
SA205	東西	3以上	8.1	—	2.7等間	—	—	0.3	SA206に接続。
SA206	南北	11以上	23.1	—	2.1等間	—	—	0.7～1.0	SA205に接続。重複関係からSD101より古い。
SB207	東西	3以上×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	—	0.5	重複関係からSD01より新しい。
SB208	東西	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	—	0.3～0.7	重複関係からSB209より古い。
SB209	南北	3×2	5.4	4.2	1.8等間	2.1等間	—	0.4～0.6	重複関係からSB208より新しい。
SB210	東西	5×2	12.0	3.0	2.4等間	1.5等間	—	0.7～1.0	重複関係からSB215より古く。SB212より新しい。床束あり。SB211と一体利用。
SB211	東西	7×4	18.0	12.0	2.4等間	2.7等間	東西北： 身合：0.7～ 3.0、南： 1.0、廻：0.3 3.6～0.5	重複関係からSB216、SB217、SE501、SK601、SK604より古い。床束あり。SB210と一体利用。	
SB212	東西	7×4	14.4	7.8	西から2.1- 2.1-2.1-2.1- 2.1-2.1-1.8	1.8等間	2.1	0.2～0.5	重複関係からSB210、SK601より古い。
SB213	東西	6×2	16.2	4.8	2.7等間	2.4等間	—	0.3～0.5	重複関係からSB217より古い。
SB214	南北？	1以上×2	2.1以上	5.4	2.1	2.7等間	—	0.2～0.3	
SB215	東西	5×2	7.5	4.8	1.5等間	2.4等間	—	0.2～0.4	重複関係からSB210より新しい。
SB216	南北	3×2	7.2	3.6	2.4等間	1.8等間	—	0.4	重複関係からSB211より新しい。
SB217	東西？	2×2	4.8	4.8	2.4等間	2.4等間	—	0.2～0.4	鰐柱埋跡。重複関係よりSB211、SB213より新しい。
SA218	南北	3	4.5	—	1.5等間	—	—	0.2～0.6	重複関係からSB217より新しい。
SA219	南北	11以上	74.4以上	—	2.4等間	—	—	0.5～0.8	SA220に接続。
SA220	東西	16以上	33.6以上	—	2.1等間	—	—	0.6～0.8	SA202、SA203、SA219に接続。重複関係からSD102古、SD110、SD111より新しい。
SA221	東西	5	10.5	—	2.1等間	—	—	0.2～0.6	
SB222	東西	4以上×2	12.0以上	4.8	3.0等間	2.4等間	—	0.2～0.3	
SB223	東西	2×2	6.0	4.8	3.0等間	2.4等間	—	0.2～0.3	
SB224	東西	3×2	3.0	4.5	1.5等間	1.5等間	—	0.3～0.4	
SB225	東西	1以上×3	—	6.9	—	2.1等間	2.7	0.4～0.5	重複関係からSD01より新しい。
SB226	南北	3×1以上	6.0	1.5以上	1.8-2.1-2.1	1.5	—	0.3～0.4	
SB227	南北	4×2	7.2	4.2	1.8等間	2.1等間	—	0.3～0.5	重複関係からSB228より新しい。
SB228	東西	3×2	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間	—	0.4	重複関係からSB227より古い。
SA229	東西	4	7.2	—	1.5等間	—	—	0.3	
SA230	南北	5	9.0	—	1.8等間	—	—	0.3	
SA231	南北	3	7.2	—	2.4等間	—	—	0.4	
SB232	南北	3×1以上	5.4	1.8以上	1.8等間	1.8	—	0.3～0.4	
SA233	東西	3	6.4	—	2.1等間	—	—	0.2	
SB234	東西	3×2	5.4	4.2	1.5等間	2.1等間	—	0.3～0.5	重複関係からSB248より古い。
SB235	東西	3×2	4.5	6.6	西から2.1- 2.4	2.4-2.4-1.8	—	0.2～0.3	
SB236	東西	6×2	10.8	4.2	1.8等間	2.1等間	—	0.4～0.6	重複関係からSD114より古い。
SB237	東西	8×2	15.6	4.2	西から1.5- 2.1-2.1-2.1- 2.1-2.1-2.1- 1.5	2.1等間	—	0.5～0.7	重複関係からSD114より古い。
SB238	南北	3×2	7.2	3.6	2.4等間	1.8等間	—	0.2～0.5	重複関係からSK609より新しい。
SB239	東西	6×3	13.2	7.8	西から2.1- 2.1-2.1-2.1- 2.4-2.4	2.4等間	3.0	0.2～0.4	重複関係からSD114より古く。SB240、SK609より新しい。間仕切りあり。
SB240	東西	5×2	10.5	4.2	2.1等間	2.1等間	—	0.2～0.4	重複関係からSB239、SD114より古い。
SA241	東西	11	19.8	—	1.8等間	—	—	0.2～0.4	
SB242	東西	2×2	5.3	3.6	西から2.1- 3.0	1.8等間	—	0.2～0.4	

遺構番号	棟方向	規模（間） (桁行×梁行)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	身舎柱間寸法 (m) 桁行	梁行 (m)	軒の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考	
									身舎柱間寸法 (m) 梁行	軒の出 (m)
SB243	東西	1以上×2	—	3.6	—	1.8等間	—	0.2～0.3		
SB244	南北	3×2	7.2	4.2	2.4等間	2.1等間	—	0.2～0.4		
SB245	東西	4×2	8.7	4.2	西から2.4- 2.1-2.1-2.1	2.1等間	—	0.3～0.4	北西部に入口とみられる張り出しあり。重複関係からSK611、SA250より新しい。	
SB246	東西	2以上×3	3.0以上	3.6	1.5等間	北から1.5- 2.1-2.1	—	0.1～0.2		
SB247	南北	3×2	6.3	3.6	2.1等間	1.8	—	0.2～0.6		
SB248	東西？	2×2	3.6	4.8	1.8等間	2.1等間	—	0.2～0.5	鈍柱建物。重複関係からSB234より新しい。	
SB249	東西	3×2	4.5	3.0	1.5等間	1.5等間	—	0.2～0.3	SA250、SE510より新しい。	
SA250	東西	14以上	33.6	—	2.4等間	—	—	0.4～0.9	重複関係からSB248、SB249、SB252より古い。	
SB251	東西	1以上×2	2.1以上	3.0	2.1	1.5等間	—	0.4～0.5	重複関係からSD102（新）。SD117より古い。	
SB252	東西	4×3	8.1	5.7	西から2.1- 2.4-2.1-1.5	北から2.1- 1.5-2.1	—	0.3～0.4	鈍柱建物。重複関係からSA250、SD101、SD102（新）、SD116、SE511より新しい。	
SB253	東西	3×1以上	5.4	—	1.8等間	—	—	0.3		
SB254	東西	4以上×3	7.8	5.4	西から2.4- 1.8-1.8-1.8	1.8等間	—	0.2～0.5	重複関係からSA250、SE510より新しい。	

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な遺物	備考
SK601	隅丸方形	南北 1.1×東西 2.4	0.3	8世紀後半	土師器杯 A・皿 A・碗 C・甕、須恵器杯 A・ 杯 B・蓋・皿 B・蓋・甕・高杯・壺	重複関係からSB211、SB212より新しい。SD106より古い。
SK602	不整円形	南北 1.1×東西 1.8	0.35		土師器壺 B 3点	重複関係からSD107より古い。
SK603	不整円形	南北 1.4×東西 2.8	0.55	8世紀後半～末	土師器杯 B・甕・須恵器杯 B・杯 B 直	重複関係からSD105より古い。
SK604	不整円形	南北 1.7×東西 2.0	0.6	8世紀後半	土師器皿 A・須恵器杯 A	重複関係からSD105より古い。
SK605	不整円形	南北 0.9×東西 1.2	0.25	8世紀後半	土師器杯 A・杯 B・皿 A・甕 C・甕 B・ 甕 B・須恵器杯 A・杯 B・杯 B 直・皿 A・皿 A 蓋	
SK606	隅丸方形	南北 2.8×東西 2.5	0.15	8世紀後半～末	土師器杯 A・杯 B・皿 A・皿 C・甕 A・ 甕 B・高杯 A・須恵器杯 A・杯 B・杯 蓋・皿 A・壺 B・甕 C・甕 A・蓋・ 軒丸瓦 G313C	
SK607	不整円形	南北 1.7×東西 2.2	0.6		土師器細片	重複関係からSD01より新しい。
SK608	隅丸方形	南北 1.9×東西 2.1	1.5	8世紀中頃～後半	須恵器杯 A	重複関係からSD114より古い。
SK609	不整円形	南北 1.6×東西 1.7	1.1	8世紀中頃～後半	土師器皿 A・須恵器杯 B	
SK610	不整円形	南北 1.2×東西 1.2	0.2	12世紀後半	土師器羽釜・瓦罐	重複関係からSD102新より新しい。
SK611	隅丸方形	南北 2.1×東西 1.3	0.3	8世紀	土師器杯・甕・須恵器杯・甕・壺 Q	
SK612	不整円形	南北 2.7×東西 2.1	0.2	8世紀後半	土師器皿 A・碗 A・甕・大型蓋・鍋・ 須恵器杯 B・杯 B 直・甕・壺 E・甕 A	重複関係からSB245より古い。
SK613	楕円形	南北 1.7×東西 1.25	1.1	8世紀	土師器杯・甕・須恵器杯 B 直	
SX801	円形	南北 0.25×東西 0.3	0.3	8世紀末～9世紀初頭	須恵器壺 M	重複関係からSA202より新しい。
SX802	不整円形	南北 0.2×東西 0.2	0.1		奈良三彩小窓	
SX803	不整円形			8世紀後半	土師器杯 A・皿 A・碗 C・甕 A・甕 B・ 甕 B・杯 B 直・皿 A・皿 B・甕 A・ 甕 G・甕 C	
SD01	南北溝	長 58以上、幅 0.3～0.4	0.1～ 0.3		—	重複関係からSB201、SA202、 SB207、SH225、SD112、 SD115、SK609より古い。
SD101	南北溝	長 73以上×幅 1.0	0.3	8世紀後半	土師器杯 A・皿 A・皿 C・碗 A・甕 A・ 甕 B・須恵器杯 A・杯 B・杯 B 直・甕 A・ 甕 B・甕 C	重複関係からSA206、SA250より新しい。SH248より古い。
SD102	南北溝	新：長 75.5以上×幅 1.0 古：長 48.0以上×幅 1.1	0.1～ 0.3、 古：0.6	(新) 8世紀後半 (古) 7世紀後半～ 8世紀初期	(新) 土師器杯 A・皿 A・碗 A・甕 A・高杯・ 甕・須恵器杯 A・杯 B・杯 B 直・皿 A・ 甕 A・甕 N・甕・平瓶 (古) 土師器杯 C・須恵器杯 H・杯 B・ 杯 B 直・甕 B	重複関係からSA250より新は新しく、旧は古い。
SD103	L字形溝	南北長 13.7、東西長 7.5 幅 1.2	0.4	8世紀後半～末	土師器杯 A・皿 A・碗 A・甕 A・甕 B・ 甕 A・須恵器杯 A・杯 B・杯 B 直・皿 B・ 甕 A・甕 B	重複関係からSB211より新しい。
SD104	東西溝	長 6.2×幅 1.0	0.15		土師器杯 A・甕 A・甕 C	重複関係からSB211より新しい。
SD105	南北溝	長 6.0以上×幅 3.2	0.1	8世紀末～9世紀初頭	土師器杯 A・皿 A・甕・須恵器杯 A・ 杯 B・杯 B 直・甕 C	重複関係からSB210、SD103より新しい。

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な遺物	備考
SD106	南北溝	長 6.0 以上 × 幅 3.5	0.1	8世紀末～9世紀初頭	土師器杯 B・皿 A・甕、須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・壺 A・壺 M・平瓶	重複関係から SB210、SK601より新しい
SD107	東西溝	長 22.0 × 幅 1.8	0.2	8世紀後半～末	土師器皿 A・壺 B、須恵器皿 A・壺 D・壺 M	重複関係から SB211、SB212、SH215、SK601、SK602、SK603・SK604より新しい
SD108	東西溝	長 18.5 × 幅 0.3	0.1		—	重複関係から SB213より新しい
SD109	東西溝	長 3.5 × 幅 0.3	0.1		—	—
SD110	南北溝	長 8.5 × 幅 2.2	0.1	8世紀後半～末	土師器皿 B・皿 A・甕、須恵器皿 B・杯 B 盖	重複関係から SA220より新しい
SD111	南北溝	長 6.6 以上 × 幅 0.6	0.3		土師器皿、蓋、須恵器皿 A・砵 D	重複関係から SA220より古い
SD112	東西溝	長 10.9 以上 × 幅 1.1	0.1	8世紀末～9世紀初頭	土師器皿 A・甕、須恵器皿 B・砵 D・甕 M・奈良三彩盃・軒平瓦 6712E	重複関係から SD01より新しい
SD113	南北溝	長 10.5 × 幅 4.0	0.1	8世紀末～9世紀初頭	土師器皿 A・杯 B・椀 A・皿 A・甕・壺・高杯 A・壺 D・須恵器皿 A・杯 B・杯 B・杯 B 盖・甕 C・壺 L・壺 A・蓋・円面鏡	重複関係から SB236、SB237、SE505より新しい
SD114	L字形溝	南北 13.6 × 東西 23.0 以上、幅 3.0	0.2	8世紀末～9世紀初頭	土師器皿 A・皿 A・壺 A・甕 A・甕、高杯、須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・壺・壺 A・蓋	重複関係から SE170、SK608、SH236、SH237、SH239、SB240より新しい、SE509より古い
SD115	東西溝	長 24.5 以上 × 幅 1.0 ～ 1.8	0.45		土師器皿・甕	重複関係から SE503、SE504、SD114より古い。西端は SD114に削平される
SD116	南北溝	長 6.0 × 幅 1.7	0.1	8世紀後半～末？	土師器皿 A・須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・壺 C・壺 A	重複関係から SA250より新しい SB252より古い
SD117	南北溝？南北 1.3、東西 2.0	0.1				重複関係から SB051より新しい
SD1001	東西溝	長 25.5 以上 × 幅 1.9	0.3	8世紀後半～末	土師器皿 A・皿 A・皿 C・甕、須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・甕	

遺構番号	掘方等		井戸等		時期	主な遺物	
	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法 (内法 と 透過設置 等)		
SE501	不整円形	南北 1.2、東西 1.3	1.3	方形縦板組 隅柱横枝留	0.55 曲物 2段	8世紀後半～末	枠内：土師器皿 A・杯 B・杯 B 盖・皿 A・甕、須恵器皿 B・杯 B 盖・皿 A・甕、墨書き器 掘方：須恵器皿 B・杯 B 盖
SE502	円形	南北 1.3、東西 1.3	1.7	方形縦板組 隅柱横枝留	0.6 曲物 2段	8世紀後半～末	枠内：土師器皿 A・皿 A・椀 C・甕・盤 B、須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・甕 A・蓋、人面墨書き器、木筒、筒串、曲物、銘前、軒丸瓦 6301・6664 掘方：須恵器皿 B・甕 A
SE503	不整円形	東西 3.0、南北 2.5	2.95	方形縦板組 隅柱横枝留 (側板・隅柱に 転用材)	0.85 —	8世紀末～ 9世紀初頭	枠内：土師器皿 A・杯 B・椀 A・高杯・甕、須恵器皿 B・杯 B 盖・甕 A・蓋、壺 C・壺 B・壺 A・蓋、黑色土器 A・壺瓶、土瓶、刀子、漆器蓋、軒丸瓦 6143A・6320A・軒平瓦 6679A・東大寺 331C 掘方：土師器皿 A・杯 B・高杯・甕
SE504	円形	南北 1.8、東西 2.0	0.95	抜き取られている	—	12世紀後半	土師器皿・羽釜、下駄
SE505	隅丸方形	南北 2.1、東西 2.1	1.9	方形縦板組	0.5 —	8世紀後半	枠内：土師器皿 A・皿 A・盤 A・甕 A、須恵器皿 B・杯 B 盖・甕 A・蓋、壺 G、墨書き器「七合・一飯」、甕、査斗、萬年通寶 掘方：土師器皿 A・甕、須恵器皿・甕
SE506	不整円形	東西 1.6、南北 2.1	2.1	方形縦板組 隅柱横枝留	0.9 —	8世紀中頃～ 後半	枠内：土師器皿 A・杯 B・皿 A・椀 A・椀 C・壺 B・甕 A・甕 A・甕 B・甕 C・壺 L・壺 A・蓋・鋸 A・鋸 D・平瓶、墨書き器「多可」、「象足」、筒形甕、土瓶、甕、有孔凹肚本体品、木製蓋、和同開跡 掘方：土師器皿・高杯・甕、須恵器皿・甕
SE507	不整円形	南北 1.4、東西 1.3	2.0	方形縦板組 横枝留	0.5 —	8世紀後半～末	枠内：土師器皿 A・椀 A、須恵器皿 B 盖・皿 A・甕・平瓶、曲物、軒丸瓦 6012Aa
SE508	隅丸方形	南北 2.3、東西 2.3	1.1	方形横板組	0.85 —	9世紀前半	枠内：土師器皿 A・杯 B・皿 A・椀 A、須恵器皿 B・杯 B 盖・甕 B・甕 C・高杯・甕 掘方：土師器皿 A・杯 B・皿 A、須恵器皿 B・杯 B 盖・甕 B・甕 C・高杯・甕
SE509	不整円形	南北 0.9、東西 1.15	1.4	抜き取られている	—	8世紀後半～末	須恵器皿 A・杯 B・皿 A・平瓶・甕
SE510	不整円形	南北 2.6、東西 2.55	2.65	方形縦板組 隅柱横枝留	0.7 —	8世紀後半～ 9世紀末～9世紀 初頭	抜取：土師器皿 A・杯 B・須恵器皿 A・杯 B・甕 A・甕 M・灰釉陶器 枠内：土師器皿 A・杯 B・皿 A・椀 A・甕 A・高杯 A・鋸 A・鋸 D・須恵器皿・杯・甕・甕・壺・漆器蓋、軒平瓦 6712E 掘方：土師器皿 A・杯 B・須恵器皿 B・杯 B 盖・甕 A・甕 B・甕 C・高杯・甕 軒平瓦 6691A・6712C・6732C
SE511	隅丸方形	東西 2.5、南北 2.2	2.5	方形横板組	1.05 —	9世紀後半	枠内：土師器皿 A・杯 B・皿 B・杯 C・皿 C・椀 A・甕、須恵器皿 A・杯 B・杯 B 盖・甕 A・甕 B・甕 C・高杯・甕・黑色土器 A・壺瓶、灰釉陶器皿、和同開跡、釣、ガラス埠塙、軒平瓦 6691A・6712C・6732C

幅0.5～0.6m、厚さ0.05～0.06mの一枚板を組んだものである。四隅の仕口を相欠により組み合わせている。枠内から8世紀後半の土器が出土した。

SE506はSD114と重複して検出した井戸で、重複関係からSD114より古い。掘方は東西1.6m、南北2.1mの不整円形で、深さは検出面から2.25mである。枠は内法約1.0mの方形縦板組隅柱横桟留で、残存長1.9～2.0m、幅0.08～0.1m、厚さ0.03mの板を立て並べている。隅柱に穿たれた横桟を差し込むための枘穴数から横桟は2段あったとみられるが、すべて落下していく原位置をとどめるものはなかった。枠内から8世紀中頃～後半の土器、形象観、和同開称等が出土した。

SE511新は掘方が東西2.5m、南北2.2mの不整円形で、深さは検出面から約2.5mである。井戸枠は内法一辺1.05mの横板組で、8段分が残存した。横板は長さ約1.15m、幅約0.25～0.3m、厚さ0.05～0.06mである。横板の上下に太柄等はみられず、重ねて積んでいるのみである。四隅は相欠き仕口である。東面の上から4枚目と、西面の上から3枚目に「◎」の印が三個一组で認められる。上から4段分とそれ以下で枠にややズレがみられるが、意図的なものかどうかはわからない。掘方から和同開称や奈良へ平安時代の土器、枠内から9世紀後半の土器が出土した。この掘方と重複してもう一回り大きい南北2.95m、東西約2.4mの隅丸形の掘方があり、この井戸より古い時期の井戸SE511古の掘方の可能性が考えられたが、掘削途中で掘方埋土が崩落し、遺物を採取できなかつたこともあり、詳細や時期は不明である。

（池田裕英）

IV 出土遺物

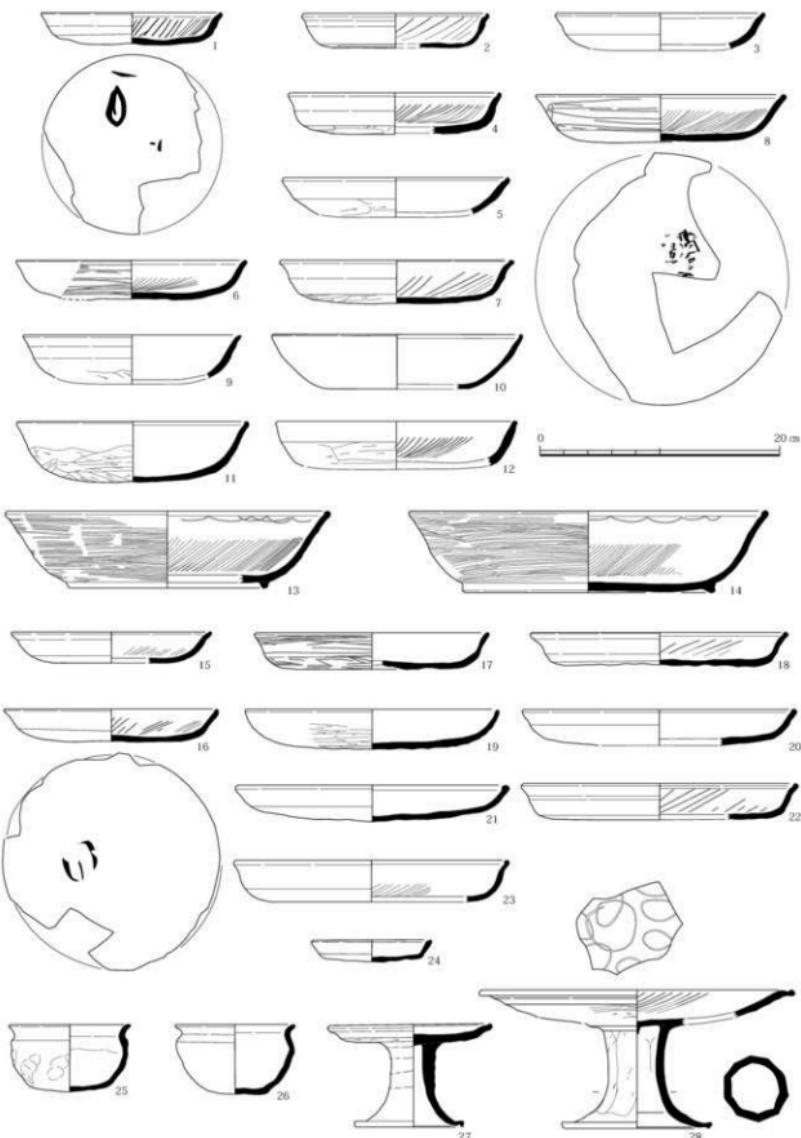
今回の発掘調査では、遺物整理箱にして220箱の遺物が出土した。それらの中には弥生時代の土器・石包丁、7世紀後半～8世紀初頭の須恵器・土師器、8世紀～9世紀後半の土器（土師器・須恵器・黒色土器・奈良三彩・綠釉陶器・灰釉陶器・製塙土器）、土製品（甕・硯・土馬）、瓦埠類（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・埠）、木製品（舟串・有孔円盤状木製品・曲物・漆器蓋）、金属製品（刀子・鏡前・鉄釘）、錢貨（和同開称・萬年通寶）、硯・木筒、12世紀後半の土器（土師器・瓦器）、木製品（下駄）などがある。弥生時代の遺物は極少量である。以下、主要遺物について報告する。

SE506出土土器（1～80、口絵3） 土師器には杯A（1～12）、杯B（13～14）、皿A（15～23）、皿C（24）、壺B（25～26）、高杯（27～28）、椀A（29～36）、椀C（37～40）、鉢A、鉢B（41）、鍋B（42）、甕A（44

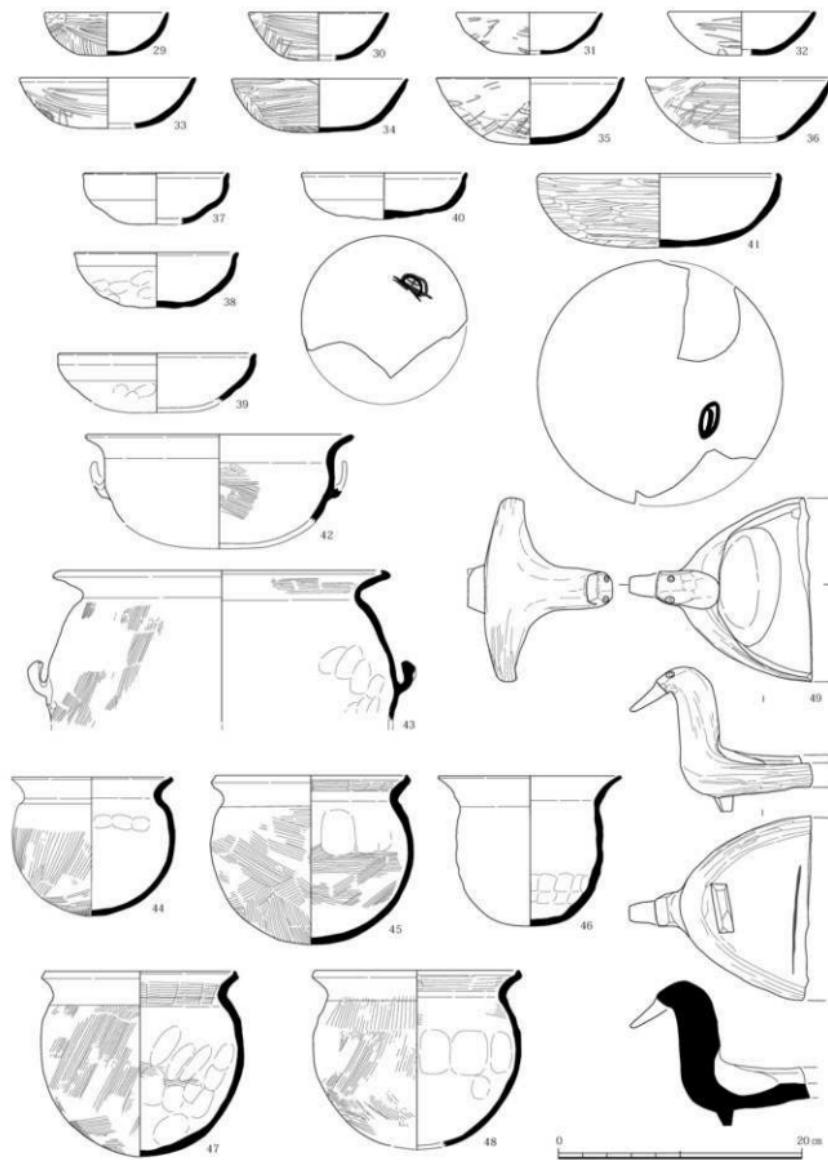
～48）、甕B（43）がある。杯Aは口径13.0～15.5cmのもの（1、2）と、17.0～21.0cmのもの（3～12）に分けられ、後者は器高の高低からさらに2群に分けられる（3～8：径口指数19.3～19.8、9～12：同20.3～26.3）。内面は1段の放射状暗文を施すものと、暗文がないものがある。調整技法は、底部外面をヘラケズリし、口縁部にヨコナデを施すbo手法のものが多く、底部外面をナデ調整するao手法やミガキを施すai手法のものもある。1は底部外面に「〇」と「八」の墨書がある。「〇」の墨書がある土器は同遺構からほかに6点出土している（16・41・59）。8も底部に墨書があるが判読できない。皿Aは口径15.0～19.5cmのもの（15～17）と、19.5～26.5cmのもの（18～23）があるが、22cm台のものが多い。内面は杯Aと同じく1段の放射状暗文を施すものと、暗文がないものがある。調整技法は、ao手法のものが多く、bo手法やa3手法のものもある。外面全体にヘラケズリを施すco手法は破片が2点あるのみである。27の高杯はロクロ成形である。杯部外面に筆ならしとみられる墨痕がある。椀Aは口径10.0～12.0cmのもの（29～32）と、14.0～16.0cmのもの（33～36）があるが、15cm代のものが多い。40は底部外面に墨書があり、記号状のものが重ね書きされている。41は鉢Bで外面には密にヘラミガキを施す。甕は丸底短脚で口縁部を上部につまみ出し、外面をハケ調整するもの（44、45、47、48）が大半である。46は口縁端部を丸くおさめ、体部外面はナデもしくは板ナデ調整である。

49は鳥形の形象硯（口絵5）。側面および鳥の首部分にはヘラミガキを施す。底部には方形の脚部が横方向に貼り付けられている。底部中央には筆ならしの痕跡がある。

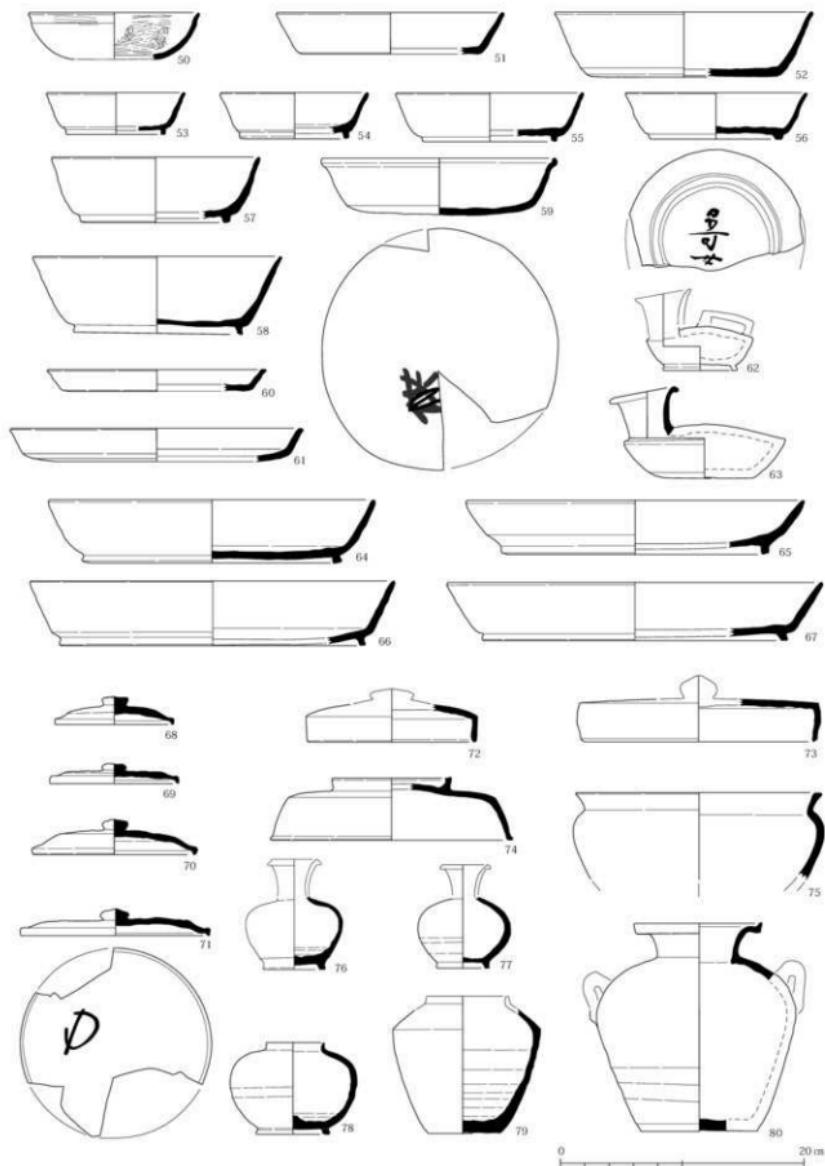
須恵器には杯A（51・52）、杯B（53～58）、杯C（59）、皿A（60、61）、皿B（64～67）、平瓶（62・63）、杯B蓋（68～71）、壺A蓋（72・73）、蓋（74）、壺L（76・77）、壺B（79）、壺（78）、鉢A、鉢D（75）、壺N（80）がある。土師器に比べて出土量が少ない。杯Aは径口指数18.5の浅いもの（51）と25.2の深いものがある。杯Bは口径11.0～12.0cm（径口指数30.0～30.2）、14.4～15.5cm（径口指数25.5～26.5）、16.8cm、20.2cmのものがあり、高台はやや内よりもつき、直立ぎみになる。52と64は硯として転用されている。56には底部外面に「多可女」の墨書がある。59は杯Cで、底部外面に墨書があり、「供」と記した上に1と同様の墨書を重ね書きしている。71の杯B蓋は内面に40と同様の墨書がある。74は環状のつまみがつく蓋で、焼



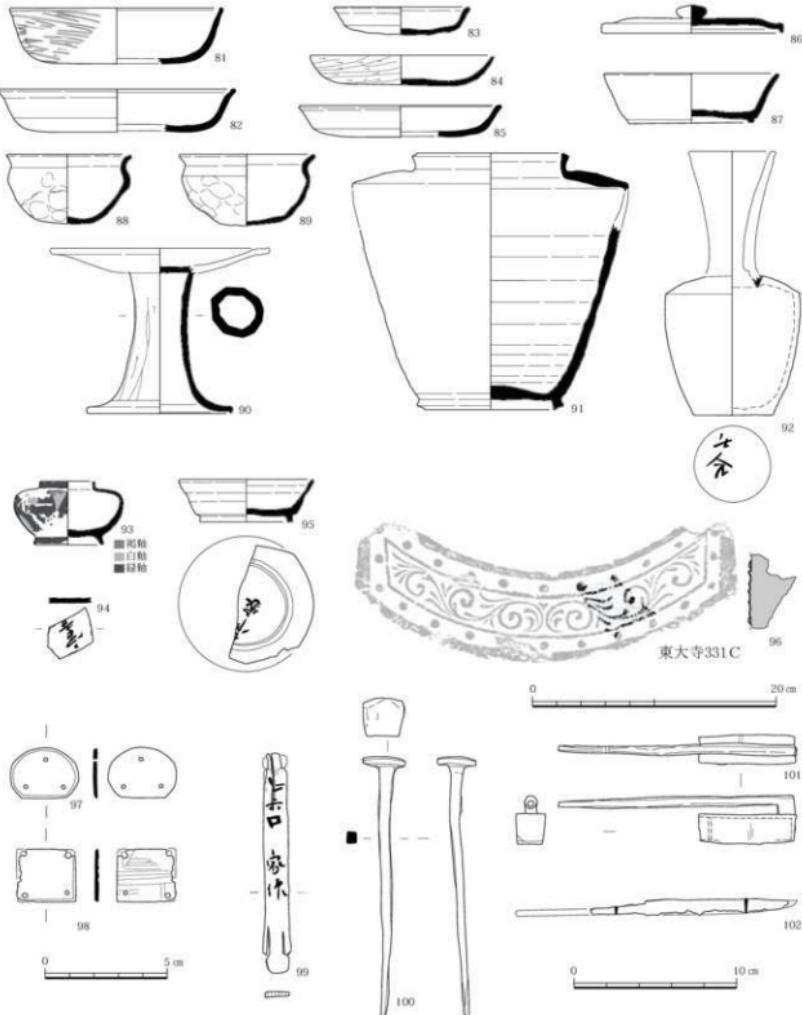
HJ第708次調査 井戸SE506出土土器 (1/4)



H J 第708次調査 井戸SE506出土土器および硯 (1/4)



HJ第708次調査 井戸SE506出土土器 (1/4)



HJ 第708次調査 井戸 SE505 棚内出土土器、奈良三彩小壺、墨書き土器、軒平瓦、木筒、金属製品
(81～96: 1/4, 97・98: 1/2, 99～102: 1/3)

成があまく暗灰色を呈する。76～80の壺の底部はいすれもヘラ切りである。

黒色土器は1点出土した。50はA類の椀で、内面には輪状の暗文を施す。内面および口縁部外側にはミガキを施す。

10, 14, 52, 54, 55, 57, 58, 61, 65, 70, 71は井戸枠の抜取、その他は枠内から出土した。

SE505出土土器(81～92) 土師器には杯A(81、82)、皿C(83)、皿A(84、85)、壺B(88、89)、高杯A(90)、甌がある。杯Aにはa3手法のものが2点、

ao 手法のものが2点あり、口径は17.2～20.0cm程度である。皿Aはao手法のものが2点、bo手法のものが1点、co手法のものが2点ある。須恵器には杯B蓋(86)、杯B(87)、壺B(91)、壺K(92)がある。91の壺Bは暗赤褐色を呈し、胎土には長石粒を含む。外面および底部内面には降灰の痕跡が残る。92は底部外面に糸切痕と「七合」の墨書きがある。容量は肩部まで670mlである。81～92はいずれも枠内出土である。

その他の出土遺物（93～101） その他の出土遺物で特筆すべきものについて記す。93はSX802から出土した奈良三彩小壺（口絵4）で、肩が大きく張る形状をなす。外面に縁軸・褐軸・白軸の三彩を施す。胎土は灰白色で、白色・黒色粒を少量含む。

94は後述のII-1期の中心建物SB213の東側妻柱掘方から出土した須恵器杯である。底部外面に「宮寺」の墨書きがある。「宮寺」といえば、藤原不比等の邸宅を不比等の死後、光明皇后が相続し寺としたもので、「続日本紀」天平17年（745）5月11日条に「旧皇后宮為宮寺也」とある。95はSX803から出土した須恵器杯Bで、底部外面に「菅家」の墨書きがある。97は丸柄の、98は巡方の裏金具で、いずれもSE501枠内から出土した。97は長さ2.05cm、幅2.8cm、厚さ0.15cmで、周縁を面取りする。表面には黒漆がわずかに残る。98は長さ2.2cm、幅2.4cm、厚さ0.1cmで、周縁を面取りする。99はSE502から出土した木筒で、「<□六口 家作」とある。長さ136mm、幅16mm、厚さ3mmである。付札木筒で、上部・下部とともに側面に切り込みがあるが、上部左側面は欠損する。

100は鉄製の方頭釘で、SE511枠内から出土した。長さ16.0cmで、断面は方形である。101はSE502枠内から出土した鋸前の牝金具である。弦部は筒部の上面端部に取りつき、筒部中央には刺線による節帯を設ける。102はSE503枠内から出土した刀子である。残存長12.2cm、幅は刃元で0.9cmである。（永野智子）

瓦壩類 遺物整理箱で39箱分出土した。その大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦21点、軒平瓦17点、面戸瓦1点、文字瓦3点、施釉瓦1点、埠39点を含む。

軒丸瓦の内訳は、6012Aa・6130A・6138F・6143A・6285A・6285種別不明・6301B・6301種別不明・6313C・6320Ac・6320Aが各1点、型式不明10点である。

軒平瓦の内訳は、6572A 2点・6664I 1点・6668A 1点・6679A 2点・6682A 1点・6691A 1点・6712E 2点・6721C 1点・6732A 1点・6732C 1点・6760A 1点・東大寺331C 1点・型式不明2点である。

SE503掘方から出土した東大寺331C（96）は、東大寺出土軒瓦で型式設定されたもの（奈良県教委2000）で、平城京内の出土例としては初例となる。出土品は右第2単位の小片であるが、既知の横方向の範囲（原田2016）も一致した。東大寺331Cは内区に3回反転均整唐草紋を飾り、中心上部にV字形の小葉を配する。出土品の胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は表面が黒灰色、内部が灰色で、この特徴は、東大寺出土品とは異なる。東大寺供給品とは異なる生産地によるものとみられる。東大寺331Cの製作年代は、延暦8年（789）の造東大寺司廃止後に設置された造東大寺所の造瓦所での生産品であり、平安時代前期（794～910）とされる（山崎2003）。ただし、生産地の違いから東大寺331Cは、まず平城京内所用瓦として作成され、左京二条四坊十坪を含む京内に供給された後、瓦窓が東大寺の造瓦所に移動し、東大寺主要瓦としての生産が始まったとみることもできる。

文字瓦は出土した3点のうち、2点は平瓦凹面側部付近に「修」の印刻を押捺するもので、1点は平瓦凹面側の側面付近に「太万呂」の陽刻を押捺する。刻印「修」はa～gの7種類が知られる（奈文研1977）が、2点共にeである。刻印「太万呂」は恭仁宮式文字瓦（上原1984）の1種で、KJ16である。

施釉瓦は丸瓦の小片で、凸面に施釉した三彩瓦である。
（原田憲二郎）

V 調査所見

今回の調査では、左京二条四坊十坪の宅地利用状況を知る上で貴重な成果を得ることができた。遺構は複数関係や配置、出土遺物などからみて大きく4時期（I～IV期）の変遷があることがわかった。以下、時期ごとに記す。

I期 この時期の遺構としては南北溝SD01とSD102古がある。SD01は飛鳥から奈良盆地を縱断して南北に伸びる古代の主要道路の一つ、中ツ道東側溝との指摘があるHJ180次調査検出のSD49・50の延長上にある。平城京内ではこれまで、中ツ道推定地で7ヶ所の調査を行っているが、関連が指摘される遺構はHJ180次調査検出のSD49・50のみであった。今回の調査でこの溝が奈良時代の柱穴より古く、二条条間路を超えて伸びていることが確認されたことにより、これを中ツ道東側溝とする見解の蓋然性が高まった。相対する西側溝の可能性がある溝としてあげられるのは、7世紀後半～8世紀初頭の土器が出土したSD102古である。しかし、これを西側溝とすると溝の心々間距離は12.5mとかなりせまくなる。これまで中ツ道の発掘調

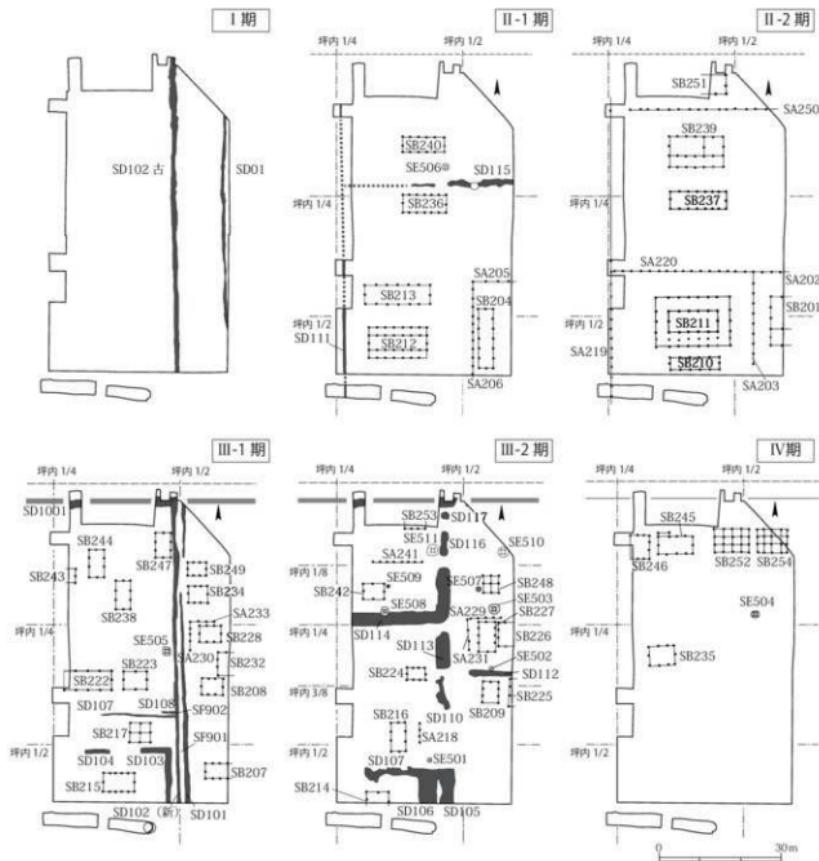
査で両側溝が検出された事例はないが、平城京の南辺から約300mにある「京道」の字名を残す遺存地割は幅約20mであり、路面幅から勘案すると、現段階ではSD102古を西側溝と即断することはできない。今回検出された溝を中ツ道とすることの妥当性を、今後の周辺の調査で改めて検証していく必要があろう。

II期 十坪内を一体で利用する時期である。遺構のあり方からさらにII-1期とII-2期に細分する。

II-1期 坪の中央に桁行6間、梁行2間の東西棟掘立柱建物SB213と桁行7間の東西棟二面廂付建物SB212が南北に並んで建つ。坪を東西1/2に分割する

ラインより東側には桁行6間、梁行2間の南北棟掘立柱建物SB204があり、この建物は坪SA205・206により区画される。北側には桁行5間、梁行2間のSB240と、桁行6間、梁行2間のSB236が南北に並んで建ち、両建物間、坪南北1/4分割ラインにあたる位置には東西溝SD115がある。また坪東西1/4分割ラインに南北溝SD111がある。

II-2期 II-1期とほぼ同じ位置で建物が建て替えられる。坪内は3つに区画され、坪中央にあたる南西の区画には、桁行7間、梁行4間の東西棟四面廂付建物SB211と、桁行5間、梁行2間の東西棟建物SB210が



遺構変遷概念図 (1/1,200)

南北に身舎の柱筋を揃えて建つ。柱穴の位置関係や床束の痕跡から、両棟は床張りで一体的に利用されたと考えられる。この建物の東側には桁行1間以上、梁行3間の東西棟南廻付建物SB201がSB211と柱筋を揃えて建つ。これらの建物はそれぞれSA202・203・219・220で囲まれる。北側の区画には建物SB237・239が南北に並んで建つ。これらの北側には東西方向の廻SA250があり、さらにその北側に東西棟建物SB251が建つ。

II-2期の建物に壊されるSK609、SE506出土遺物の年代からII期は8世紀中頃～後半である。二条条間北小路南側溝と想定されるSD1001は、SB251と重複する位置にある。SB251はSD1001の直接的な重複関係を確認できなかつたが、後述のIII-1期の坪内道路西側溝SD102よりも重複関係から古いことがわかっているので、II期の建物と考えられる。したがって、II期の段階には坪境小路は存在せず、九・十坪は二町古地の宅地であったと考える。

III期 坪内を分割利用する時期である。遺構のあり方からさらにIII-1期とIII-2期に細分する。

III-1期 坪内道路SF901で坪内を東西に二分割し、桁行2～5間程度の比較的小規模な建物が建つ。坪南北3/8分割ラインよりやや南にも東西方向の坪内道路SF902がある。建物は柱筋を揃えて建てられるものが多い。

この段階で、九・十坪の坪境小路ができ、両坪は分割利用されるようになるものと考える。

III-2期 坪内が坪内道路によって東西に分割され、溝や掘立柱塀で1/32町に分割された宅地が並び、四行八門制を廻むる利用形態となる。坪東西1/2分割ラインには坪内道路西側溝とみられる溝SD105・110・113・114・116・117があり、SD114は坪南北1/4分割ラインでL字形に西へ屈曲する。坪南北1/2分割ラインではSD105がL字形に屈曲する(SD107)。南北1/8分割ラインには東西廻SA241が、3/8分割ラインにはSD112がある。それぞれの区画内には桁行3間、梁行2間程度の小規模な建物が建ち、各宅地に井戸を伴う。発掘区北半で検出した井戸SE510・511は最終埋没が9世紀後半であり、発掘区北端の一条南大路に近い部分では平安京遷都後も宅地利用が継続する。

坪内道路両側溝や区画溝、井戸等の出土遺物から、III-1期は8世紀後半～末、III-2期は8世紀末～9世紀後半である。

IV期 発掘区北端の一条南大路に近い部分に集落が広がる。12世紀後半の掘立柱建物4棟と土坑1基、井戸1基がある。近隣の市HJ第157次や市HJ第174次調査

でも発掘区北端で同時期の建物が検出されており、ウワナベ越えから奈良町へと続く幹線道路であった一条南大路に近い部分には、集落が広がっていたものと考える。

以上のように、左京二条四坊十坪では8世紀中頃～後半に坪内が一体として利用され、二町利用の大規模宅地があったことが判明した。III-2期には宅地内を掘立柱塀で区画し、中心建物が2棟並列して、そのうちの一棟が2棟連結構造となる。2棟連結構造の建物は平城宮内では類例があるものの、平城京内では検出例が少なく、左京二条二坊一・二・七・八坪の長屋王邸SB4300・4301や左京三条二坊十六坪(市HJ第231次調査)のSB33・34A・Bが確認される程度である。このうち前者のSB4300・4301が建っていた奈良時代前半の長屋王邸の建物配置は、今回調査を行った左京二条四坊十坪のあり方と近似しており注目される。

さらに今回の調査では、8世紀中頃～後半に二町利用されていた宅地が8世紀後半～末には分割利用されるようになるという宅地利用の変遷過程が明らかとなつた。

出土した軒瓦は、種類は多いが、特定の軒瓦に集中するような傾向はうかがえない。ただし、軒丸瓦6138F・6285A・6320Aや軒平瓦6679A・6691A等は、本調査地から西へ約900m離れた法華寺周辺での出土が顕著であり、墨書き器「宮寺」の出土と合わせて、当坪の性格を考える上で留意すべきである。(永野智子)

【参考文献】

- 井上和人 2005『平城京下層中ツ道の検証』『飛鳥文化財論叢』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 翼淳一郎 2010『II都の生活』『古代の都2 平城京の時代』田辺征夫・佐藤信編 吉川弘文館
- 奈良県教育委員会 2000『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』発掘調査篇
- 奈良県教育委員会 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』
- 原田憲二郎 2016『仏教屋下層遺跡出土の東大寺創建以後の瓦』柴原永達男他編『東大寺の新研究1』法藏館
- 山崎信二 2003『大和における平安時代の瓦生産(再論)』『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社
- 奈良国立文化財研究所 1977『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』
- 上原真人 1984『天平12・13年の瓦工房』奈良国立文化財研究所『研究論集VII』

2. 平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松廃寺の調査 第705次

事業名	宅地造成	調査期間	平成28年9月1日～9月16日
通知者名	株式会社 ヤマトコーポレーション	調査面積	144m ²
調査地	平松五丁目645番地、他	調査担当者	調査担当者 池田裕美

Iはじめに

調査地は平城京の条坊復元では右京四条四坊十二坪にある。この地では以前から8世紀の軒瓦に混じって7世紀中頃へ後半に位置づけられる軒瓦が採集されており、創建が奈良時代以前に遡る寺院があった可能性が考えられてきた。地名から平松廃寺と名付けられている¹⁾。

平松廃寺に関する瓦の中には奈良県橿原市の田中廃寺と同范の軒瓦があることは以前から知られていたが²⁾、從前は別々の寺院と考えられていた。ところが、近年、田中廃寺周辺の調査が進み、出土した瓦の詳細が明らかになってきたことにより、平松廃寺は平城遷都に伴い田中廃寺が移建されたとの考えが出されている³⁾。

周辺での発掘調査例には昭和62年度に十三坪で実施した市HJ第129次調査がある。今回の調査地から70m程度南西の場所で、遺構面の標高は今回の調査地よりも約6m低い。調査では9世紀前半に埋まる井戸を検出し、この井戸から平松廃寺所用瓦が出土している。

平成28年、当該地で宅地造成が計画されたが、平城京西端の丘陵地で、地割の乱れ等も認められることから発掘調査に先立ち試掘調査（試掘2016-4次調査）を行い、遺構の有無、残存状況を確認した（右図 網掛け部分）。

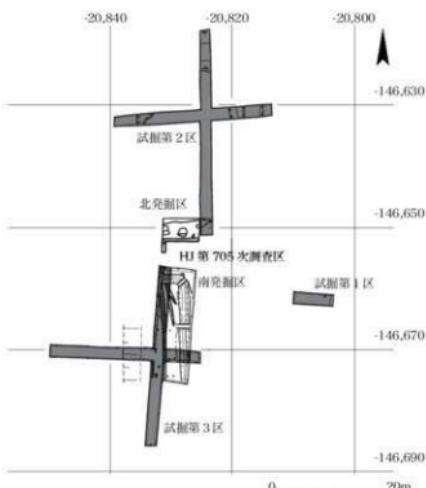
その結果、奈良時代以降の土地の変化が大きく、削平された部分が多くなったが、奈良時代の溝や小穴等を一部検出した。発掘調査はその部分を中心に行なうこととしたが、発掘区設定地の北半部に水路があり、発掘区を南北2つに分けて調査を行った。

II 基本層序

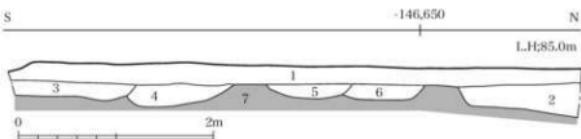
北発掘区 現地表面である暗灰褐色土（旧耕作土・土層図1・0.2m）を除去すると茶黄色土の地山（7）に



HJ第705次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

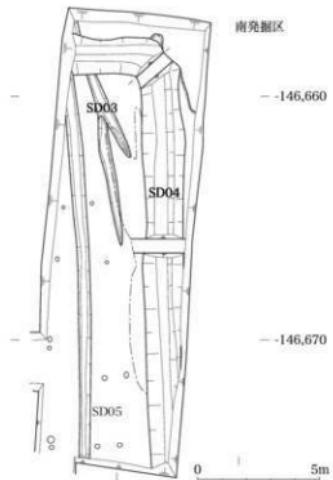


試掘2016-4次調査・HJ 705次調査平面図 (1/800)

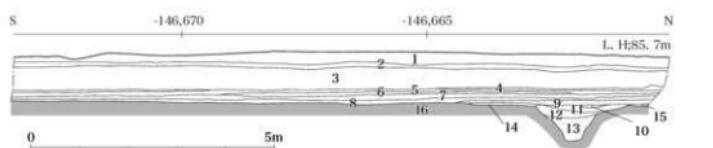


- 1 暗灰褐色土（旧耕作土）
- 2 暗白灰色砂質土・黄茶色土
- 3 暗褐茶色土
- 4 暗黃茶色土・暗褐茶色土（SD01埋土）
- 5 暗褐灰色土
- 6 褐茶色土
- 7 茶黄色土（地山）

HJ第705次調査 北発掘区 西壁土刷図 (1/40)



H J 第705次調査 遺構平面図 (1/200)



1	暗灰褐色土	5	暗茶褐色土	9	暗黄色土	13	暗茶黃色砂質土・橙茶色砂質土
2	灰褐色土	6	灰茶色土	10	暗褐灰色土	14	暗橙褐色土
3	黄茶色土・白灰色土	7	暗茶褐色土	11	暗灰褐色土（茶黄色土混じる）	15	海茶色土
4	暗灰褐色土	8	暗黄茶色土	12	暗茶黄色土・茶褐色砂質土	16	茶黄色土（埴山）

H J 第705次調査 南発掘区西壁土刷図 (1/100)

いたる。遺構はこの地山上面で検出した。地山上面の標高は84.5mである。旧耕作土直下が遺構面で、包含層等もないことから遺構面はいくらか削平されていると思われる。北発掘区より北側は試掘調査時に地山上面から深さ約0.6m程度削られて遺構が残存しないことを確認した。

南発掘区 基本的な層序は、上から暗灰褐色土（1）、灰褐色砂質土（2）、黄茶色土・白灰色土混合土（3）、暗灰褐色土（4）、暗茶褐色土（5）、灰茶色土（6）、暗橙茶色土（7）、暗黃茶色土（8）と続き、現地表下1.2mで茶黄色土の地山に至る。遺構は全てこの地山上面で検出した。地山上面の標高は概ね84.3mで、北発掘区に比べ0.2m低い。3層の黄茶色土・白灰色土は地山の土を削って盛られたものと思われ、北発掘区の状況からみても、周辺が大規模に削平されていることがわかる。

III 検出遺構

北発掘区 検出遺構には奈良時代の溝、土坑がある。

SD01 発掘区南端で検出した東西方向の溝。溝の主軸は国土方眼方位に一致する。幅1.1m、深さ0.25m。埋土から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土した。

SK02 直径約1.4mの隅丸方形の土坑で、深さは0.25mである。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦片が出土した。

この他、発掘区東壁・西壁沿いで遺構を検出しているが、いずれも深さ0.1m程度で、柱痕跡も確認できず、柱穴か土坑かは判断し難い。

南発掘区 検出した遺構は奈良時代から平安時代前半の溝、小穴である。

SD03 幅0.3～0.5m、深さ0.15mの南北方向の溝である。国土方眼方位北で西に傾く。埋土から奈良時代の瓦片が出土したが、重複関係からSD04よりも新しい。

SD04 幅1.5～1.8m、深さ0.6～0.85mの南北方向の溝。発掘区北端で西に曲がり、南、西とも発掘区外に続く。溝の主軸は国土方眼方位にはほぼ一致する。埋土は上から暗褐色土、褐茶色砂質土、灰茶色砂質土の大さく3層に分けることができる。埋土には水が流れたり滞水したような砂層や粘土はみられず、人為的に埋められたと思われる。上層の暗褐色土からは大量の瓦と共に、10世紀前半の黒色土器A類椀片が出土し、埋没した時期とともに、平松庵寺の廃絶の時期を示すものと考える。

SD05 幅約0.4m、深さ0.2mの南北方向の溝で、北南とも発掘区外に続く。溝の主軸は国土方眼方位北で西に傾く。埋土からSD04と同様に奈良時代の瓦が出土した。重複関係からSD04よりも新しいことはわかるが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。

IV 出土遺物

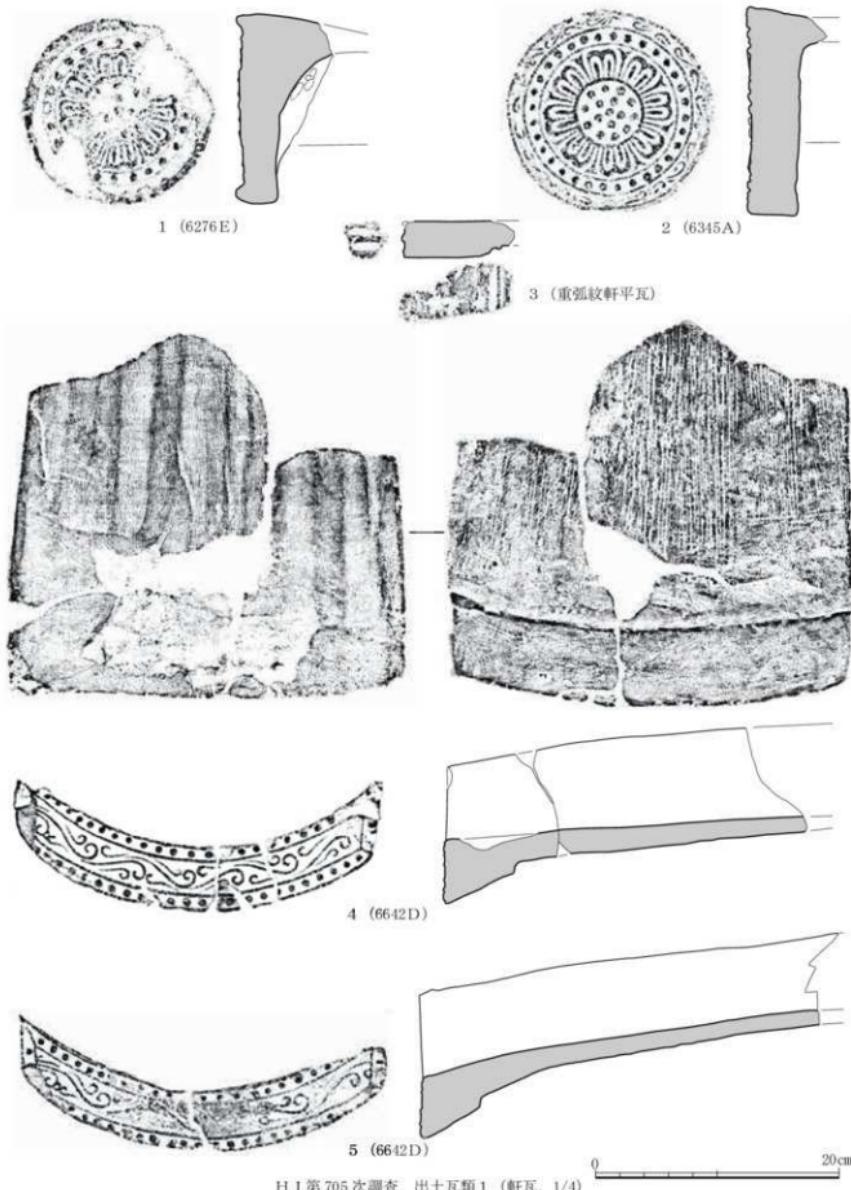
遺物整理箱で約120箱の遺物が出土した。出土遺物には7世紀後半～10世紀前半の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土器部、須恵器、黒色土器、鉄釘があるが、その大半は瓦である。以下、瓦類について記す。（池田裕英）

瓦類 遺物整理箱で106箱ある。出土瓦類の大半はSD04から出土した。内訳は軒丸瓦13点、軒平瓦68点、丸瓦1,736点、平瓦4,098点である。これらの出土瓦類は、色調・胎土・焼成具合から大きく2群に大別できる。ひとつは表面が黒色で内部は淡褐色を呈し、胎土は緻密で、焼成は軟質のグループである。いまひとつは灰色を呈し、胎土には多量の白色砂粒が含まれ、焼成が硬質のグループである。ここでは前者をA群、後者をB群と呼ぶ（口絵7・8）。

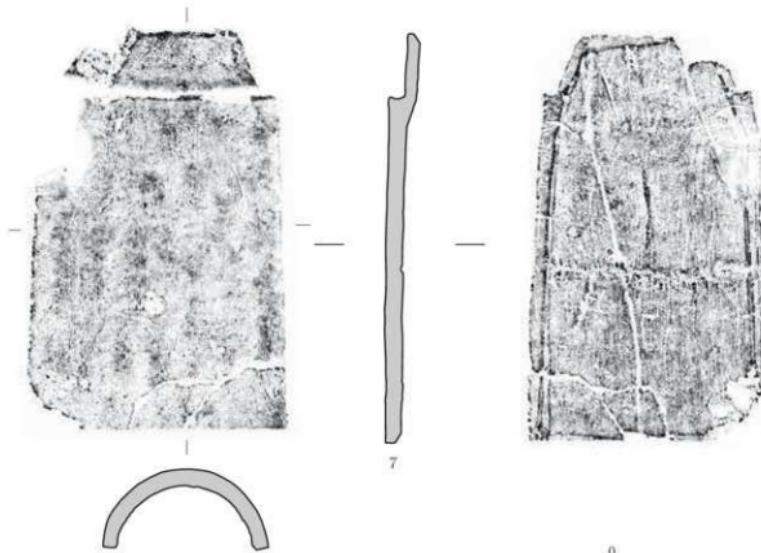
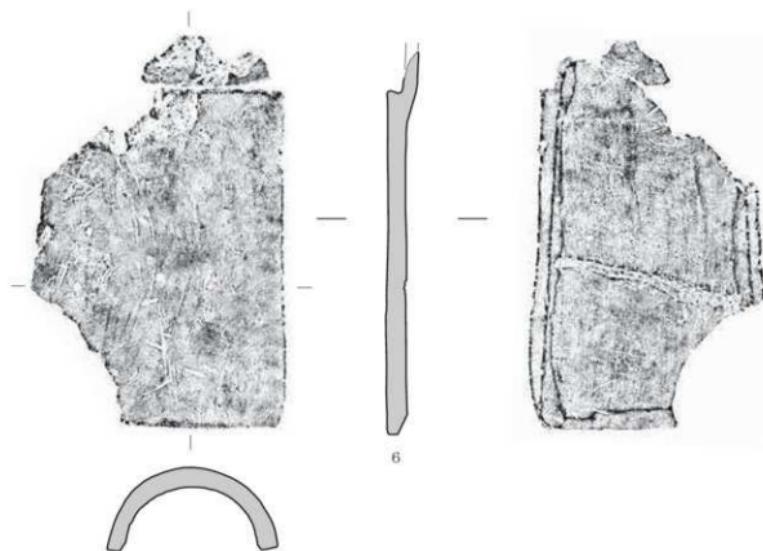
出土した軒丸瓦の内訳は6276E 1点、6345A 10点、型式不明2点である。

1は瓦筋の摩滅が著しいが、蓮弁子葉とその左方の弁輪郭線との間の範傷が一致し、軒丸瓦6276Eとわかる。A群である。瓦当側面上部には、外縁頂部からの深さ約0.5cmで瓦端痕が残る。瓦当裏面の丸瓦接合部は補充粘土の上から工具で押圧した痕跡が残る。瓦当側面はヨコナデ。6276Eは平城薬師寺・本薬師寺堂塔の裳階用の瓦である。瓦当厚はばらつきが大きく、瓦当厚3cm付近を境に、薄型と厚型に分けられ、厚型は平城薬師寺では出土しないが、範の傷みは薄型よりも進行していることから、本薬師寺造営時に製作が開始され、その後平城薬師寺所用として製作が続き、平城薬師寺造営の一段落後には、厚型が本薬師寺に供給されたとされる⁴⁾。本例は瓦当厚4cmの厚型であるが、本薬師寺出土の厚型よりも瓦筋の摩滅は著しく、本薬師寺供給後の生産品とみられる。また平城・本薬師寺例は瓦当裏面を平坦に調整する共通した特徴をもつが、本例は瓦当裏面の補充粘土が多く、裏面も平坦に調整しておらず、中央がくぼむという違いからみて、薬師寺の造瓦所による製作とは考え難い。

2は軒丸瓦6345Aで、出土した6345Aは全てA群。平坦な外縁に唐草紋を巡らす点は特徴的。中房蓮子配置は1+5+10で、中心蓮子とその外側の蓮子のひとつを繋げる範傷が確認できる。瓦当側面上部・丸瓦部凸面はタテナデ、瓦当側面下部はヨコナデ。瓦当裏面はヨコナデ、下半部周縁付近には指頭圧痕が残る。同範品は、平城京では右京四条四坊坊間西小路の調査⁵⁾と、橿原市に所在し、平松庵寺の前身寺院とされる田中庵寺⁶⁾で出土品が知られる。田中庵寺例と实物照合をおこなった結果、田中庵寺例には中心蓮子とその周囲の蓮子のひとつを繋ぐ範傷が無く、平松庵寺例が後出と判明した。

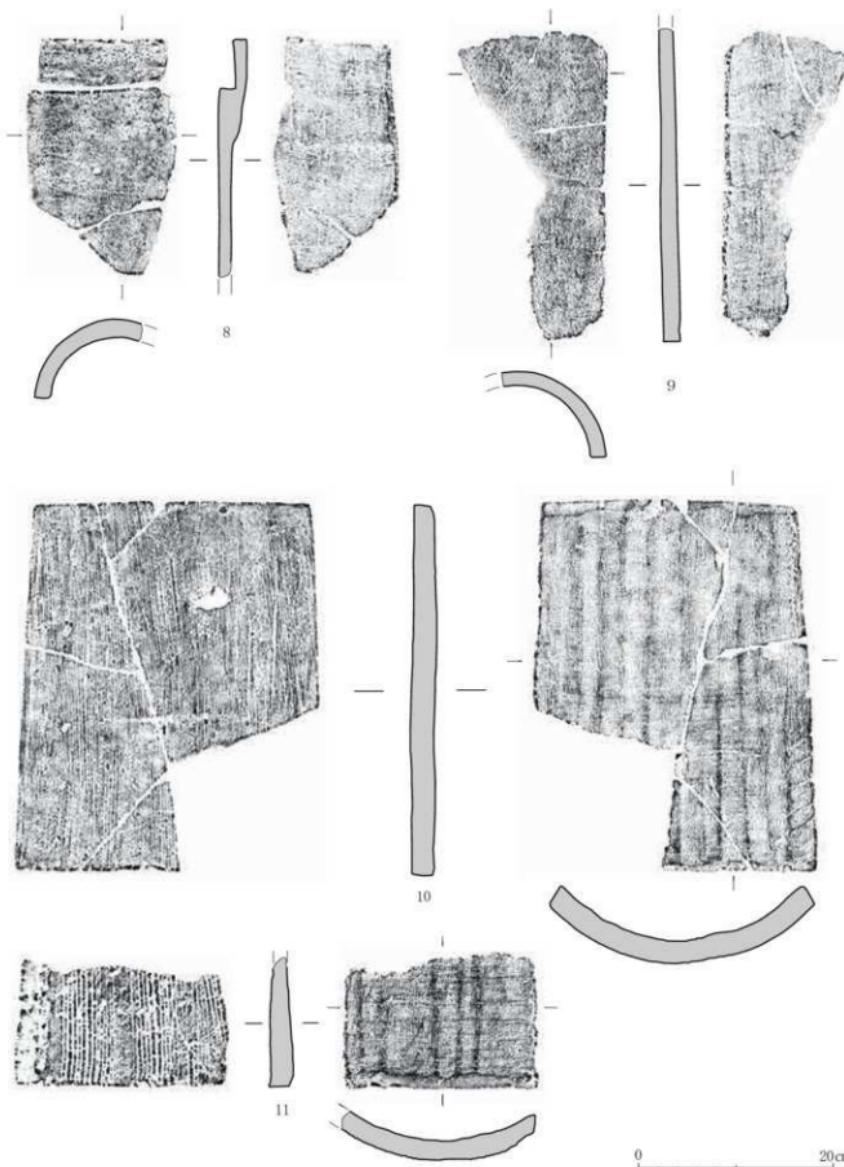


H J 第705次調査 出土瓦類1（軒瓦、1/4）

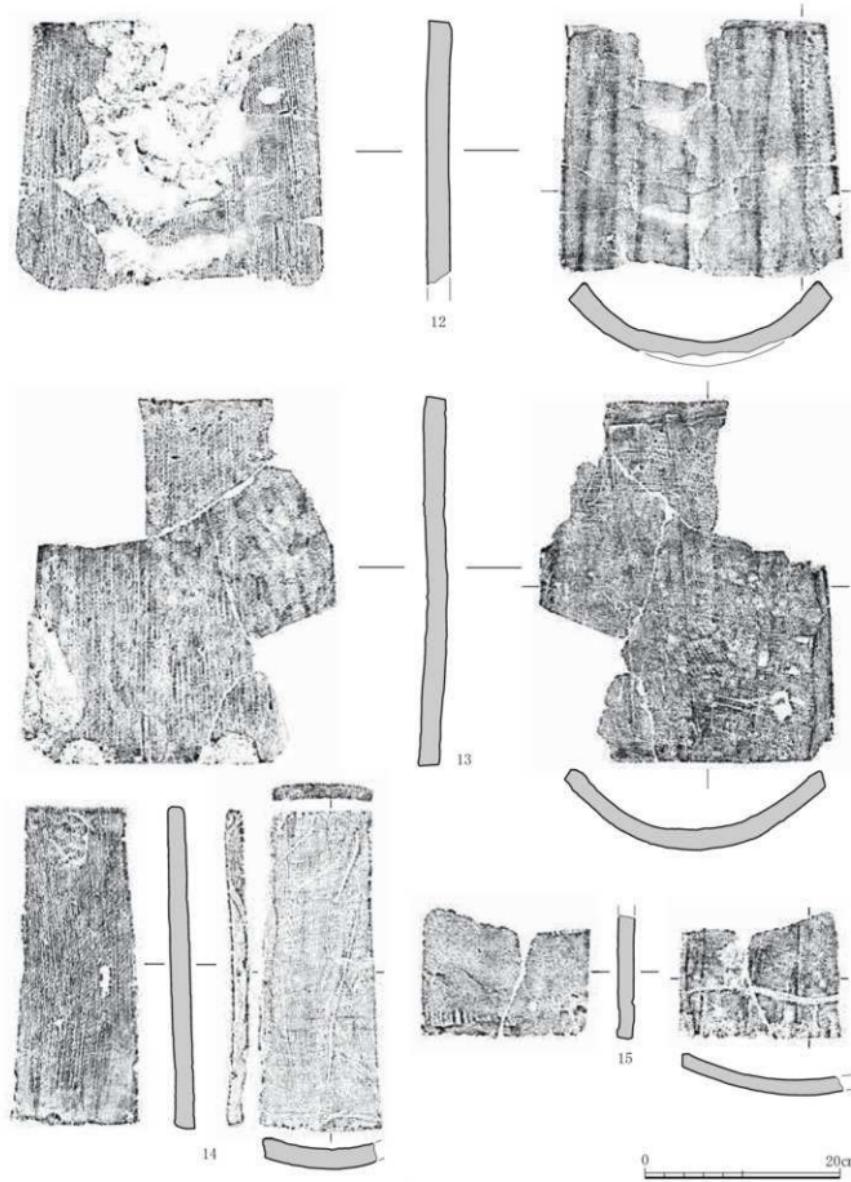


H J 第705次調査 出土瓦類2（丸瓦、1/5）



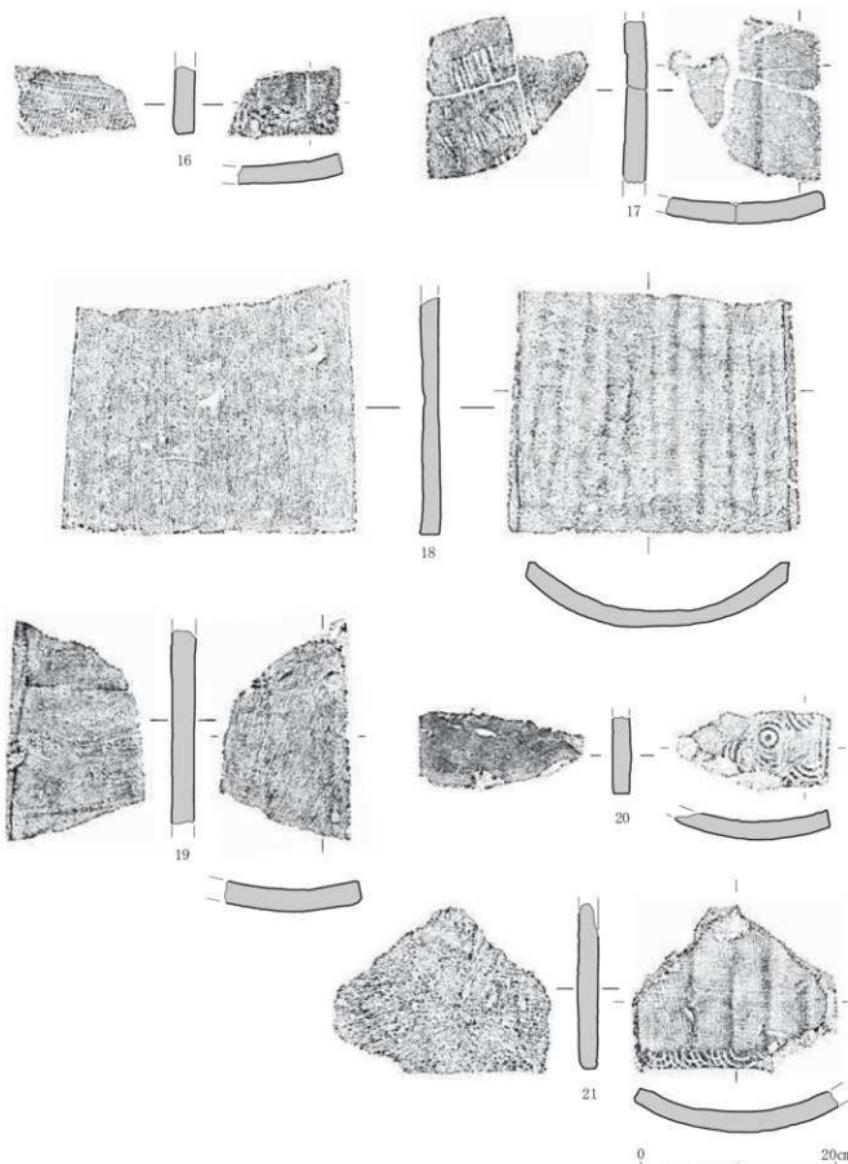


H J 第705次調査 出土瓦類3 (丸瓦・平瓦、1/5)



H J 第705次調査 出土瓦類4 (平瓦、1/5)

0 20cm



H J 第705次調査 出土瓦類5 (平瓦、1/5)



A群の瓦の胎土・焼成



B群の瓦の胎土・焼成



6345A の蓮子配置と範側



丸瓦6 の凹面の布綴じ合わせ目



平瓦20 の凹面の同心円当て具痕跡



平瓦21 の凹面の同心円当て具痕跡

出土した軒平瓦の内訳は三重弧紋軒平瓦1点、6642D 57点、型式不明10点である。

3は三重弧紋軒平瓦で、頭部にも重弧紋が施紋されている点が特徴的である。B群。凹面瓦当付近はヨコケズリ、頭面はヨコナデ。

4・5は6642DでA群。出土した57点中、B群の小片1点を除く56点はA群である。6642Dは今回破片が多い量に出土し、紋様の全容が判明した。内区には左方から右方へ6回反転する偏行唐草紋を飾る。第1・3・5単位主葉のそれぞれ下部の支葉と、第2・3・4単位主葉のそれぞれ上部の支葉が、主葉とは逆に左方に巻き込む点が特徴的である。上・下外区にはそれぞれ珠紋を24、左右両脇区にはそれぞれ珠紋を3配置する。なお、4は左脇区、5は左脇区下端部と下外区左端部を脱離後にナデを加え、紋様を消している。全長は36.5cm。凹面には粘土紐接合痕跡と側板連結の模骨痕が確認でき、粘土紐桶巻き作りとわかる。凹面側縁と側面はタテケズリ。凹面瓦当付近はヨコケズリ。頭は貼り付け削り出し段頭。頭後端部に横方向に強めの横ナデを加え、丸く仕上げる点は、特徴的であるが、この技法は木津川市瀬後谷瓦窯産6664I・6668Aにもみられる⁷⁾。頭面と平瓦部凹面瓦当付近はヨコケズリ。平瓦部凸面は縦位縄叩き目を残す。6642Dは平城京では右京四条四坊間西小路の調査で4点、山田寺で1点同範品が出土している⁸⁾。

丸瓦はA群1,584点、B群140点、その他が12点ある。これらのうち狭端部が確認できるものは、全て玉縁を有する有段式丸瓦である。

A群の丸瓦は凹面に粘土紐接合痕跡を残し、粘土紐巻きつけ技法と判断できるものが55点あり、糸切痕を残し粘土板巻きつけ技法と判断できるものは2点であることから、大半が粘土紐巻きつけ技法とみられる。6・7はA群で、いずれも粘土紐巻きつけ技法。凹面に縦位縄叩き目をほどこし、それをほとんどナデ消す。凹面は布目痕を残す。凹面側の側縁は、0.3～1.2cm削り、凹面側広端縁は1.4～2.5cmと広めに削る。凹面側玉縁部端面縁は約1.0cm削る。6・7ともに凹面側中央付近に横方向の浅いくぼみが確認できる。くぼみの上縁に沿って、横方向の縫い目の痕跡と、縫い目の間から下方に布が引っ張られた痕跡が確認できる。布袋の長さが足りず、上下に縫じ合わせた布袋を使用したと判断できる。全長42.0cm、広端幅17.5～18.0cm。厚さ1.8～2.0cm。

B群の丸瓦は粘土紐巻きつけ技法によるものが22点、粘土板巻きつけ技法によるものは1点で、B群もA群と同様、大半が粘土紐巻きつけ技法とみられる。8・9

はB群。B群の丸瓦は全長・広端幅が判るものは出土していない。凸面に縦位縄叩き目をほどこし、ナデ消す。凹面は布目痕を残す。凹面側の側縁は玉縁付近を0.3～0.8cm削るが、凹面側の側縁全体・凹面側広端縁・凹面側玉縁部端面縁にケズリを加えない点は、A群と異なる。厚さも1.2～1.5cmと、A群と比べ薄手である。

平瓦はA群3,690点、B群382点、その他の26点ある。

A群の平瓦の成形技法は粘土紐巻きつけ技法によるものが152点、粘土板を素材とするものは12点で、その大半が粘土紐巻きつけ技法とみられる。10～14の瓦がA群の平瓦である。

10～12は粘土紐巻きつけ技法による。凸面は縦位の縄叩き目。凹面には布目痕、側板を連結した模骨の痕跡、粘土紐接合の痕跡、布袋の縫じ合わせ目の痕跡が残る。凹面側狭端縁は0.5～1.0cm、広端縁は0.7～1.5cm削る。10は右側の側縁の広端部側のみ約2.5cm削る。10・12の凹面右側には、布袋の縫じ合わせ目の痕跡がみえ、12は布の左端を上に重ねる。全長38cm、狭端幅27.0～27.5cm、広端幅27.5～28.5cm。厚さ1.8～2.4cm。

13・14は凹面に糸切痕が確認でき、粘土板を素材とする。凹面に粘土板の合わせ目、布袋の縫じ合わせ目、側板を連結した模骨の痕跡が確認できず、14には狭端部端面と側面狭端間に、凹面側から連続する布目痕が確認でき、さらに側面には布端痕が確認できることから、一枚作りとみることができる。凸面は縦位の縄叩き目を残す。全長37.8cm、広端幅27.0～28.5cm、厚さ1.8～2.2cm。

B群の成形技法は粘土紐巻きつけ技法が47点で、粘土板を素材とするものは10点ある。15～20がB群の平瓦である。

15～17は凹面に平行叩き目をほどこし、それをほとんどナデ消す。16の平行叩き目は細い。15・16には側板連結の模骨痕が確認でき、桶巻き作りとみられるが、粘土紐接合痕あるいは糸切痕等がみられないため、粘土の素材は不明である。15・16は広端部片。凹面に側板連結模骨痕がみられる。15には布袋端の痕跡も確認でき、模骨より短めの布袋を使用したとみることができる。凹面側の側縁および広端縁は未調整である。厚さ1.8～2.2cm。

18は凹面に縦位縄叩き目を残すもので、B群の平瓦では最も数が多い。凹面に布目痕跡、側板を連結した模骨の痕跡、粘土紐接合の痕跡が確認でき、粘土紐巻きつけ技法。凹面側の側縁は約0.5cm削り、広端縁は約2.0cmと広めに削る。広端幅約27.0cm。厚さは1.5～1.8cm。

19は凹面に縄叩き目をほどこし、それをほとんどナデ消す。凹面側の側縁を約0.5cm削る。凹面に布目痕と糸切痕が確認できるが、側板連結の模骨痕はみられない。



6345A-6642D(1/4、6642Dは4片合成)

20の平瓦は凸面にはナデしかみえないが、凹面の状況は19と同じであることから、同様の瓦とみられる。20は広端部片で、凹面には布目痕の上から、同心円紋の痕がみえる。これは粘土円筒を天地返しして、乾燥した際の補正の叩きしめ³⁰を行なう際、凹面側に当たる当て具の痕跡とみられることから、19・20ともに桶巻き作りによるものと考えられる。厚さは19・20とも約2.0cmである。

21は色調・胎土からA・Bどちらの群にも属さない平瓦である。色調は表面が青灰色で、内部は青灰色と茶色の互層となっている。胎土は粗いが、B群と異なり、ほとんど白色砂粒は含まれない。凸面は摩滅が著しいが、わずかに斜位の縄目叩き痕と、ナデが確認できる。凹面は布目痕跡・側板を連結した模骨の痕跡と、広端部付近に同心円紋を連打した痕跡が確認できる。補正の叩きしめの際の当て具の痕跡である。当て具の連打状況から補正者が右利きであったなら、手前から奥へと補正していくことがうかがえる。凹面側の側縁は約1.0cm削る。厚さは約2.0cmである。
(原田 憲二郎)

V 調査所見

1. 多量の瓦が出土した溝SD04は幅や深さの点からみると寺院の建物の雨落溝とするには規模が大きいように思われる。道路側溝とすると南北の溝は坊間西小路の側溝とみることはできるかもしれないが、東西に曲がる位置が条坊復原とは大きく異なる。ただし平城京西端の丘陵地に位置しており、寺地が条坊に則っていたかどうかとも考える必要があるかもしれない。
(池田 裕英)

2. 出土瓦類は大きくA群とB群の2群に分けることができ、平松庵寺ではA群の瓦類が多く、B群の瓦類が少ないと判った。平松庵寺の前身寺院と考えられている田中庵寺の瓦類について、その一部を観察する機会を得たが、平松庵寺B群に属する瓦ばかりであり、A群の瓦はみられなかった。B群が田中庵寺から運ばれ

た瓦で、A群が平松庵寺創建の瓦と考える。

3. 平松庵寺創建軒瓦はA群であり、なおかつ多数を占める6345A-6642Dであったとみられる。ただし、B群の6345Aが田中庵寺で出土している。6642Dについては田中庵寺での出土を聞かないが、今回の調査でB群の6642Dが1点出土していることから、平城遷都前の段階で田中庵寺に6345A-6642Dが生産・供給されていたことが考えられる。

4. 平松庵寺の創建年代は、創建軒瓦の紋様構成や、平瓦が粘土紐巻きつけ技法による桶巻き作りである点等から、平城遷都直後頃まで遡るとみられる。そうであれば平松庵寺創建瓦である表面が黒色を呈したA群の瓦の存在が気になる。同じ頃、これと同様の瓦が使用された平城宮第一次大極殿の出土瓦の分析では、これが宮内の他の地点より黒色度合が強く、中国の重要宮殿にみられる黒色磨研瓦を模倣すべく、黒色に焼かれた可能性が指摘される³¹。平松庵寺A群の瓦は今後、科学的手法による分析も必要と考えるが、官大寺である薬師寺の同範瓦が出土していることも含め、平松庵寺の性格を考える上では、留意すべきである。
(原田 憲二郎)

- 1) 岡田至弘 1938「平松庵寺の古瓦について」『鉄錆』7 立正大学考古学会
- 2) 石田茂作 1936「田中庵寺」「飛鳥時代寺院跡の研究」聖德太子奉賛会
- 3) 竹田政敬 1995「平松庵寺—前身寺院は飛鳥に—」「シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える」帝塚山考古学研究所
- 4) 花谷浩 1997「本薬師寺出土の瓦」「奈良国立文化財研究所 年報 1997-Ⅱ」奈良国立文化財研究所および高田賀太 2010「本薬師寺の創建軒瓦」「古代瓦研究V」奈良文化財研究所
- 5) 奈良市教育委員会 1988「平城京右京四条四坊十二・十三坪の調査 第129次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和62年度」
- 6) 桜原市千塚資料館 1992「企画展 桜原の飛鳥・白鳳時代寺院」図録および註3の文献

- 7) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999「奈良山瓦窯跡群」
- 8) 奈良文化財研究所 2002「山田寺発掘調査報告」2002
- 9) 大庭謙 2018「7世紀の瓦生産・花組・星組から荒版組みまで」『古代』第141号
- 10) 佐川正敏 1992「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える・東アジアの造瓦技術の比較研究I・」『日本中国考古学会会報』第2号および奈良文化財研究所 2009「平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 4 瓦・屋根」

本薬師寺と平松庵寺出土の6276Eの実物照合あたっては、奈良文化財研究所石田由紀子氏、清野陽一氏のご協力を得るとともに、平瓦の類例に関してご教示を得た。また田中庵寺出土瓦の実見にあたっては、桜原市教育委員会平岩歌太氏のご協力を得た。

3. 平城京跡（右京四条三坊十三坪・西三坊大路）の調査 第706次

事業名 宅地造成
通知者名 株式会社 八州エイジメント
調査地 平松一丁目98番2ほか

調査期間 平成28年9月28日～10月3日
調査面積 68m²
調査担当者 村瀬 陸

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると右京四条三坊十三坪にあたり、西側に西三坊大路が推定される。調査地の北側の西三坊大路推定地にあたる場所で実施された市HJ第304次調査では、大路に関する遺構はなく、近世の粘土探査坑のみを検出した。本調査では、西三坊大路の検出を主な目的として実施した。なお、調査地内に南北方向の耕作用水路があったため、それを避けて東西に発掘区を設定した。

II 基本層序

層序は、上から現代の造成土（厚さ約0.6m）、黒色耕土（約0.1m）、灰褐色床土（約0.1m）と続き、現地表下約0.8mで黄褐色粘土、あるいは灰褐色砂質土の地山となる。ただし、西区では灰褐色床土下で江戸時代以降の遺物をわずかに含む河川を確認し、以下、黒褐色砂質土（約0.1m）、灰色粗砂（約1.4m）と堆積する。なお、河川の東肩は耕作用水路付近に位置すると推定できるが、本調査では確認できなかった。

III 検出遺構

遺物を含む遺構はなかったが、東区で平面不整円形（径約2m、深さ約0.3m）の土坑SK01を検出した。粘質土の地山部分にのみ掘削されていることから、粘土探査坑の可能性を考えられる。



HJ第706次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分がある。内訳は、8世紀の須恵器杯B1点、18世紀以降の土師器・陶磁器数点である。ほとんどが包含層出土で、陶磁器片は河川の灰色粗砂から出土した。

V 調査所見

本調査で西三坊大路に関連する遺構はなかった。現在、西三坊大路推定地に沿って南北方向の遺存地割を確認できるが、今回確認した河川の痕跡を示すものと考えられる。平城京右京の条坊道路は、宅地より低く施工される事例があり、河川が西三坊大路の位置を踏襲している可能性がある。しかし、本調査でその是非を判断できる情報は得られなかった。

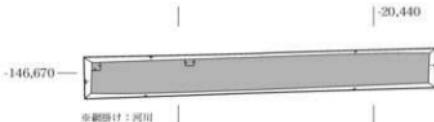
(村瀬 陸)



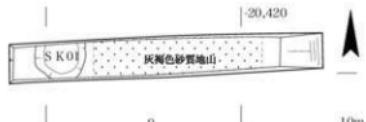
HJ第706次調査 河川 南から



HJ第706次調査 北壁断面図 (1/100)



HJ第706次調査 遺構平面図 (1/250)



4. 平城京跡（右京四条四坊四坪）の調査 第702次

事業名	宅地造成	調査期間	平成28年5月23日～5月26日
通知者名	株式会社 八洲エイジェント	調査面積	60m ²
調査地	平松三丁目212番の1の一部	調査担当者	鍾方正樹・永野智子

Iはじめに

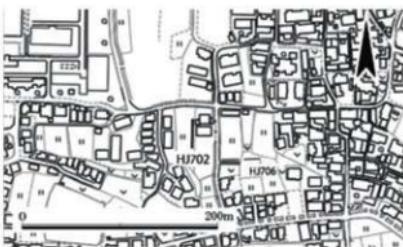
調査地は、平城京の条坊復元では右京四条四坊四坪の北東部にあたる。四坪内の本格的な調査は今回が最初である。周辺では昭和55年に行われた市HJ 7次調査で四条大路北側溝および西四坊坊間路が確認され、西隣の五坪内では建物跡が検出されている。また、平成26年度に行われた市HJ 685次調査でも四条大路北側溝が確認されており、右京四条四坊においては条坊が施工されていることが判明している。今回の調査は、四坪内の様相と右京域の利用実態の解明を目的に行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は上から順に暗灰色極細粒砂（耕土、厚さ約0.2m）、灰黄色細粒砂（床土、厚さ約0.1m）、灰色細粒砂（近世耕土・床土、厚さ約0.2m）、灰白色中粒砂（中世耕土・床土、厚さ約0.2m）の順に堆積し、地表下約0.7mで灰白色シルトの地山に至る。調査区の南北端では、古墳時代以前とみられる暗灰色粘土が埋積する東西方向の谷状の落ち込みを確認した。遺構検出面の標高は概ね71.9mである。

III 検出遺構

検出した遺構には、古墳時代の土坑1基、奈良時代の掘立柱建物3棟・溝2条、平安時代の溝1条、時期不明の掘立柱建物1棟、平安時代以降の耕作溝がある。以下、



HJ第702次調査 発掘区位置図(1/5,000)

主要な遺構について述べる。

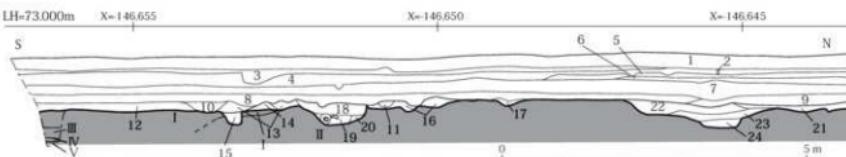
1 古墳時代の遺構

SK01 南北約1.4m、東西約0.7m、深さ約0.3mの平面稍円形土坑で、埋土は黒色粘土である。4世紀の土師器S字状口縁甕が出土した。

2 奈良時代の遺構

SB01 桁行1間以上、梁行1間の東西棟建物と推定したが、南北棟建物の可能性もある。発掘区外へ続くため全体の規模は不明。柱間は桁行3.4m、梁行1.2m、柱穴の深さは約0.2mである。SD03より古い。

SB02 東西棟建物の南・北側柱列の一部とみられる。発掘区外へ続くため全体の規模は不明である。建物主軸は北で西に振れ、妻側の全長は3.8mである。



- 1 暗灰色極細粒砂…現耕土
- 2 暗灰色細粒砂…机跡
- 3 灰黄色細粒砂…床土
- 4 灰色細粒砂…床土
- 5 灰色細粒砂（耕作混じり）…耕土・床土・近世
- 6 灰色中粒砂（小礫混じり）…耕土・床土・近世
- 7 灰白色中粒砂（小礫・中礫混じり）…耕土・床土
- 8 灰色極細粒砂（耕作・小礫混じり）…耕土・床土・真露出上
- 9 灰色極細粒砂（小礫・粗砂多く含む）
- 10 暗灰色極細粒砂（炭化物含む）
- 11 灰色粗砂
- 12 暗灰色シルト（灰白色中粒砂ブロック、炭化物含む）
- 13 暗灰色シルト（炭化物含む）
- 14 暗灰色中粒砂
- 15 黒色粘土…SK01埋土
- 16 暗灰色シルト
- 17 灰色極細粒砂（灰色シルトブロック含む）
- 18 灰色中粒砂
- 19 明黄色褐色極細粒砂
- 20 暗灰色シルト
- 21 暗灰色シルト（炭化物含む）
- 22 灰色極細粒砂（粗砂混じり）
- 23 暗灰色シルト（灰白色シルトブロック、粗砂混じり）
- 24 暗灰色シルト（炭化物含む）
- SD01埋土
- I 暗灰色シルト…地山
- II 灰白色シルト…地山
- III 暗灰色シルト…地山
- IV 暗灰色極細粒砂…地山

HJ第702次調査 西壁土層図(1/80)

SB03 南廂付東西建物とみられる。建物主軸は北で西に振れる。梁行の柱間は北から 2.4 m 等間で、廂の出は 2.2 m である。柱穴の深さは約 0.4 m である。

SD01 東西方向の溝で、幅 4.9 m、深さ約 0.5 m。8世紀中頃～後半の土師器・須恵器片が出土した。四坪の南北 1/4 分割ライン付近に位置している。

SD02 東西方向の溝で、幅約 1 m、深さ約 0.35 m。埋土は上層が灰色中粒砂、下層が明黄褐色細粒砂である。下層から 8世紀中頃の土師器杯 A・須恵器壺 K・杯 B 蓋などが出土した。四坪の南北 1/3 分割ライン付近に位置している。

3 平安時代の遺構

SD03 東西方向の溝で、幅約 1.3 m、深さ約 0.4 m。溝の肩部および底部に杭列が残っており、灌漑用水路の一部とみられる。埋土は黄灰色シルトである。10世紀の土師器片が出土した。

4 時期不明の遺構

SB04 桁行 1 間以上、梁行 2 間の東西棟建物とみられる。南西隅の柱穴は残っていない。発掘区外へ続くため全体の規模は不明である。柱間は桁行 0.9 m、梁行 1.5 m、柱穴の深さは約 0.15 m である。建物主軸は北で西へ大きく振れる。出土遺物がなく時期は不明である。

III 出土遺物

遺物整理箱で 3 箱分が出土した。4世紀の土師器、8世紀の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦、10世紀の土師器片、中近世の土器・陶磁器片が出土している。

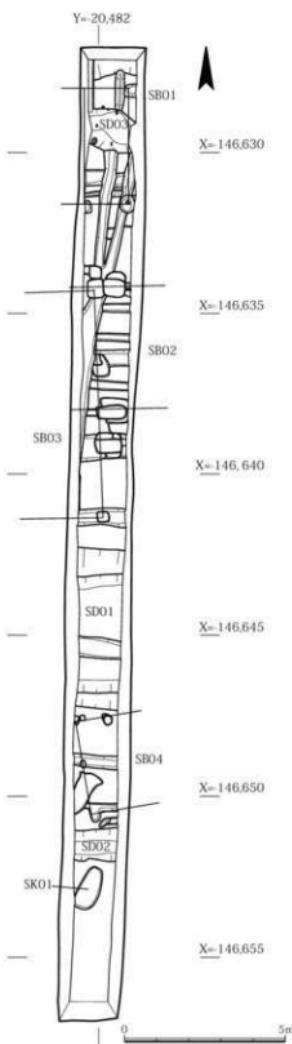
IV 調査所見

古墳時代以前には、東西方向の谷が複数走っているが、古墳時代の土坑が検出されたことから、生活の痕跡が確認できた。また、奈良時代の掘立柱建物を 3 棟検出し、宅地として利用されていたことを確認した。右京四条四坊四坪の地は、起伏のある地形からこれまで宅地として利用されているか判然としなかったが、今回の調査で当該地においても宅地が形成されていたことが明らかとな



H J 第702次調査 全景（北から）

った。また、SD01・02 の存在から四坪内を南北に分割して宅地利用した可能性が推測できる。（永野智子）



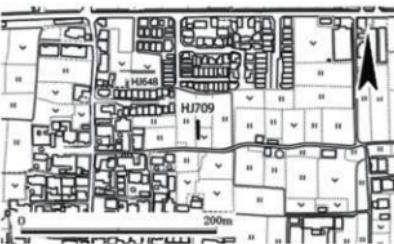
H J 第702次調査 遺構平面図 (1/150)

5. 平城京跡（左京八条四坊三坪）の調査 第709次

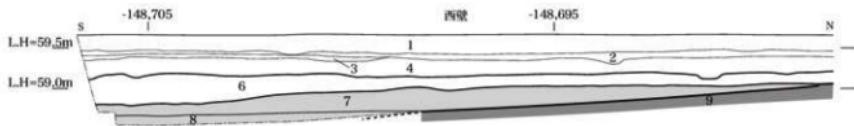
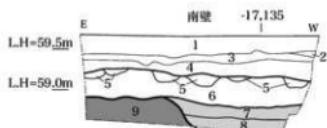
事業名 宅地造成	調査期間 平成29年3月15~24日
届出者名 You&Iコーポレーション	調査面積 60m ²
調査地 東九条町577-1,3	調査担当者 池田裕英・安井宣也・村瀬 陸

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京八条四坊三坪にあたる。地形は西から東、南から北へ高くなる。同坪内では、調査地の北西で市HJ第648次調査が行われ、奈良時代後半～平安時代前半の掘立柱建物・列を検出した。その際、下層には弥生～古墳時代の遺構が残存し、北西・南東方向に流れる幅11m以上の河川（弥生時代中期後半～古墳時代中期末）と、それに沿う幅1.6~1.8mの溝（弥生時代中期後半）を検出した。



HJ第709次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



1. 黒褐色土 3. 喷灰黄色土 5. 喷灰黄色土（素掘溝） 7. 黑色土（S D01上層） 9. 黄褐色土（地山）
2. 黄灰色土 4. 黄褐色土 6. 黑褐色土（奈良時代以降） 8. 喷オリーブ褐色土（S D01下層）

HJ第709次調査 発掘区南・西壁断面図 (1/120)

HJ第709次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	形状	規模 (m)	深さ (m)	時期	出土遺物	備考
SD01	北西・南東溝	長さ8.0以上、幅1.7以上	0.4以上	弥生時代後期後半	弥生土器（壺・甕・鉢・高杯・器台・手焙形土器・器蓋不明の弥生時代中期の土器）、副葬	SK04より新しい。弥生時代中期中頃の遺構の上から掘り込まれており、その時期の遺物を少量含むが、主体は弥生時代後期後半で多量。規模や立地から環濠の可能性あり。
SD02	東西溝	長さ2.0以上、幅1.7	0.2	弥生時代中期前半	弥生土器（縹片）	SK10より古い。遺物は少量。
SD03	東西溝	長さ5.0以上、幅2.0以上	0.4以上	弥生時代中期前半	弥生土器（壺・甕・鉢・器台）	形状を復元できる遺物が少量出土。
SK04	不整円形	最大径2.2以上	0.5	弥生時代中期中頃	弥生土器（壺・鉢・甕・器台・高杯）	SK05より古い。湧水層に達する。形状を復元できる遺物が少量出土。
SK05	不整方形	-辺約0.8	0.3	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	SK06より新しい。遺物は縹片のみ。
SK06	不整円形	最大径1.7以上	0.1	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	SK07より新しい。遺物は縹片のみ。
SK07	不整円形	径約1.0以上	0.1	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	SK09より新しい。遺物は縹片のみ。
SK08	不整円形	径約1.0	0.2	弥生時代中期後半	弥生土器（壺・甕・高杯）	SK09より新しい。形状を復元できる遺物が少量出土。
SK09	不整円形	径約2.1	0.5	弥生時代中期中頃	弥生土器（壺・甕・鉢・器台・蓋）	SK10より新しい。湧水層に達する。形状を復元できる遺物が少量出土。
SK10	不整円形	-辺1.9以上	0.1	弥生時代中期中頃	弥生土器（縹片）	SD02より新しい。遺物は縹片のみ。
SK11	不整方形	径約0.6	0.1	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	SK10より新しい。遺物は縹片のみ。
SK12	不整円形	径1.4以上	0.1	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	遺物は縹片のみ。
SK13	不整方形	-辺1.2	0.1	弥生時代中期中頃～後半	弥生土器（縹片）	遺物は縹片のみ。

本調査では、三坪内の土地利用の様相確認を目的とし、奈良時代以前の遺跡にも留意しつつ、道路予定地内に幅5m、長さ12mの発掘区を設定した。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から旧耕土(厚さ約0.2m)、床土(約0.1m)、黄褐色土(約0.2m)、弥生～奈良時代の遺物を多く含む黒褐色土(約0.35m)と続き、現地表下約0.85mで黄褐色土の地山に至る。

III 検出遺構

黒褐色土上面が奈良時代以降の遺構面(標高約59.2m)であり、これを取り除いた地山直上面が弥生時代の遺構面(標高約58.9m)となるため、2面調査を行った。

第1面：奈良時代以降の遺構面

弥生時代中期後半～奈良時代の遺物を包含する黒褐色土上面で素掘溝を検出した。南北方向に並行する溝を主とし、これに直行する溝もある。検出状況から、中世以降の耕作溝である可能性が高いが、溝には奈良時代以降の遺物を含まないため、断定できない。

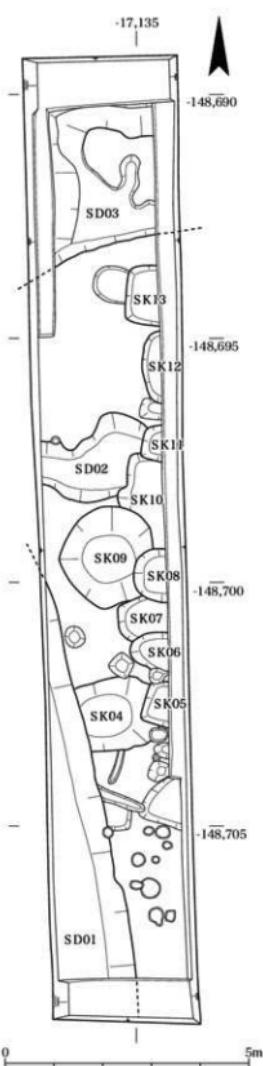
第2面：弥生時代中期前半～古墳時代中期の遺構面

主に弥生時代後期の溝1条(SD01)、弥生時代中期前半の溝2条(SD02・03)、弥生時代中期中頃～後半の土坑10条(SK04～13)がある。他に、重複関係からSD01より新しい小穴がある。検出面上層の黒褐色土からは古墳時代中期の須恵器が出土していることから、古墳時代以降の小穴であると推定できる。各遺構の詳細は一覧表にまとめ、ここでは特筆すべき点を述べる。

SD01 北西・南東方向の溝で、長さ8.0m以上、幅1.7m以上、深さ0.4m以上である。上下2層からなり、いずれの層からも弥生時代後期の土器が主に出土した。ただし、発掘区内だけでみても弥生時代中期前半の土坑SK04を溝SD01が廻しているため、弥生時代中期の土器が若干混入している。粘性の強い下層は遺物が少なく、上層から短期的なまとまりのある土器が多数出土したことから、湿润な環境下で緩やかに下層が堆積した後、比較的短期間に上層が堆積したと考える。

SD03 長さ5.0m以上、幅2.0m以上、深さ0.4m以上の溝である。2段の落ち込みが確認でき、上段は東西方向であるが、下段は北西部を角とするような屈曲を呈する。発掘区内では溝の全容が不明確であり、性格の判断が困難である。

SK04～13 発掘区内で重複しながら南北方向に並ぶ土坑群を検出した。重複関係からSK10→SK09→SK07→SK06→SK05が直接的に判断でき、SK10→



HJ第709次 遺構平面図(1/100)



H J 第709次 奈良時代以降の遺構面 全景（南から）



H J 第709次調査 溝SD01（北東から）



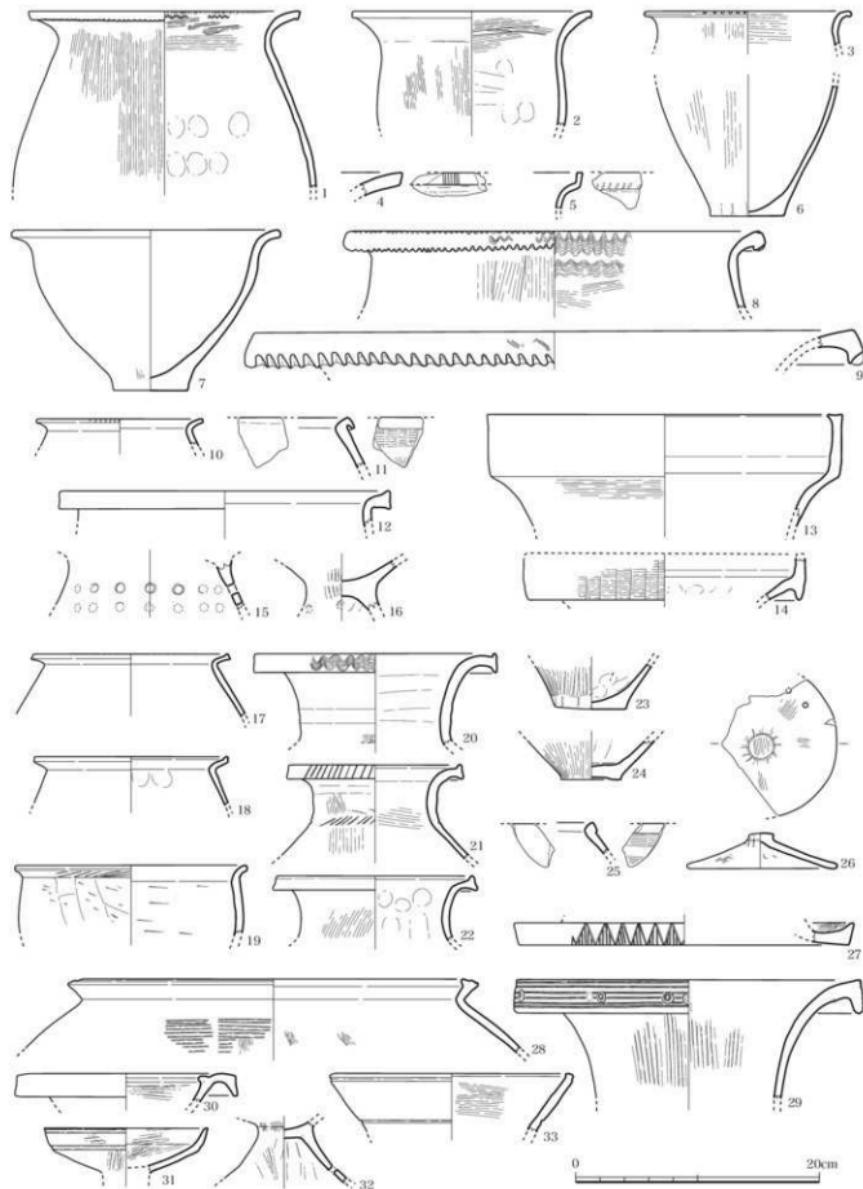
H J 第709次調査 溝SD03（南東から）



H J 第709次 弥生時代の遺構面 全景（南から）



H J 第709次調査 溝SD01と土坑SK04の断面（南から）



HJ第709次調査 弥生時代中期の土器 (1~9: SD03, 10~16: SK04, 17~27: SK09, 28~33: SK08) (1/4)

SK11, SK07 → SK08, SK04 → SK05の前後関係も確認できた。概ね弥生時代中期中頃～後半の弥生土器が出土したが、SK04・09からは中頃の、SK08からは後半の弥生土器がまとまって出土しており、重複関係の通りに時期差があるようである。

III 出土遺物

遺物整理箱で22箱分がある。内訳は、弥生時代中期前半～後期後半の弥生土器・石包丁・砥石・5世紀中頃の須恵器・8世紀の土師器・須恵器・平瓦・銅箸(64)がある。古墳時代以降の遺物はいずれも黒褐色土より上層で出土した。以下では、遺構ごとに詳しく述べる。

(1) 弥生土器

SD03 出土土器 壺(1～6)・鉢(7)・壺(8・9)が出土した。

壺は内外面ともにハケ調整を基調とする。I・3では口縁端部に刻目を施し、Iでは刻目の下に波状文を施す。4は口縁端部に7本の沈線が施され、受口状口縁の5は刻目を施す。

鉢(7)は内外面ともに摩滅するが、頸部の屈曲が緩やかで端部を丸くおさめる。

壺はいずれも口縁端部に刻目を施し、外面の端面には波状文を施す。8では、外面をハケ調整し、内面は口縁端部に2段の波状文を施し、以下ハケ調整する。

以上の特徴から、大和第II様式(弥生時代中期前半)に位置づけられる。

SK04 出土土器 壺(10)・鉢(11)・壺(12～14)・器台(15)・高杯(16)がある。

壺は口縁端部を丸くおさめ、刻目を施す。

鉢は口縁端部を折り返して面をつくり、外面には簾状文を施す。

壺は、口縁部が短く直角に屈曲する広口壺(12)、口縁部が垂直に立ち上がる複合口縁壺(13)、垂下口縁をなし口縁部外面に簾状文を施すもの(14)がある。

器台は上下が揃い一定間隔の透孔がある。

高杯は外面ミガキ調整で透孔を配置する。

以上の特徴から、大和第III様式(弥生時代中期中頃)に位置づけられる。

SK09 出土土器 壺(17～19)・壺(20～22)・壺または壺の底部(23・24)・鉢(25)・蓋(26)・器台(27)がある。

壺では17・18が頸部の屈曲が比較的強く、端部が立ち上がる。19は端部を丸くおさめ、やや広口であり内外面ともにケズリ調整を施す。

壺はいずれも外反する頸部をもち、端部でより強く外

反する。口縁端部外面は20には波状文を施し頸部には簾状文を施す。21にはハケメ工具を強く押しあてわずかに動作したことで条痕が口縁部に観察でき、頸部にも確認できる。

鉢(25)は簾状文を施す。

蓋(26)は中央につまみを施し、ハケ調整が観察できる。裾付近に2つの小孔が穿たれる。

器台(27)は端部に沈線で鋸歯文を施しており、胎土が他とは異なることから搬入品の可能性がある。

以上の特徴から、大和第III様式(弥生時代中期中頃)に位置づけられる。

SK08 出土土器 壺(28)・壺(29)・高杯(30～32)・不明土器(33)がある。

壺(28)は頸部の屈曲が強く短い口縁部で、端面に凹線が施される。外面タタキ調整、内面ハケ調整である。

壺(29)は内外面ともにミガキ調整で、口縁部は垂下し端面には6条の沈線を施した上に2個1組の貼付竹管文を施す。

高杯は垂下口縁のもの(30)、椀型を呈し内外面ともにミガキ調整で外面に凹線を施すもの(31)がある。

器種不明だが凹線を施す土器(33)がある。

以上の特徴から、大和第IV様式(弥生時代中期後半)に位置づけられる。

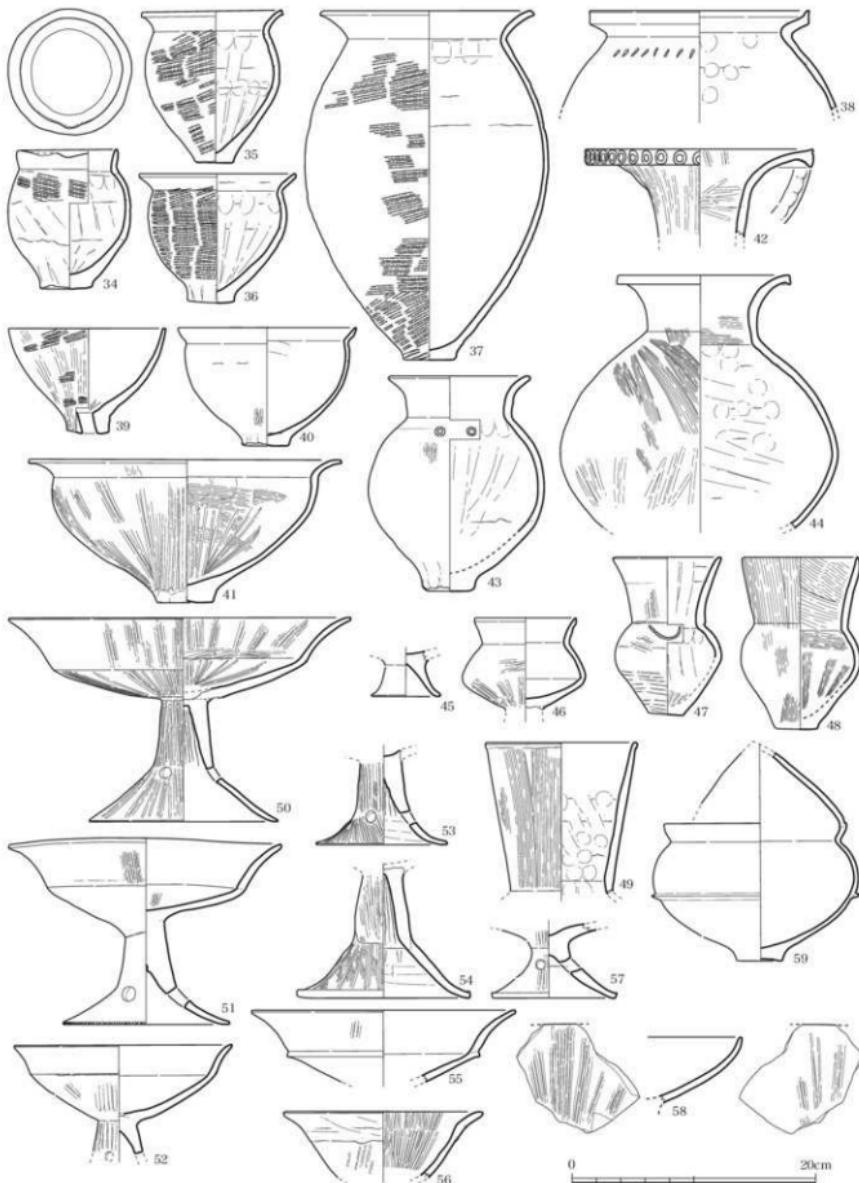
SD01 出土遺物 壺(34～38)・鉢(39～41)・器台(42)・壺(43～49)・高杯(50～58)・手焙形土器(59)・器種不明土器(60)および銅滓がある。

壺は大きく大小に分かれ、いずれも外面タタキ調整、内面ハケ・ナデ調整を基調とする。外面は右上がり・水平タタキ調整が多いが左上がりに調整するもの(34)もある。34は口縁部が片口状になり、底面には初期圧痕も観察できる。全てを提示できないが、形状や口縁部形態は多様である。ほかに受口状口縁で外面肩部に刺突文をもつ38は胎土もほかとは異なり搬入品と考えられる。

鉢も大きく大小に分けられ、小型のものは屈曲する口縁部をもつものとならないものがある。後者は有孔鉢であるものが多い。39は外面をハケのちタタキ調整、40・41はミガキ調整を施す。

42の器台は口縁部端面にスタンプ状の竹管文を施し、内外面ともにミガキ調整である。口縁部の裏側には粘土を補充して貼り付けた痕跡が観察できる。

壺には広口壺(43・44)、台付壺(45・46)、小型長頸壺(47・48)、長頸壺(49)がある。小型長頸壺でも、外面下半部をタタキ調整し上半をミガキ調整で仕上げる



HJ第709次調査 溝SD01出土の弥生時代後期の土器 (1/4)

もの(47)と、内外面ともにハケ調整のもの(48)があり多様性がある。49のような頸部の比較的のびる長頸壺は図示した1点のみで相対的に極少数である。

高杯は杯部の形態から大きく3種類あり、受部より若干口縁部のほうが発達したもの(50・51・55)、受部より口縁部が短いもの(52)、受部から口縁部へは屈曲しているが差が不明瞭なもの(56)がある。数的には口縁部の発達するものが多いがそのなかにも多様性がある。例えば、透孔がやや大きく脚部端面に刻目を施すものの(51)が少数ながら一定数存在する。すべて杯部を縱方向にミガキ調整するものヨコミガキ調整のものはない。脚部でも、形態的多様性がありすべてを提示しきれていないが、透孔がなく膨らみのある裾部をもつ54などは搬入品である可能性がある。また、1点のみであるが椀形高杯(58)が確認できた。

手焙形土器(59)は、摩減して調整が不明瞭であるが、比較的鋭い突帯を胴部下半にもつ。底面はケズリ調整を施しやや上げ底である。

器種不明の土器(60、口絵9)は円形で箱型であり、頂部平坦面の端部に連続する刺突小孔がある。同様の小孔は側面の底部付近にも確認できる。いずれも外側から刺突され貫通する。側面にはこれとは別に直径約2cmの透孔が穿たれる。その上部には綾杉文が施されている。

以上の特徴から、大和第VI-3様式(弥生時代後期後半)に位置づけられる。

(2) 石器

石器では石包丁(61・62)があり、61はサヌカイト製、62は凝灰岩製である。磨製石斧(63)も出土した。

IV 調査所見

本調査では、奈良時代の整地を確認したがその他の遺構はなかった。弥生時代には、中期前半～後期後半に至る長期間の土地利用があったことを確認した。以下では、弥生時代の様相についてまとめる。

発掘区内で最も古い遺構はSD02・03で弥生時代中期前半に遡る。とくにSD03は幅2m以上を確認しており、集落内の区画溝であると考えられる。

中期中頃～後半にかけては、土坑が密集して構築される。重複関係から古くなるSK04・09は大和第III様式に位置づけられる土器が出土し、これより新しくなる土坑SK08からは大和第IV様式の土器が出土しており重複関係との整合性がある。大和第III様式が出土する土坑は他の土坑に比べて規模が大きいことが特徴である。その他の土坑はほとんど出土遺物がないため、どちらの時期

に近いかは不明確である。これらの土坑の特徴は、この地点に土器様式で2様式分にあたる比較的長期間、継続かつ意図的にこの場所へ構築されていることである。

弥生時代後期には、溝SD01が掘削される。出土遺物は大和第VI-3様式にまとまり、それ以外の土器は重複する土坑に起因する中期のものであることから、比較的短期間のうちに掘削・埋没したと考えられる。

SD01の特徴は、①幅1.7m以上、深さ0.4m以上で規模が大きいこと、②短期間のうちに埋没し、多量の土器を投棄していること、③地形の落ち込みに沿って掘削されていること、④調査地北西約80mの地点で実施された市HJ第648次調査でもSD01と同様の北西-南東方向の溝(中期後半)を検出しており、時期を問わず短期的に使用する溝が掘削されていること、がある。

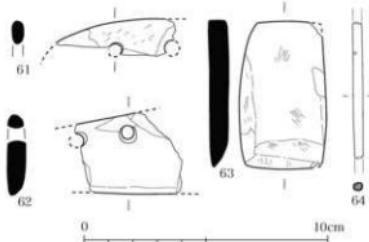
このような特徴は、天理市平等坊遺跡¹⁾や田原本町唐古・鍵遺跡²⁾にみられる多条環濠の状況に類似している。本調査の発掘面積は小さく、付近の調査例も少ないため断定はできないが、今回の調査で中期前半～後期後半の土器が出土していることからも、長期的かつ比較的大きな規模の集落が付近に営まれていた可能性が指摘できる。

(村瀬 陸)

註

1) 天理市教育委員会 2002『平等坊・岩室遺跡(第21次)』

2) 田原本町教育委員会 2009『唐古・鍵遺跡I範囲確認調査』



HJ 709次調査 出土石器・金属製品 (1/2)

石包丁(61:素掘溝出土、62:黒褐色土出土)

石斧(63:包含層出土)。

銅著(64:黒褐色土上面出土)



H.J.第709次調査 弥生時代中期の土器



H.J.第709次調査 弥生時代後期の土器

6. 平城京跡（左京二条三坊一・八坪）の調査 第704次

事業名 宅地造成	調査期間 平成28年7月19日～8月10日
届出者 個人	調査面積 212m ²
調査地 法華寺町349・350番	調査担当者 村瀬 陸

Iはじめに

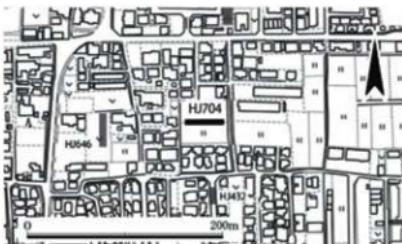
調査地は、平城京の条坊復元によると左京二条三坊一・八坪にまたがり、坪境小路が推定される。周辺の調査は、一坪で市HJ第646次調査を実施し、奈良～平安時代の大型建物や柱列を確認した。八坪での調査は今回が初めてである。調査地南の七坪では、市HJ第432次調査で奈良時代の柱列、市HJ第673次調査で奈良時代後半～平安時代の溝を検出し、平城宮東院玉殿所用と指摘される軒丸瓦6151型式・軒平瓦6760型式が出土した。本調査は、坪境小路の検出と宅地利用の様相把握を目的に実施した。

II 基本層序

層序は、上から黒褐色耕土（厚さ約0.25m）、褐色土（約0.1m）、灰色ブロック土を含む黄褐色土（約0.15m）と続き、現地表下約0.5mで黄褐色土の地山となる。部分的に地山が低くなるところがあり、そこには0.1～0.2mの整地土（灰褐色土）が確認できた。遺構検出は、整地土及び地山上面で行い、その標高は概ね62.1mである。

III 検出遺構

検出した主な遺構には、奈良時代の掘立柱建物3棟（SB01～03）、土坑3基（SK05～07）、溝4条（SD08

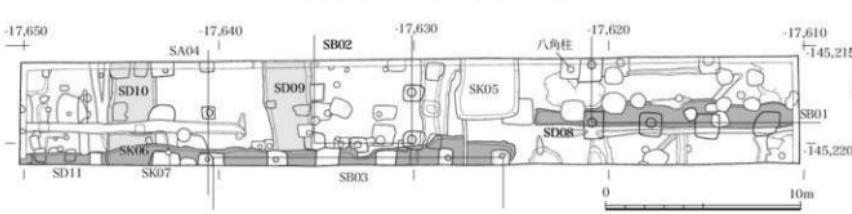
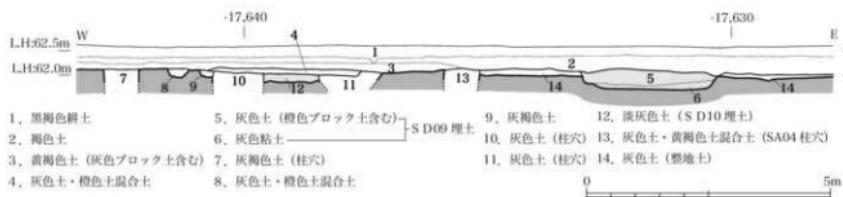


HJ第704次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

～11)、奈良～平安時代の掘立柱列1条（SA04）がある。規模等は観察表にまとめた。

SB01 東西棟建物で、東端は発掘区外となる。検出した建物のなかで、柱穴・柱間寸法が最大規模である。発掘区東端の柱穴は、柱が抜かれているが、角材と埠を並行に据えた上に、直行して並行する2本の板を置くことで、井の字形の基礎とする。この柱穴の抜き取り埋土から、軒平瓦6667型式C種が出土した。

SK05 一辺3mを超える大型の土坑であるが、深さは約0.5mと浅い。最下層に木屑を多量に含む暗褐色



土層があり、ここに遺物も多く含む。この状況からゴミ捨て穴として機能した可能性が考えられる。

SD09・10 並行する南北溝 SD09・10 を検出した。いずれも幅 2.4m である。埋土はしまりのある粘質土で遺物も少なく人為的に埋めた印象である。各々の溝心は、SD09 が X=-145,217.00m、Y=-17,636.60m、SD10

が X=-145,217.00m、Y=-17,644.29m である。

IV 出土遺物

遺物整理箱で 34 箱分がある。内訳は、8～9世紀の土師器、須恵器、陶瓶、軒丸瓦、軒平瓦、縁柚瓦、丸瓦、平瓦、壇、帶金具（巡方）、柱がある。詳細は一覧表に記載し、以下では土器・瓦等について述べる。



H J 第704次調査 発掘区全景（南西から）



H J 第704次調査 挖立柱建物 SB01（北西から）



H J 第704次調査 挖立柱建物 SB01 柱穴（南から）

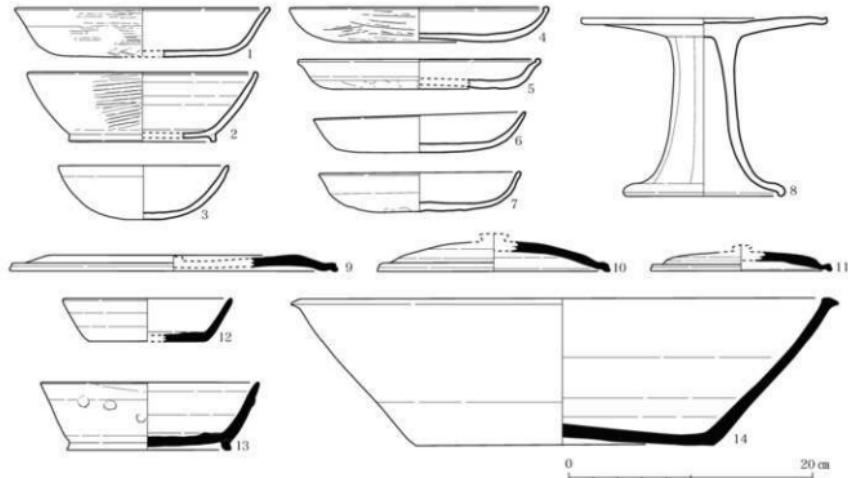


H J 第704次調査 挖立柱建物 SB01 柱穴（東から）

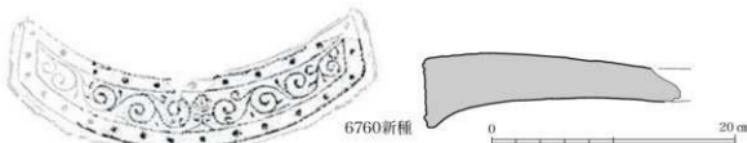
HJ第704次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)	柱行 梁行	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行	梁行						
SB01	東西	4以上	2以上	9.0以上	3.0以上	3.0	3.0	0.9	SD08より古い。軒平瓦6667C出土。
SB02	南北	2以上	2	2.4以上	4.8	2.4	2.4	0.8	SD09より古い。
SB03	東西	5	1以上	14.7	-	3.0-3.0-3.0-2.7	-	0.8	SD11より新しい。
SA04	南北	2以上	-	4.8以上	-	2.4	-	0.6	SB03より新しい。

遺構番号	形状	規模(m)	深さ (m)	時期	出土遺物		備考
					上部	下部	
SK05	長方形	3.2×3.1以上	0.5	8世紀後半～末	土師器(杯A・杯B・皿・楕・高杯・壺)、須恵器(杯A・杯B・杯蓋・盤・甕・壺・盤)、軒丸瓦(6151Ab・6144A)、軒平瓦(6700A)、丸瓦、平瓦、埴	最下層に建築材や木屑を多量に含む層あり。	
SK06	長方形?	3.2×1.7以上	0.6	8世紀中頃～後半	土師器(杯・甕・壺)、須恵器(杯・皿・蓋・壺)、軒丸瓦(6285Ba)、軒平瓦(6710C)、丸瓦、平瓦	SK07より新しい。土師器杯に暗文あり。	
SK07	長方形?	1.0×0.7以上	0.4	8世紀中頃～後半	土師器(盃)、丸瓦、平瓦	SD10より新しく、SK06より古い。	
SD08	東西	1.4×13.5以上	0.4	8世紀後半～末	土師器断片、須恵器(杯・皿・蓋・壺A・壺)、軒丸瓦(6151Aa・6282E)、軒平瓦(6721Gb)、丸瓦、平瓦	SD01より新しい。	
SD09	南北	2.4×5.3以上	0.4	8世紀中頃～後半	土師器(杯A・杯B・蓋・壺)、須恵器(杯B・皿A・皿C・甕)、軒丸瓦(6151A)、丸瓦、平瓦	SD02より新しい。	
SD10	南北	2.4×5.3以上	0.2	8世紀中頃～後半	土師器(杯・皿・甕)、須恵器(杯A・杯B・杯蓋・甕・壺)、軒平瓦(型式不明)丸瓦、平瓦	SK06より古い。	
SD11	東西	1.0以上×25.4以上	0.2	8世紀中頃～後半	土師器(杯・皿・楕・甕)、須恵器(杯B・蓋・甕・壺)、丸瓦、平瓦	SD09・10より新しい。	



HJ第704次調査 土坑SK05出土土器(1/4)



HJ第704次調査 包含層出土軒平瓦 6760新種 (1/4)

土器類 土器は各遺構から出土したが、ほとんどが小片で摩滅しており、時期等の判断が困難である。ここでは良好な資料が出土したSK05出土土器について述べる。

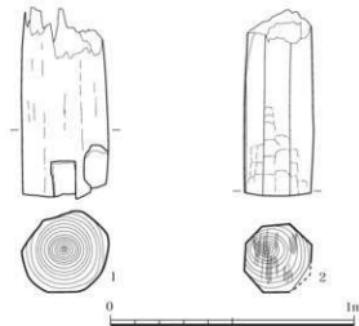
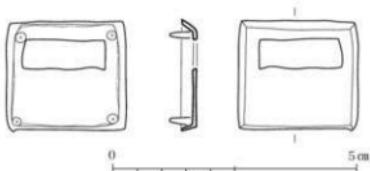
土師器は、杯 A (1) が復元口径 20.9 cm、器高 4.0 cm で口縁部が若干外反し端部が肥厚する。外面は横方向のミガキ調整がやや粗く施され、底部にも斜め方向に平行するミガキ調整が観察できる。杯 B (2) は復元口径 18.9 cm、器高 5.7 cm であり、口縁部は内湾気味で端部が肥厚する。外面は横方向のミガキが密に施され、下方はやや斜上するミガキ調整である。椀 A (3) は復元口径 14.0 cm、器高 4.4 cm で口縁端部にヨコナデを施す以外は摩滅し不明瞭である。胎土が粗いのが特徴である。皿 A (4～7) は、4 が復元口径 21.3 cm、器高 2.8 cm で内湾する口縁部をもつ端部が肥厚する。底部外面は同一方向に強くケズリ調整し、口縁端部までケズリを施す。5 は復元口径 20.0 cm、器高 2.4 cm で口縁部は外へ屈曲し端部が肥厚する。底部はナデおよびオサエ、口縁部はヨコナデ調整である。6 は、復元口径 17.3 cm、器高 3.3 cm で口縁部は直線的にのびて、端部は細くなり丸くおさめる。摩滅しており、焼け歪み口縁部が被つた。7 は口径 16.5 cm、器高 3.3 cm で口縁端部は外面のヨコナデに起因してやや外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を基調とし、底部にはオサエが目立つ。高杯 (8) は復元口径 20.2 cm、器高 14.6 cm で脚部高は 13.0 cm である。脚端部は内側に折り込むように肥厚し、脚柱部は 9 面に面取りされる。杯部はほぼ水平方向にのびて端部はやや上方に立ち上げるように肥厚する。

須恵器は、杯皿蓋 (9～11) はいずれもつまみ部が欠損する。9 は復元口径 26.8 cm で口縁端部は屈曲し、頂部が窪むような形状を呈する。頂部外面付近はロクロケズリを施す。10 は復元口径 19.0 cm で笠形を呈し、口縁端部はやや屈曲する。ロクロケズリの痕跡はみえずロクロナデで仕上げられる。11 は復元口径 14.8 cm で口縁端部が強く屈曲する。内外面とともにロクロナデで、内面に墨が付着し平滑であることから転用観として使用されている。杯 B (13) は口径 17.8 cm、器高 5.5 cm で杯部は直線的にのびる。焼き彫れが数カ所確認でき、一部は破裂しているところもある。内外面ともにロクロナデ、底部外面はヘラケズリを施す。盤 (14) は復元口径 45.2 cm、復元器高 12.0 cm で口縁端部は外側に張り出し端面は外傾する。底部は上げ底である。内外面ともにロクロナデを施す。

出土土器の特徴として、土師器では椀のように密な外面ミガキ調整の杯 B があること、皿は口縁部までケズ



HJ第704次調査 出土物



HJ第704次調査 出土遺物（上：巡方 1/1, 下：柱 1/20）



HJ第704次調査 出土柱（八角柱）

リ調整を施す明確なC手法の個体が含まれること、高杯は脚高が13cm程度のものであること、須恵器では頂部が窪むものに加えて口縁端部の屈曲が大きいものを含むことから、概ね8世紀後半～末の土器様相を呈する。

（村瀬 陸）

瓦塼類 遺物整理箱で18箱分出土した。その大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦14点、軒平瓦8点、面斗瓦1点、施釉瓦2点、埠7点を含む。

軒丸瓦の内訳は6126A1点、6144A1点、6151Aa1点、6151Ab3点、6151A1点、6282I1点、6282Ec1点、6282E1点、6285Ba3点、型式不明1点である。

軒平瓦の内訳は6667C1点、6671B1点、6710C1点、6721Gb2点、6760A1点、6760新種1点、型式不明1点である。

6760新種は内区に左右両端から中心に向かって4回反転する唐草を飾り、中心飾りは3弁の花弁を横向きに表現する点から6760型式と判断した。外区は珠紋がめぐる。6760型式はA・B2種が知られるが、A・B種にみられる多くの文様が減じられている点が、特徴的である。全体的に摩滅が著しく、凸面の叩き、凹面の布目は確認できない。顎の断面形態は、顎面をもつ曲線顎IIである。出土品としては初例だが、秋篠寺所蔵品に同範例がある。6760A・B種と比べ細部紋様が单调であることから、平安時代初頭とする見方がある（森1978）。

施釉瓦は2点ともに丸瓦の小片で、凸面に線釉が残る。

埠7点のうち1点は、残存長22.5cm、幅17.0cm、厚さ4.8cmの長方埠で、片面の中央部には、残存長10.0cm、幅3.0cm、深さ約0.9cmの平面形長方形の枘穴が焼成前に設けられている。

（原田 憲二郎）

柱（1）は、SB01南西隅の柱穴から出土したもので、直径36cm、残存長78cmである。えつり穴があり、丸柱に仕上げられておらず角が残る。柱（2）は、SB01西妻より重複関係で新しい西側の柱穴から出土した。幅26cm、残存長76cmで八角形に面取りされている。丸柱に仕上げるのを省略したのとを考えることもできるが、ほぼ一边が等しく面取りも丁寧であることから意図的な八角柱の可能性がある。底面はノコギリのような刃物で切られており、その擦痕が残る。

その他 SK07から銅製の巡方が1点出土した。2.3×2.5cmの方形を呈し、裏面には4本の針状突起が取り付き、その根元付近にはわずかに漆が残存する。

IV 調査所見

Ⅰ 一・八坪坪境小路について

本調査地では、東三坊坊間西小路にあたる一・八坪の

坪境小路が想定される。二条大路付近で交差する朱雀大路の座標値から求めた推定道路心はY=-17648.07mである。本調査で検出した溝SD10の溝心との距離は3.78mであり、これを小路東側溝とみれば道路幅は推定7.56mとなる。小路の幅として妥当な数値であり、SD10が坪境小路東側溝である可能性が高く、西側溝は発掘区外にあると推定される。

Ⅱ 宅地利用の変遷について

宅地の変遷は重複関係や出土遺物から大別A～D期に区分でき、細別7段階の変遷を確認した。

A期（～8世紀中頃） 堀立柱建物SB01・02が構築される。各柱穴から厳密に時期を特定できる遺物は出土していないが、土器では暗文のある土師器、軒平瓦6667C（II期カ）が出土している。B期との関係から8世紀中頃以前の可能性がある。

B期（8世紀中頃～後半） B-1期では坪境小路SD10と八坪西辺を限る溝SD09が掘削される。B-2期ではSD10と重複してSK07が掘削されることから坪境小路は機能を消失したと考えられる。B-3期にはSK07に重複してSK06が掘削される。出土遺物からB-2・3期の土坑は道路廃絶時に掘削されたものであり、短期間であると想定できるためB期に含めた。SK06では暗文のある土師器があり、須恵器食器類も器壁が厚い傾向にある。瓦類も軒丸瓦6285Ba（II・2期）、軒平瓦6710C（III・2期）が出土しており、C期のSK05出土土器からみて、B期は概ね8世紀中頃～後半に比定できる。

C期（8世紀後半～末） C-1期に坪境小路を横断する東西溝SD11が掘削される。C-2期にはSD11に重複して堀立柱建物SB03が構築され、位置関係と出土遺物からSK05・SD08も同時期であると考えられる。SK05からは8世紀後半～末の土器がまとまって出土しており、軒瓦もIV期のものだけが出土していることから整合性がある。

D期（8世紀末～9世紀初頭） 堀立柱建物SA04が構築される。柱穴から8世紀末以降とみられる小型化した薄手の土師器皿が出土したことから時期決定した。位置的に坪境を意識した柱列と考えられる。

以上のように、大きく4段階の変遷を追うことができるが、宅地の規模は坪境小路の消長から、A期は2町以上、B期は2町以下、C期は2町以上、D期は不明確と考えることができる。

Ⅲ 左京二条三坊一・八坪の性格について

宅地の性格については、A・C期で2町以上の利用をしており、大規模な宅地を占有した時期のあることがわかつ

った。当地は西側に藤原不比等邸が推定され、東側では発掘調査で2町以上の宅地がいくつか確認されていることから、平城京の大規模宅地が集中するエリアであったと考えられる。ただし、当地が一般的な宅地であるのか公的施設を有する土地であったのかは判断できない。

しかし、本調査地におけるC期にはやや異質な性格を指摘できる。C期の遺構を主とする場所からは、軒丸瓦6151型式5点、軒平瓦6760型式2点が出土した。これらは從来、平城宮東院玉殿所用瓦と考えられてきたもので、東院地区で多く出土する軒瓦である。一方、平城京内からは軒丸瓦6151型式でみれば10点程度しか出土しておらず、最も出土した左京三条二坊一・二・七・八坪でも2点のみである。本調査ではこれに比べて面積の狭いなかで5点出土していることから、宅地の特徴を考えることができる。さらに南側の七坪でも軒丸瓦6151型式・軒平瓦6760型式の組み合わせが出土しており、C期には一・二・七・八坪を4町利用した可能性もある。

この組み合わせが平城宮東院以外で多く出土しているのが秋篠寺であり、その勅願は光仁天皇である。平城宮東院も光仁期には楊梅宮が設けられており、軒丸瓦6151型式・軒平瓦6760型式が光仁天皇に関わる施設に共通して採用されていることがわかる。

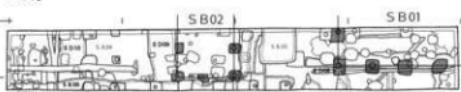
本調査および周辺でこの組み合わせの軒瓦が出土する意義については、今後の調査を待つ必要があるが、出土地が限定的な軒瓦が出土したことは留意すべき点であり、今後宅地の性格を考える上で参考となる成果である。

(村瀬 陸)

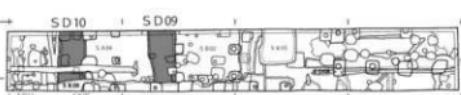
参考文献

- 森郡夫 1978 秋篠寺の「瓦」の項 太田博太郎編
『大和古寺大観 第5巻』

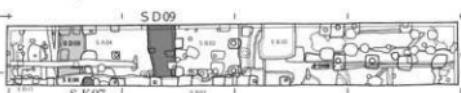
A期



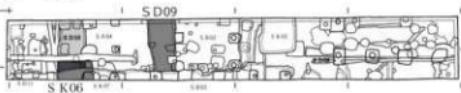
B-1期



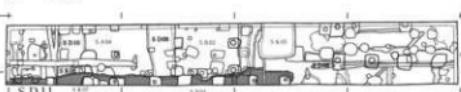
B-2期



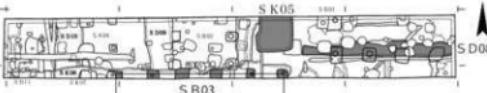
B-3期



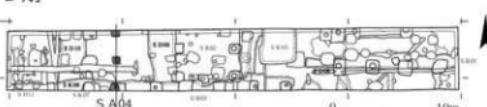
C-1期



C-2期



D期



HJ第704次調査 遺構変遷図

7. 平城京跡（右京北辺四坊一坪・西三坊大路）の調査 第699次

事業名 共同住宅新築	調査期間 平成28年5月9日～6月10日
届出者 西奈良不動産	調査面積 510m ²
調査地 西大寺赤田町一丁目665番1	調査担当者 村瀬 陸

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると右京北辺四坊一坪にあたり、東に西三坊大路が推定される。平城京以前には、北西に古墳時代後期～飛鳥時代の赤田横穴墓群・赤田1号墳があり、東には佐紀古墳群が位置する。奈良時代には、北辺坊に関連する遺構を確認した例（国103-16・112-7・151-26次）があるが、西三坊大路推定地で側溝がなかった例（元興寺 2003年度調査）、坪境小路側溝がなかった例（HJ第322次調査）もあり、北辺坊には不明確な点が多い。ほかに、HJ第322次調査では奈良時代後半～平安時代の大型建物と鉄造遺構を確認している。国151-26次調査では奈良時代前半の整地と建物を確認している。本調査は、北辺坊の様相把握を目的に実施した。

II 基本層序

調査地は、南半が谷となり遺構の大部分は谷より北側に位置する。層序は、谷側で造成土（厚さ約0.6m）下、黒色耕土（約0.2m）、灰色床土（約0.1m）、黄褐色旧耕土（約0.3m）、灰色土・黄褐色土混合土（約0.2m）、暗褐色土（約0.4m）、以下奈良時代の整地土で暗褐色土（約0.4m）、褐色土（約0.6m）と続き、現地表下約2.8mで黄褐色粘質土の地山となるが、谷は南へさらに深くなると想定される。遺構密度の高い北側の層序は造成土（約0.5m）下、黒色耕土（約0.15m）、灰色床土（約0.05m）、黄褐色旧耕土（約0.1m）、橙色土（約0.1m）と続き、現地表下約1.0mで地山となる。遺構検出は地山上面で行い、その標高は概ね84.2mである。



HJ第699次調査 発掘区位置図(1/5,000)

III 検出遺構

主な遺構には、飛鳥時代の掘立柱建物8棟、溝7条、土坑2、奈良時代の堅穴建物1棟、掘立柱建物3棟、掘立柱列1条、溝2条、土坑1がある。西三坊大路確認のため、発掘区南東隅を東側へ拡張したが、谷の落ち込みが続くだけで遺構はなかった。大路が施工されていれば、遺存地割からみても調査地より東に推定できる。

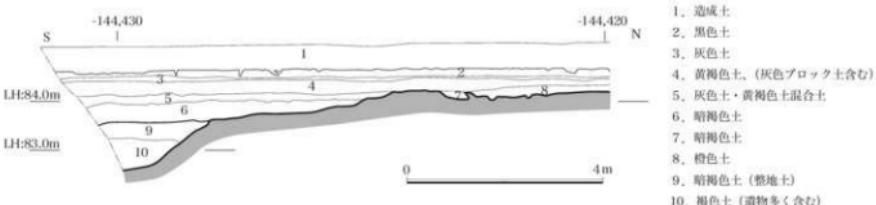
i 飛鳥時代の遺構

当該期の遺構は重複関係から2時期に大別できる。

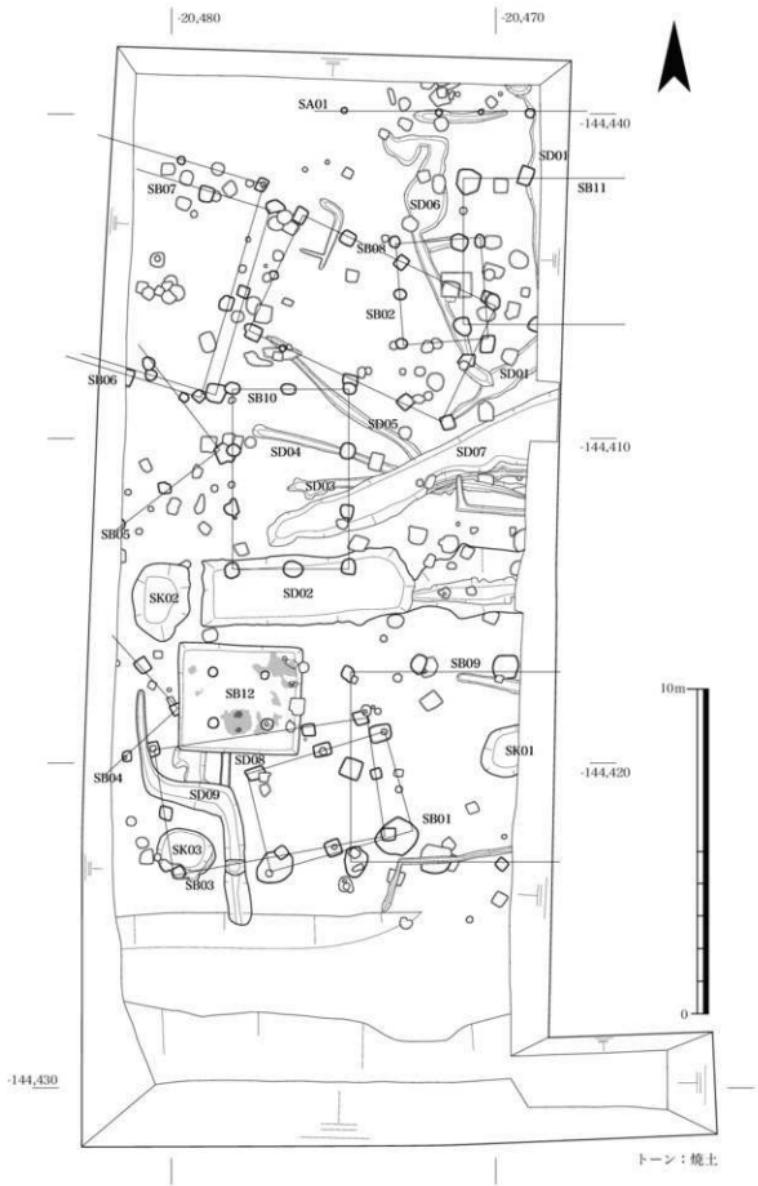
Ⅰ期

掘立柱建物 SB01・02 重複関係からSB03・08より古い。飛鳥時代より古い遺物が埴輪以外に出土しないことから、古墳時代には遡らない可能性が高い。2棟とも1間×2間と他より小規模である。

溝 SD01・02 SD01は、くの字状に屈曲し区画溝



HJ第699次調査 発掘区西壁土層断面図(1/100)



HJ第699次調査 遺構平面図 (1/150)



H J 第699次調査 発掘区南半 全景（北から）



H J 第699次調査 発掘区北半 全景（南東から）

HJ第699次調査 遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(面)		桁行全长 (m)	梁行全长 (m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行	梁行						
SB01	北東・南西	2	1	4.6	3.1	2.3	3.1	0.2	飛鳥時代Ⅰ期
SB02	北西・南東	2	1	3.1	2.6	1.5	2.6	0.3	飛鳥時代Ⅰ期
SB03	北東・南西	4	2	6.6	3.7	1.6	1.8	0.2	飛鳥時代Ⅱ期
SB04	不明	1以上	1以上	2以上	2以上	2	2	0.2	飛鳥時代Ⅱ期
SB05	不明	2以上	2以上	3.5以上	3.5以上	1.7	1.7	0.3	飛鳥時代Ⅱ期
SB06	北西・南東	1以上	2	2.6以上	6.9	2.6	3.4	0.3	飛鳥時代Ⅱ期
SB07	北西・南東	1以上	2	2.1以上	5.9	2.1	2.9	0.4	飛鳥時代Ⅱ期
SB08	北西・南東	4	2	6.6	3.9	1.6	1.9	0.4	飛鳥時代Ⅱ期
SB09	東西	2以上	2	5.2以上	5.8	2.4	2.9	0.4	奈良時代
SB10	南北	3	2	5.5	3.6	1.8	1.8	0.3	奈良時代
SB11	東西	1以上	2	2.2以上	4.5	1.9	2.2	0.3	奈良時代
SA01	東西	3以上?		5.6以上		2.8-1.3-1.5		0.1	奈良時代

遺構番号	形状	規模(m)	深さ(m)	時期	出土遺物	備考
SB12	長方形	3.8×3.4	0.35	8世紀	土師器(甕・杯皿類、電)、須恵器(杯A・B)、平瓦	掘方内に柱穴4つあり、3列の堆積があり、中層で柱穴を検出。最下層面で炭・焼土が広がる。中層・最下層面で遺物が出土し、上層から瓦片等が出土。
SK01	不整円形	1.6	0.3	7世紀	土師器(杯皿類)	
SK02	不整円形	1.7～2.4	0.3	7世紀	土師器(杯皿類、甕、把手)	
SK03	不整円形	1.6～1.8	0.4	8世紀	土師器(杯B、甕)	
SD01	L字形	11.4以上	0.05	7世紀	なし	SD06より古い。
SD02	東西	9.8以上	0.2	7世紀	土師器(杯皿類、甕、高杯)、須恵器(杯H・G、甕、高杯)	
SD03	北西・南東	7.3以上	0.1	7世紀	なし	SD07より古い。
SD04	北西・南東	8.7以上	0.1	7世紀	なし	SD07より古い。
SD05	北西・南東	6.2以上	0.1	7世紀	土師器小片	SD07より古い。
SD06	北西・南東	8.2	0.1	7世紀	土師器甕、須恵器甕	
SD07	北東・南西	9.5以上	0.1	7世紀	土師器(杯皿類)、須恵器小片	
SD08	南北	1.0	0.2	8世紀	土師器小片	SB12、SD09より古いが、両者を繋ぐように配置され、重複関係は埋土の違いの可能性あり。
SD09	屈曲	7.0	0.2	8世紀前半～中期	須恵器(杯蓋)	

と考えられる。SD02は、埋土から7世紀前半の土器が出土し、重複関係から奈良時代の建物より古くなる。溝底は東から西へ深くなる。

II期

掘立柱建物 SB03～08 建物主軸が南北方眼方位と合致せず、重複関係からSB09～12より古くなることから奈良時代以前と推定できる。柱穴からの出土遺物は乏しいが、SB03柱穴からは7世紀の土器が出土した。SB05～07は建物配置や重複関係から少なくとも、3時期の建て替えがあったと推定できる。

溝 SD03～07 SD07は斜方向の溝で、重複関係からSD03～06より新しい。放射状にのびるSD03～06は、南東方向へ収束する傾向があり、東側に何らかの遺構が存在する可能性もある。

土坑 SK01・02 時期を示す遺物に乏しいが、SK01はSB09と、SK02はSD02との位置関係から時期を推定した。

ii 奈良時代の遺構

掘立柱建物 SB09～11 建物主軸が国土方眼方位にはほぼ合致し、柱穴から7～8世紀の土器が出土するため、奈良時代の建物と推定する。3棟はコの字型に配置され、南が谷となることから東を正面とした可能性がある。SA01はこれらを区画する掘立柱櫛と考える。

竪穴建物 SB12 約3.8×3.4mの方形掘方で、深さ約0.35mである。掘方内には4つの柱穴が四隅に並ぶ。埋土は、上から黄褐色土(約0.2m)、灰褐色土(約0.1m)、明黄褐色土(約0.1m)と堆積し、灰褐色土上面(2次床面)で柱穴を検出した。明黄褐色土上面(1次床面)では、炭の広がる部分が数カ所あり、とくに南側の柱穴間に炭が不整円形に広がるなかに、床面が焼けて赤色化する部分がある。2次床面には炭や焼けた痕跡はなかった。1次床面で8世紀の須恵器・丸瓦、2次床面で完形に近い平瓦、最も遺物を包含する黄褐色土中から土師器杯皿類、甕、電、須恵器蓋が出土した。



竪穴建物SB12 遺物出土状態(南西から)

溝 SD08・09 SD08は、重複関係からSB12・SD09より古くなるが、出土遺物は同時期であり、両者を繋ぐように位置することから関連する可能性がある。SD09は、SB12を避けるように屈曲する溝である。西から東へ低くなる地形であることから、排水を目的とした可能性がある。

土坑 SK03 8世紀の土器が出土するが量は少ない。SD09との位置関係から両者は関連する可能性がある。

IV 出土遺物

遺物整理箱で11箱分がある。内訳は、古墳時代中後期の円筒埴輪、7世紀前半の土師器(杯皿類・高杯)、須恵器(杯H・杯G・高杯)、8世紀の土師器(杯皿・甕・竈)、須恵器(杯A・杯B・甕・壺)・丸瓦・平瓦がある。ひとつの遺構からの出土量が非常に少なく破片が多い。

図化したのはSB12出土土器(1~3)とSD09出土土器(4)である。須恵器A(1)は、胎土が白く焼成不良により摩滅し調整は不明である。須恵器B(2)は口径20.1cm、器高6.5cmと比較的の法量が大きい。高台は外側に取りつき、底面はや上げ底となる。底部外面は未調整で高台付近のみロクロナデを施す。土師器竈(3)はSB01最上層出土であるが、遺構の性格を考え上で重要な遺物である。須恵器蓋(4)は復元口径36.8cmで、外面は口縁端部のみロクロナデ、以上をロクロケズリ、内面は平滑でミガキ調整を施す。器壁が厚く、口縁端部には段がつく。

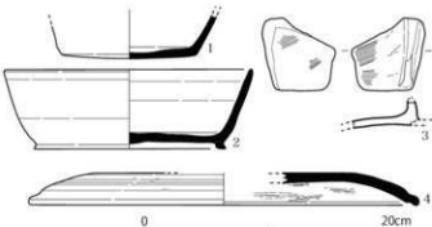
以上の出土土器から時期決定するのは困難であり、西大寺創建の前後どちらかを判断する決め手はない。

V 調査所見

本調査では、主に以下3つの成果を得た。

i 奈良時代の竪穴建物

竪穴建物は、近畿地方で古墳時代以前には一般的な建物形態であったが、奈良時代には掘立柱建物が主となり、とくに平城京内でも奈良時代の竪穴建物は確認されていない。ただし、奈良市東山間部の水間遺跡では奈良時代の



竪穴建物SB12(1~3)・溝SD09(4)出土土器(1/4)

竪穴建物が確認されている。関東では奈良時代にも竪穴建物が一定数存続して掘立柱建物と並存し、火の使用痕があるものは竈屋と考えられている。さらに、奈良時代末の長岡京跡では、4例の竪穴建物が確認され、うち1例は本調査例と同様に柱穴を伴うもので、いずれも出土遺物等から鍛冶工房が想定されている。

今回検出したSB12は、2時期の床面があり、南東隅の柱穴のみ掘方と柱痕跡を確認し、他3つは柱痕跡のみを確認した。検出状態から、1次床面時に火を用いた活動を行い、ある時期に床を土で盛り上げて2次床面としたが、南東隅柱のみ建て替えたと推定できる。最上層では竈の破片が出土しており、これを使用した可能性が高い。仮にこれが竈屋としての機能を果たした竪穴建物であるならば、そのような遺構が平城京内では未確認であることから、平城京北辺の様相を示す重要な成果と言える。

ii 遺構配置

奈良時代の遺構として、コの字型に配置された3棟の掘立柱建物SB09~11と、これらと重複せず配置から並存した可能性がある竪穴建物SB12と溝SD09がある。

北辺坊は奈良時代中頃の西大寺創建に伴って拡充施工されたとされ、それとの関連の有無が課題である。コの字型に配置する建物と、その一角で竈屋の可能性がある竪穴建物があるよう構成は、これまで平城京内では確認されておらず、興味深い成果と言える。

iii 墳墓と居住域

本調査では、飛鳥時代の掘立柱建物を検出した。周辺の調査でも古墳時代後期~飛鳥時代の建物が確認されており、付近一帯が秋篠地域であることから土師氏の居住地とする見解もある。調査地の北西には、土師氏の墳墓である可能性が高い赤田横穴墓群・赤田1号墳があり、周辺に同時期の居住域の広がりを確認できたことは、墳墓と集落関係を考える上で貴重な成果である。

(村瀬 陸)

8. 平城京跡（左京八条一坊四坪）の調査 第700次

事業名 工場増築
届出者 奈良交通株式会社
調査地 西九条町五丁目1番1号

調査期間 平成28年5月23日～6月10日
調査面積 176m²
調査担当者 安井宣也

Iはじめに

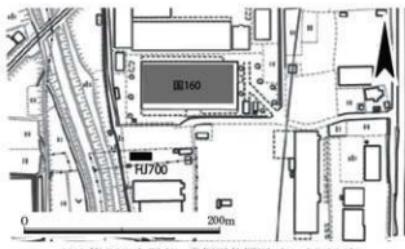
調査地は、平城京の条坊復元では左京八条一坊四坪の北辺中央付近にある。地形的には佐保川が形成した氾濫平野の西寄りにあたり、すぐ西に佐保川の現河道がある。現状は工場敷地で、旧状は水田である。

四坪内では過去に本格的な調査は行われていないが、三・六坪の南寄りにあたる北隣接地では1984年に奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）が平城第160次調査を実施し、地山上面（標高52.2～52.5m）で弥生時代後期末の土坑、古墳時代中期末～後期後半の建物・壠と堰を作った旧河川、奈良～平安時代初頭の建物・壠・溝・井戸・土坑・池状遺構を検出している。

今回の調査は、奈良時代の四坪内の宅地利用の様相の確認を主な目的とし、古墳時代以前や平安時代以降の土地利用の様相の把握にも留意して実施した。

II 基本層序

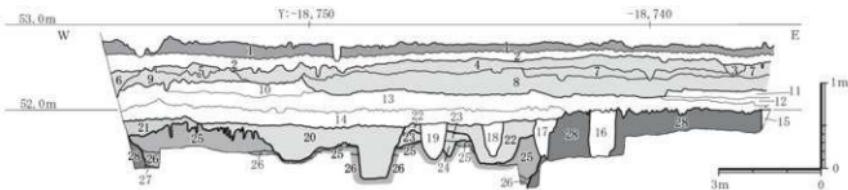
工場敷地の造成土（厚さ0.7m）の下に、①旧水田の耕土・床土層（厚さ0.2～0.3m）、②現佐保川の氾濫堆積層である砂礫層、砂・シルト互層や氾濫後の耕地の整地土層とみられるシルトブロック土層（厚さ0.2～0.5m）、③後背湿地の様相を示すシルト・粘土層（厚さ



HJ第700次調査 発掘区位置図 (1 / 5,000)

0.2～0.5m）があり、発掘区東寄りではその下が灰色砂質シルト～粘土層の地山上面、同西寄りでは湿地の様相を示す褐色砂質シルト～粘土層（厚さ0.2m）をはさんで南流する旧河川（幅約13m、深さ0.8m以上）の埋土の最上層である黄灰色砂質シルト層の上面となる。

③最下層の褐灰色砂質シルト層（土層図14層）は、奈良時代と鎌倉時代の土器片を含み、乾田に特徴的な斑鉄と乾裂痕がみられる。奈良時代の遺構面は地山及び褐色砂質シルト～粘土層の上面（標高51.8～52.0m）である。また、旧河川の部分では黄灰色砂質シルト層上面（標高51.6～51.8m）で古墳時代以前の遺構を確認した。

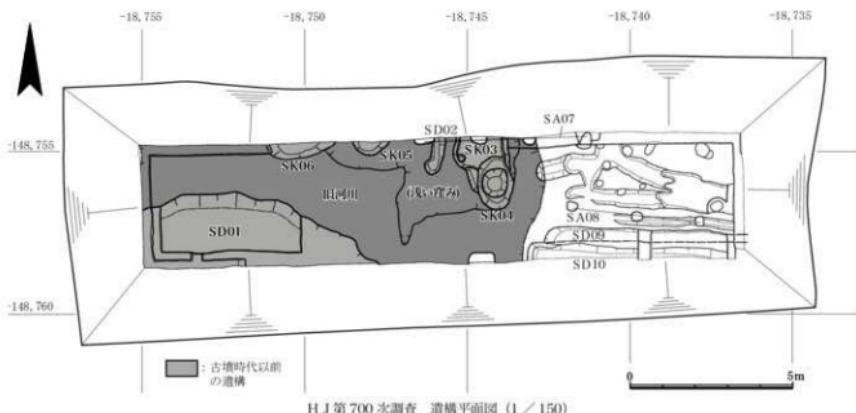


1. 黒色シルト質砂
2. 緑灰色シルト質砂
3. 灰色砂礫
4. 灰褐色砂礫、砂質シルトブロック含む
5. 青灰色砂質シルトブロック、隙間に砂礫含む
6. 灰色砂・砂質シルトブロック含む
7. 青灰色砂質シルト
8. 灰色砂質シルト・黄色砂のラミナ互層
9. 青灰色砂質シルト・黄色砂のラミナ互層
10. 灰色砂質シルト
11. 灰色シルト質砂
12. 灰色砂質シルト
13. 灰白色砂質粘土～シルト
14. 揭灰色砂質シルト

15. 黒褐色砂質シルト
16. 揭灰色砂質シルト
17. 褐褐色砂質シルト
18. 黄灰色砂質シルト
19. 黄灰色砂質粘土～シルト
20. 黄灰色砂質粘土～シルト、炭粒含む
21. 黄褐色砂質粘土～シルト、炭粒含む
22. 黑褐色砂質粘土、炭粒含む
23. 黄灰色砂質粘土～シルト
24. 灰色砂質粘土～シルト
25. 黄灰色砂質シルト
26. 灰白色シルト・砂のラミナ互層
27. 灰色シルト混じり砂
28. 灰色砂質粘土～シルト

- 1・2：敷地造成前の水田耕土・床土
- 3・4・6・8・9：現佐保川の氾濫堆積層
- 5・7：氾濫後の水田の整地土層
- 10～14：旧佐保川の後背湿地の堆積層
- 15：奈良時代の柱穴埋土
- 16～19：S A07の柱穴埋土
- 20：S K05・06の埋土
- 21：旧河川上の湿地の堆積層
- 22：S K03・04の埋土
- 23：浅い窪みの埋土
- 24：S D02の埋土
- 25～27：旧河川の埋土
- 28：地山（沖積層）

HJ第700次調査 発掘区北壁断面図（旧水田耕土以下、縦：1 / 60、横：1 / 150）



III 検出遺構

主なものは、古墳時代以前の溝2条（SD01・02）、土坑4基（SK03～06）と奈良時代の掘立柱列2条（SA07・08）、溝2条（SD09・10）で、概要是下記及び一覧表の通りである。

(1) 古墳時代以前の遺構

SD01は旧河川を横断することから、溝と判断した。土

層の先後関係から後述のSK05・06より古い。SD02は弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器片を含む黄灰色砂質シルト～粘土で埋まる浅い窪み内にある。ともに埋土は灰色シルト～粘土で、出土遺物はない。

SK04は、掘削底部が湧水層の灰白色シルト・砂ラミナ互層に達しており、最上層の埋土がSK03と一連であることから、湧水施設としてSK03と一緒に機能した可能性も



HJ第700次調査 発掘区全景(東から)

HJ第700次調査 遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD01	北西-南東	幅 2.2 以上×長さ 7.0 以上	0.4	古墳中期以前	-	北岸付近を検出、SK05・06より古い。
SD02	南北	幅 0.4 以上×長さ 1.1 以上	0.2	弥生後期末以前	-	直上を覆う土層から弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土
SK03	隅丸方形？	東西 1.5 ×南北 2.1 以上	0.3	古墳中期	-	
SK04	楕円形	東西 1.1 ×南北 1.6	1.1	古墳中期	土師器壺・高杯 (布留式新相)	埋土の最上層は SK03 の埋土と一連
SK05	楕円形	東西 1.1 以上×南北 0.4 以上	0.4	古墳中～後期	-	SK03・04より新しい。
SK06	楕円形	東西 1.8 以上×南北 0.5 以上	0.3	古墳中～後期	-	埋土は SK05 と一連
SD09	東西	幅 0.6 以上×長さ 6.2 以上	0.3	8世紀の可能性	土師器高杯片 (布留式)	埋土は地山ブロック土
SD10	東西	幅 0.4 以上×長さ 6.7 以上	0.3	8世紀の可能性	土師器高杯片 (布留式)	埋土は地山ブロック土、SD09 より新しい。

遺構番号	方 向	規 模 (間)	全長 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴の深さ (m)	備 考
SA07	南北	3	5.1	西から 1.8 - 1.5 - 1.8	0.4 ~ 0.6	
SA08	東西	2 以上	3.9 以上	1.95 等間	0.4 ~ 0.5	方位は西でやや北に振れ。発掘区外東に続く可能性

ある。埋土の最上層から古墳時代中期の土師器が出土した。SK05・06はともに旧河川上を覆う褐色砂質シルト～粘土層で埋まっており、発掘区北壁での埋土の先後関係から、前述のSK03・04より新しい。

(2) 奈良時代の遺構

時期を特定できる出土遺物はないが、条坊の方位とほぼ合うことや遺構面直上の土層から奈良時代の土器片が出土したことを考慮し、この時期のものと推定した。

SA07・08は、ともに塼か建物の柱列の一部の可能性がある。SD10は、先後関係と重複関係からSD09を掘り直した溝と考える。

III 出土遺物

土器類、瓦類が遺物整理箱で4箱分出土している。

溝SD02のある深い溝の埋土から出土した弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器には、大和第VI-3・4様式の甌、庄内式の二重口縁甌・小型器台・高杯がある。二重口縁甌は口縁下部外面に櫛描波状文を描く。

土坑 SK04 から出土した古墳時代の土師器の大半は高杯で、杯部外面の屈曲部に棱があるものを含み、脚軸部はやや短く外面にケズリ調整痕がみられる。甌は、外湾する口縁の端部内面が内傾するものや二重口縁のものがある。布留式でも新しい様相を示す。

奈良時代の遺構面上を覆う褐色砂質シルト層から出土した土器類は、8世紀の土師器甌・須恵器甌・壺・杯・杯蓋と 12～13世紀の土師器羽釜、瓦器椀、白磁碗で、いずれも細片である。

IV 調査成果

奈良時代の四坪北辺部が宅地として利用されたことがうかがえる。また、北隣接地で奈文研が実施した平城第160次調査の際に確認された弥生時代後期末及び古墳時代中期の遺跡の範囲が今回の調査地周辺まで広がる可能性がある。

(安井宣也)

- 1) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条一坊三・六坪 発掘調査報告書』奈良県教育委員会 (1985)



HJ第700次調査 溝 SD02 及び土坑 SK03～06 (東から)



HJ第700次調査 土坑 SK04 上器出土状態 (南から)

9. 平城京跡（左京四条三坊十二・十三坪）の調査 第703次

事業名 宅地造成	調査期間 平成28年6月20日～7月1日
届出者 八洲エイジメント	調査面積 120m ²
調査地 三条桧町403番1	調査担当者 村瀬 陸

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条三坊十二・十三坪、および両坪の坪境小路にあたる。周辺では、十二坪内のH.J第110次・国141-29次調査で奈良時代の掘立柱建物、十三坪内のH.J第270次調査で北東-南西方向の河川、元興寺文化財研究所2005年調査で奈良時代の掘立柱建物のほかに弥生時代中期前半の方形周溝墓を検出している。

本調査は、坪境小路の確認を目的とし、弥生時代における遺跡の広がりも視野に入れて実施した。

II 基本層序

層序は、上から現代の造成土（厚さ約1.1m）、旧耕土（約0.2m）、灰色土（約0.05m）と続き、現地表下約1.35mで青灰色粘土の地山となる。遺構検出は、地山上面で行い、その標高は概ね59.3mである。

III 検出遺構

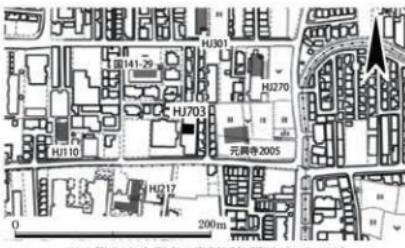
弥生時代中期の溝1条（SD01）、奈良～平安時代の溝3条（SD02～04）、奈良時代以降の土坑1（SK05）がある。

SD01 全長約3.4m、幅約0.8m、深さ約0.1mの東西溝である。東で南へ若干振れ、東端がやや南へ屈曲する。褐色土で埋まり、埋土から櫛描文が施された弥生時代中期の直口壺が出土した。

SD02 長さ6.0m以上、幅約1.0m、深さ約0.25mの南北溝である。二段に掘り込まれ、中央が一段深くなる。溝心はX=-146,685.00m、Y=-17,378.89mである。7世紀の平瓦、8世紀の土器・瓦が出土した。

SD03 長さ6.1m以上、幅約1.0m、深さ約0.1mである。北で西にやや振れる。8～9世紀の土器・瓦が出土した。

SD04 長さ6.2m以上、幅0.7m以上、深さ約0.2mである。東肩は発掘区外となる。8世紀の土器が少量出土した。重複関係からSD04より古くなるピットがある。



H.J 703次調査 発掘区位置図(1/5,000)

SK05 東西1.5m、南北は1.7m以上の方形土坑で、深さ約0.4mである。8～9世紀の土器がわずかに出土した。重複関係からSD03より新しい。

IV 出土遺物

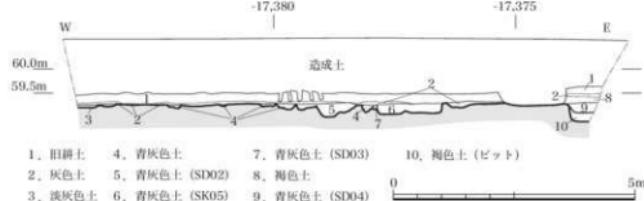
遺物整理箱で2箱分がある。内訳は、弥生時代中期前半（大和第II・3様式）の直口壺、7世紀の平瓦、8～9世紀の土器・須恵器・平瓦である。

V 調査所見

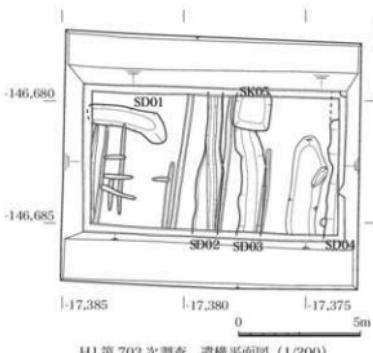
弥生時代溝SD01は、弥生時代中期の土器を含み、その形状は東西にのびて、東で南へ屈曲する形状を呈する。調査地東側では同時期の方形周溝墓が検出されており、その周溝は後世に削られたことで途切れた部分が多く確認できる。SD01も屈曲をもち、両端は収束している。

のことから、流路のような機能を想定することはできず、方形周溝墓の一部である可能性がある。

奈良時代 坪境小路推定位置に発掘区を設定し、国土方眼方位と一致する溝2条（SD02・04）を検出した。



H.J 703次調査 発掘区北壁断面図(1/100)



註

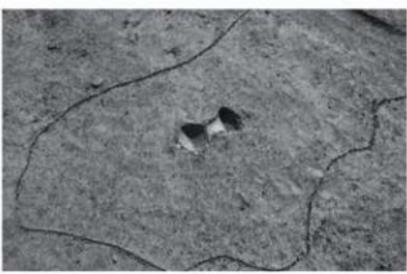
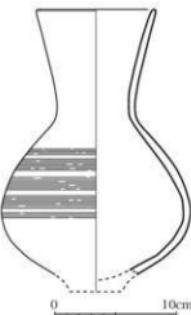
- 1) 奈良文化財研究所 2003『平城京条坊総合地図』での数値に基づく。
 - 2) 南北道路である東四坊大路・東五坊間路での調査成果による。
- 奈良県立橿原考古学研究所 2013『平城京左京二・三・五条五坊』



H J 第703次調査 発掘区全景 (南西から)



H J 第703次調査 溝 SD02～04 (南から)



10. 平城京跡（左京三条五坊十六坪）・奈良町遺跡の調査 第707次

事業名 共同住宅新築	調査期間 平成28年10月13日～10月20日
届出者 個人	調査面積 153.5m ²
調査地 奈良市芝辻町858番41、858番42	調査担当者 鎌方正樹

Iはじめに

調査地は、平城京条坊復元によると左京三条五坊十六坪の中央西寄りに相当する。平成28年10月3日に試掘調査を実施したところ、現地表面から0.1～0.3m前後の深さで遺構面を検出した。工事が遺構面に及ぶため、事業者と協議して西区と東区の発掘調査を実施した。

なお、調査は基礎掘削底の高さ79.67mまでにとどめることとなり、東区の大半は未発掘のまま調査を終えた。

II 基本層序

西区 現地表の直下0.1～0.2mで遺構面の地山（黄橙褐色礫混じりシルト）となる。遺構面は南へと緩やかに下がっており、その標高は概ね79.7～79.8mである。

東区 北東隅で地山を確認したのみで、大半は表層（1層）及び造成土（2層）内で掘削がとどまる。そこで東壁沿いを深掘りしたところ、造成土の下に黒色土（旧表土）、明褐色土が堆積し、0.1～0.2m下で地山を検出した。北側にのみ奈良時代の遺物を含む黄灰色土が地山上に堆積する。地山面の標高は概ね79.5～79.6mである。

III 検出遺構

A. 奈良時代の遺構

SX01 不整形な凹みが東西方向に連なり、溝状となる。全長9.2m、幅0.7～2.6m、深さ0.05～0.1m。奈良時代の須恵器・土師器が少量出土。

B. 平安時代末～室町時代の遺構

SA02 東西3間の掘立柱列で、柱間は2.1m等間。柱穴の深さは約0.1mで、13～14世紀頃の土器が出土。

SD03 南北方向の素掘溝で、全長4.7m以上、幅0.4～0.8m、深さ0.1m前後。12世紀後半の土器が少量出土。

SK04 隅丸長方形状の土坑で、南北長0.85m、東西長0.6m、深さ0.1m以上。15世紀の土器が少量出土。

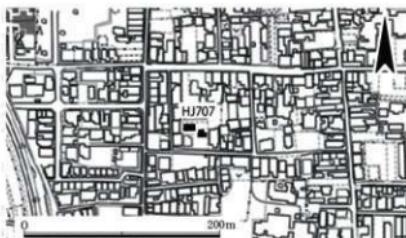
P1 東西長0.4m、南北長0.3m、深さ0.1mの小柱穴で、12世紀中頃の瓦器梶・土師器皿が出土。

IV 出土遺物

奈良時代～室町時代の土師器・須恵器・綠釉陶器・瓦器・瓦質土器・平瓦などが遺物整理箱1箱分出土した。

V 調査所見

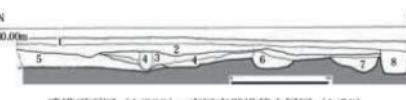
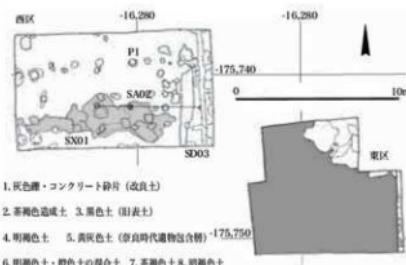
SX01は、十六坪内を南北に2分割して利用した際の区画施設の一部となる可能性が考えられる。（鎌方正樹）



HJ第707次調査 発掘区位置図(1/5,000)



HJ第707次調査 発掘区全景(北西から)



遺構平面図(1/300)・東区東壁堆積土層図(1/50)

11. 史跡大安寺旧境内の調査

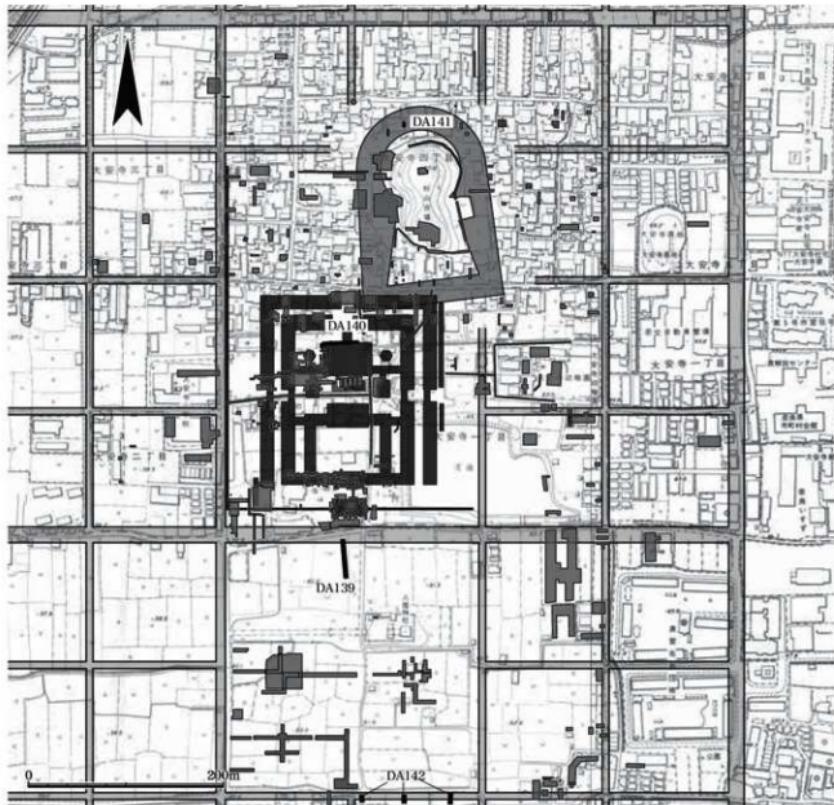
奈良市教育委員会では、平成 28 年度に史跡大安寺旧境内において 4 件の発掘調査を実施した。

第 139 次と第 142 次調査は、それぞれ塔院の北・南辺を確認する調査で、第 141 次調査は、境内に

存した杉山古墳の周濠部分の調査である。なお、第 140 次調査は、第 137 次調査と合わせて「奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 27（2015）年度」で報告済みである。

史跡大安寺旧境内 平成 28 年度発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第 139 次調査	範囲確認調査	東九条町 1295-2 他	H28.8.3 ~ 11.2	200 m ²	原田・吉田
DA 第 140 次調査	水路改修	大安寺二丁目 1147, 1148-1, 1148-2	H28.7.25 ~ 9.1	130.5 m ²	鏡方
DA 第 141 次調査	倉庫解体・離れ新築	大安寺西四丁目 1073-2, 1076-2 他	H28.10.24 ~ 10.28	16.5 m ²	水野
DA 第 142 次調査	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1159-1-3-4-5, 1160-1, 1161-1	H28.11.28 ~ 12.27	150 m ²	村瀬



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

(1) 塔院・六条大路の調査 第139次

Iはじめに

本調査は史跡大安寺旧境内の範囲確認と今後の整備事業を進めていく上で必要な資料を得るために発掘調査事業で、本年度から実施した。

大安寺の寺院地の復元案については、従来、左京六条四坊二～七・十～十二坪と左京七条四坊一・二・七～十坪の15町を占地していたとする考え方¹⁾が支配的であった。これに対して、発掘調査の成果等から左京六条四坊一～十一坪と左京七条四坊一・二・七・八坪の15町を占地していたとした。天平19年の『大安寺伽藍縁起井流記資財帳』勘録以降に、左京六条四坊十二坪が寺院地に加わったとみる考えが出された²⁾。ただし、史跡大安寺旧境内で六条大路がみつかっていないこと等から、後者の案を疑問視する見方もある³⁾。

このように、大きくは2つの案が出されている状況があるが、いずれか判断する手掛かりの一つとしては、六条大路の有無確認が必要と考える。

そのため本年度は南大門と塔院間に想定される六条大路の南側溝・築地塀・雨落溝の確認を主目的として、南大門南西側に東西5m、南北40mの南北に長い発掘区を設定して調査を実施した。

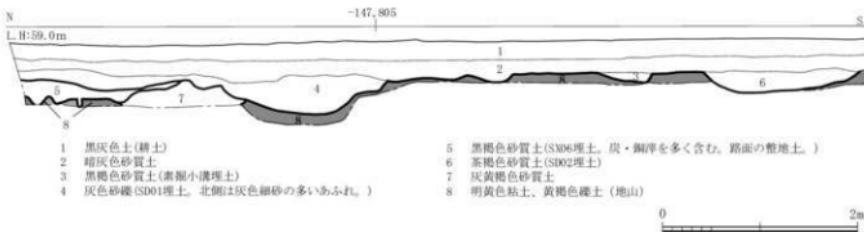
また平城京左京七条四坊一坪に該当する、西塔北東辺の塔院地区の様相確認も目的に調査をすすめた。

II 基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から黒灰色土（耕土）、暗灰色砂質土（底土）と続き、地表下約0.3mで明黄色粘土か黄褐色礫土の地山に至る。地山上面の標高は、概ね58.5mである。遺構検出は、基本的に地山上面で行なった。ただし発掘区南半では地山上面に広く整地土が被っており、その整地土上面と、整地土除去後の地山上面の2面で遺構検出を行なった。

III 検出遺構

検出した主な遺構には、溝、掘立柱建物、井戸がある。



DA第139次調査 発掘区東壁土層図(1/50)

他に地盤を均すための整地を2箇所で確認した。

また近世の水田耕作に関わるとみられる、いわゆる素掘小溝を80条確認した。素掘小溝の埋土からは18世紀の信楽焼鉢鉢が出土した。

溝SD01は発掘区北辺で確認した東西方向の溝で、幅1.5～2.0m、東西約5.0m分を検出した。遺構検出面からの深さは約0.4mである。埋土は灰色砂礫で、北側のあふれが広がる部分は灰色細砂を多く含む。埋土からは瓦類が多く出土し、軒瓦では軒丸瓦88A⁴⁾・105A・108B・174A、軒平瓦6690A・6712A・250BA、鬼瓦を含み、14世紀以降に埋没したとみられる。溝心の座標値はX=-147,804.250m、Y=-17,110.600mである。

溝SD02は溝SD01の約3.0m南側で確認した東西方向の溝で、幅1.5～2.0m、東西約5.0m分を検出した。遺構検出面からの深さは約0.2mである。埋土は茶褐色砂質土で、溝SD01と同様に瓦類が多く出土したが、出土瓦類の年代は奈良～平安時代におさまる。溝心の座標値はX=-147,809.140m、Y=-17,109.380mである。

建物SB03は建物の主軸方向が北で西にやや振れる東西棟掘立柱建物である。梁行2間(3.6m)、桁行1間(2.7m)分を確認し、西側は発掘区外へ続く。梁行の柱間は1.8m等間である。南北両側柱のうち2箇所の断面観察では、検出面からの柱穴の深さは、いずれも約0.3mで、柱は抜き取られていた。

井戸SE04は南北約2.5mで、東西約2.0m分を確認した。遺構の重複関係から、建物SB03より古いことがわかる。深さは約1.2mで、壁面はほぼ垂直に掘られている。埋土は上下2層に分けることができ、上層は地山粘土ブロックを含む茶褐色砂質土、下層は明灰色粘土である。上層埋土の遺物は多いが破片ばかりである。須恵器皿A・鉢A・壺Cがあり、炭化物も含まれる。一方下層埋土の遺物は少ないが、完形の奈良時代前半の土師器皿

- 1 黒灰色土(耕土)
- 2 暗灰色砂質土
- 3 黒褐色砂質土(素掘小溝埋土)
- 4 灰色砂礫(SD01埋土) 北側は灰色細砂の多いあふれ。)
- 5 黒褐色砂質土(SD06埋土) 炭・銅器を多く含む。路面の整地土。)
- 6 茶褐色砂質土(SD02埋土)
- 7 灰色砂質土(地山)
- 8 明灰色粘土、黄褐色礫土(地山)

A、鉢B、斎串が出土した。なお、下層埋土から出土した土師器鉢Bの底部内面には、焼成後に記号「ヰ」が陰刻されている。同様の記号を土師器皿Aの底部外面上に墨書きしたもののが、大安寺廃院推定地から出土している⁵⁾。埋土の観察から、下層の明灰色粘土が自然に堆積した後、人為的に上層の茶褐色砂質土が入れられ埋没したと考える。底からの湧水が著しいことや、下層埋土から水の祭祀と関わりがあるとみられる斎串が出土したこと、さらには埋土の観察状況から素掘井戸とみられる。

整地SX05は発掘区南半部に広がり、南北約21m分、東西5.0m分を検出した。整地土の厚さは0.1~0.4mで、埋土は灰褐色砂質土である。整地土を除去した底面は、概ね南方に向かって下るが、場所によって凹凸がある。整地土からは、軒丸瓦6137A・6138J、軒平瓦7734A、8世紀末から9世紀前半にかけての黒色土器A類が出土した。整地層上面で遺構検出を行なったが、顕著な遺構は無かった。

整地SX06は発掘区北端部で南北約1.0m、東西約2.0m分を検出した。整地土の厚さは約0.2mで、埋土は炭化物や鉱滓を多く含む黒褐色砂質土である。炉壁片も出土したことから、付近で鋳造作業が行われたことが考えられる。12世紀前半の瓦器類が出土した。

IV 出土遺物

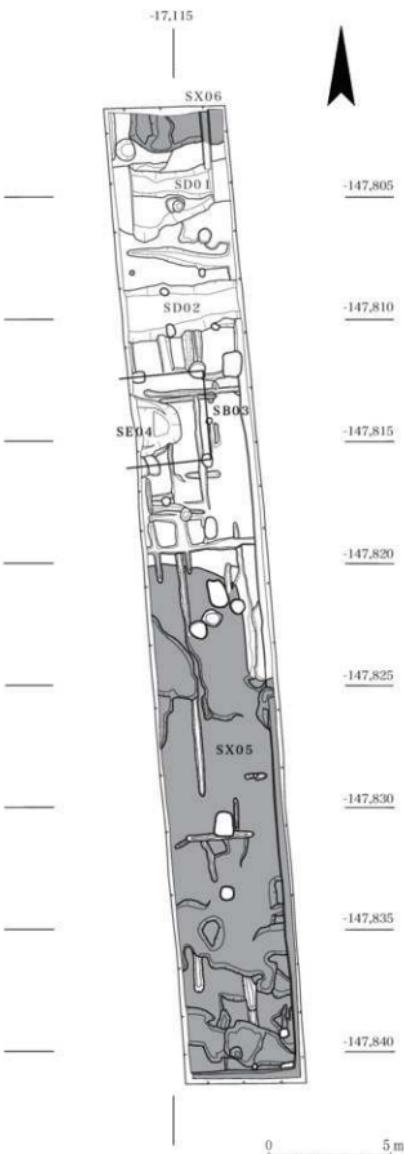
出土遺物は遺物整理箱で58箱分出土した。これらの大半は溝SD01と整地SX05から出土した。出土遺物には8世紀の土師器・須恵器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・斎串、9~10世紀の土師器・須恵器・黒色土器A類・綠釉陶器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、12~13世紀の土師器・軒丸瓦、14世紀の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦、17世紀以降の土師器・陶器・磁器、時期不明の鉱滓・銅滴・不明銅製品・炉壁片がある。

以下では遺物の大半を占める瓦類について述べる。瓦類は遺物整理箱32箱分出土した。丸瓦・平瓦・熨斗瓦が大半であるが、軒丸瓦16点、軒平瓦18点、鬼瓦1点を含む。

奈良時代の軒丸瓦の内訳は6137A 1点、6138J 1点、型式不明1点、中世の軒丸瓦の内訳は88A 2点、105A 1点、108B 1点、174A 3点、型式不明6点である。

奈良時代の軒平瓦の内訳は6690A 1点、6712A 7点、6716C 2点、型式不明4点、平安時代の軒平瓦の内訳は7734A 1点、中世の軒平瓦の内訳は250BA 1点、型式不明2点である。

軒平瓦7734Aは左半部の破片であるが、大安寺での出土は初例となる。内区に5回反転均整唐草紋を飾る。唐草各単位主葉の巻きは強い。中心飾り基部は3弁の花卉を横向きに表現する。外区には珠紋をめぐらす。凸面瓦当付近は



DA第139次調査 遺構平面図(1/200)



出土瓦類(1/4)

ヨコナデ。胎土は粗く、軟質で橙灰色を呈する。7734Aは平城京一条城の東三坊大路周辺での出土が顕著であり、軒丸瓦7349と組合い、この東側の不退寺の創建軒瓦と考えられている。文献史料における不退寺の初見は『三代実録』にある貞觀2年(860)であるが、東三坊大路の調査成果から、不退寺創建が天長7年(830)年頃まで遡る可能性が指摘されている^①。本資料は大安寺塔院地区の整地SX05からの出土であり、このことは、塔周辺の整備完了が9世紀半ば以降まで下ることを示唆するものである。

鬼瓦は中世瓦で、鼻腔部の小片である。

V 調査所見

①発掘区北辺で検出した併行する2本の溝SD01とSD02は、その位置関係から北側の溝SD01が六条大路南側溝、溝SD02が築地塀雨落溝で、両溝から多量の瓦類が出土したことから、両溝間の約3.0mの空閑地に塔院北面を画する築地塀を想定することができる。溝SD01の北側が六条大路路面であったとみると、整地SX06は平安時代後期の路面補修跡とみられる。しかし溝SD02からは古代の遺物しか出土していないことに対し、溝SD01からは室町時代にまで時期の下る遺物が出土している。この為、溝SD01は室町時代に掘られた溝の可能性も残る。ただし、その検出位置が南大門前に位置することから、六条大路南側溝が何度も浚渫され、室町時代まで維持・管理されたもので、六条大路南側溝を踏襲する溝とも考えることができる。溝SD01が六条大路南側溝を踏襲した溝かどうかは、次年度以降の範囲確認調査でも、引き続き注意・検討していく必要があろう。

②塔院地区北端部で検出した井戸SE04から、金属製仏具を模した、いわゆる鉄鉢形の須恵器鉢Aが出土したことから、少なくとも一坪北端部は奈良時代前半から大安寺が利用していたとみられる。ただし、井戸SE04の南側約5.0m離れた整地SX05の存在と、その出土遺物から、井戸SE04以南では9世紀半ば以降まで、整地作業すら行われていなかったことがうかがえる。おそらく整地SX05は、平安時代にまで下る、西塔の創建頃の周辺整備を目

的になされたものと考えられ、塔院地区の利用過程の一端が明らかになったと評価できる。

③水田耕作に関わるとみられる近世の素掘小溝から18世紀の陶器が出土したことは、寺院地が水田に変わる時期を考える上で貴重な成果である。(原田 憲二郎)

註

- 1) 村田治郎1954「薬師寺と大安寺の古地」『史述と美術』240号 史迹・美術同収会
- 2) 鍋方正樹1997「大安寺寺地の復元に関する問題点の検討」『史跡大安寺旧境内I杉山古墳地区的発掘調査・整備事業報告書』奈良市教育委員会
- 3) 石毛彩子2001「平城京内寺院における雜舍群」『古代』第110号 早稲田大学考古学
- 4) 「大安寺」を付した軒瓦の型式番号と年代観は、原田憲二郎 2009「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18(2006)年度』奈良市教育委員会に掲げる。
- 5) 奈良市教育委員会1986「大安寺旧境内(第22次)の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』
- 6) 奈良国立文化財研究所1975「平城宮発掘調査報告VI」および 山崎信一2003「大和における平安時代の瓦生産(再論)『古代瓦と横穴式石室の研究』」



DA 第139次調査 発掘区全景(南から)



DA 第139次調査 発掘区全景 (北から)



DA 第139次調査 溝 SD01・整地 SX06 (西から)



DA 第139次調査 溝 SD01・02 (西から)



DA 第139次調査 掘立柱建物 SB03・井戸 SE04 (西から)



DA 第139次調査 整地 SX05 (南から)

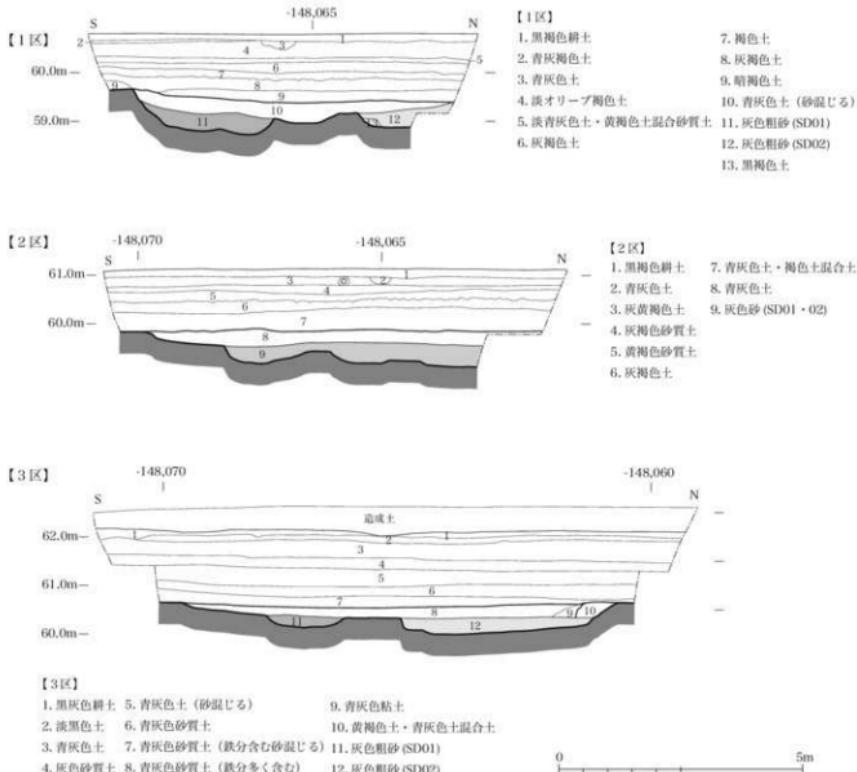
(2) 塔院・七条条間路の調査 第142次

I はじめに

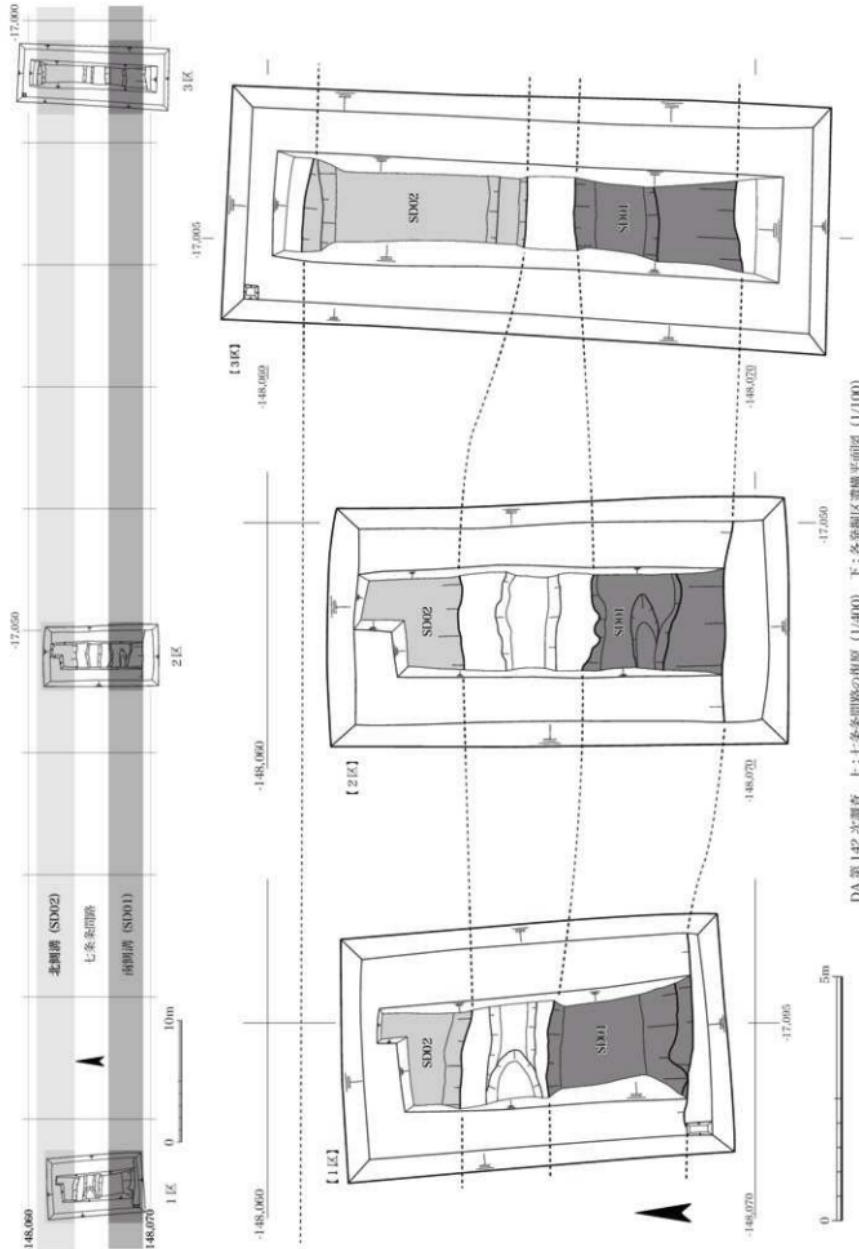
調査地は、平城京の条坊復元によると七条条間路にあたり、大安寺の伽藍復元では塔院南端を限る道路である。既往の調査では、調査地の西側で市HJ第29次調査を実施し、七条条間路南側溝と推定された東西溝を検出した。また、調査地東側では市DA第17～19次調査を実施し、七条条間路全体が後世に河川となり、削られていることがわかっている。したがって、本調査では七条条間路を検出し、保存整備に必要な情報を得ることを目的とした。

II 基本層序

層序は、1～3区ともに中世以降の堆積土（厚さ1.2～2.0m）下に、0.4～0.6mの河川堆積がある点が共通する。1区では上から、黒褐色耕土（約0.1m）、淡オリーブ褐色土（約0.4m）、淡青灰色土・黄褐色土混合砂質土（約0.1m）、灰褐色土（約0.2m）、褐色土（約0.1m）、灰褐色土（約0.2m）、12～13世紀の瓦器を含む暗褐色土（約0.2m）と続き、以下河川堆積の青灰色土（約0.3m）、灰色粗砂（約0.4m）となる。現地表下約2.0mで黄褐色土の地山に至る。遺構検出は、河川堆



DA 第142次調査 各発掘区土層断面図 (1/100)



DA第142次測定 上：七条御路の底原 (1/400) 下：各部屋及構造物平面図 (1/100)



DA第142次調査 1区 全景 (南東から)



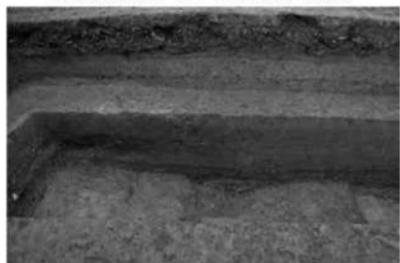
DA第142次調査 2区 全景 (南東から)



DA第142次調査 3区 全景 (南東から)



DA第142次調査 3区 西壁断面北側 (東から)



DA第142次調査 3区 西壁断面南側 (東から)

積の上面で行い、その標高は概ね1区で59.6m、2区で59.8m、3区で60.6mである。

III 検出遺構

幅約9m、深さ約0.6mの河川底で、各発掘区で同様に2条の東西溝を検出した。これらは位置関係および堆積状況から一連の溝であると考えられ、それぞれSD01・SD02とした。規模等は一覧表にまとめた。

SD01 1～3区で溝心が概ね揃う東西溝を検出した。1・3区は、溝内に灰色粗砂が堆積するが、2区では溝から溢れて灰色粗砂が広がった状態を呈する。よって、人為的に掘削された素掘溝が、後世になって流路となり北肩が削られたと判断できる。

SD02 3区では両肩を検出したが、1・2区では発掘区外となるため、幅は不明である。深さは発掘区によって、SD01より深く、あるいは浅くなる場合がある。これは、南肩の落ち込みが不明瞭であり、埋土がSD01の深くなる部分と同様の灰色粗砂であることから、河川となつた際に削られたためであると考えられる。

なお、3区で検出したSD01の南肩と、SD02の北肩の標高はほぼ一致することから、SD01・02は本来この面から掘削されたものと考えられる。

IV 出土遺物

遺物整理箱で8箱分がある。内訳は、8～10世紀の土師器（杯、皿、甕、竈）・須恵器（杯、皿、壺、甕）・黒色土器A類（椀）・縁軸陶器（椀）・灰軸陶器（椀）・軒丸瓦（6138Cb）・軒平瓦（6712B・6717A）・丸瓦・平瓦・土馬、12～13世紀の瓦器椀、桃核がある。出土遺物のほとんどが河川およびSD01・02埋土からの出土であり、小片で全体を復原できるものはない。

IV 調査所見

i 七条條間路について

本調査では、七条條間路が推定される東西約100mの調査地内3ヶ所で、東西溝を南北2条同様に検出した。これが七条條間路であるかを以下で検討する。

今回検出した2条の東西溝と七条條間路の関係を示す所見として、以下2点がある。

①発掘調査によって条坊の位置が確定し、かつ調査地に最も近い東西大路は四条大路である（路心：X=-146,730.51m、Y=16,695m）。本調査で検出したSD01とSD02を合わせた落ち込みの心はX=-148065.25m、Y=-17,005mであり、四条大路との距離は1333.32mである。仮にこの数値を、四条大路から七条條間路までの推定距離である4500尺で割ると、0.2962mと求められる。奈良時代の1尺は0.296m前後

DA第142次調査 遺構一覧表

	1 区		2 区		3 区	
	幅 (m)	深さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	幅 (m)	深さ (m)
SD01	3.0	0.9	2.8	0.7	3.2	0.4
SD02	1.9以上	0.7	2.0以上	0.7	4.5	0.6

と想定されており、この近似値内におさまる。

②SD01・02は、河川（12～13世紀以前）となる前に掘削された素掘溝で、国土方眼方位に概ね一致する。

つまり、本調査で検出したSD01・02は、推定される七条條間路上に位置し、かつ国土方眼方位に概ね一致する溝であることから、その両側溝であると判断できる。溝や路面は河川となる際に大きく削られており、本来の規模は不明である。ただし、3区で検出した南北端は標高も一致し概ね本来の状態をとどめていると想定できる。この場合、推定の道路心はX=-148065.25m、Y=-17,005mとなり、溝も含めた道路幅は9m以内におさまる。

ii 道路から流路へ

先の検討によりSD01・02が七条條間路の両側溝であることがわかった。検出状況から、調査地付近の七条條間路は宅地より一段低く切り通し状に施工された可能性が高く、後世の氾濫を契機に河川となったことが推測できる。その時期は、出土遺物から10世紀～12世紀頃である。以後、道路全体が緩やかな流路となる時期（河川上層）があり、その際に河川北肩を人為的に補修した痕跡が認められる（3区土層断面図10層）。ただし、路面の補修はされておらず、10世紀以降には一段高くなる北側が通路として利用された可能性がある。これは、①塔院南限の築地塀がそこに想定され周囲より高くなっていた可能性が高い点、②現在も調査地北側に畦道を踏襲した東西道路がある点から推察できる。今後、南限築地塀の確認を行うことで、これらを解明する必要がある。

（村瀬 陸）



DA第142次発掘調査地遠景（東から）

(3) 杉山古墳の調査 第141次

Iはじめに

調査地は奈良時代の大安寺の北端で、古墳時代中期中頃の前方後円墳。杉山古墳の北側周濠推定地にある。周濠推定地ではこれまで県および市によって20次にわたる調査が行われている。西側周濠は、周濠底の深さが標高60.5mで、古墳時代の褐色腐植土の上に奈良時代

末～平安時代前半の遺物を多量に包含する土砂が堆積しており、奈良時代末には周濠が大安寺の不用品を廃棄する場となっていたことが確認されている（市DA44・53次）。一方、北側および東側周濠は、褐色腐植土の上に中近世の遺物包含層（灰色系粘土）が堆積しており、湿地となっていたことが確認されている（市DA54・55・123次）。今回の調査は、北側周濠の埋没時期とその利用状況の確認を主目的に実施した。

II 基本層序

造成土（厚さ約0.35m）、近世以降の埋め立て土である灰褐色細粒砂（厚さ約0.45m）、周濠埋土である青灰色系の粘土（厚さ約0.35m）・褐色腐植土（厚さ0.02m）の順に堆積し、標高60.65mで周濠底の地山に至る。褐色腐植土直上の暗灰色粘土中には、褐色腐植土及び地山である青灰色粗粒砂のブロックが攪拌された状態で含まれており、16世紀の土師器皿や土師器羽釜が出土した。褐色腐植土を除去すると、極薄く青灰色粘土が堆積しており、古墳時代の円筒埴輪及び朝顔形埴輪片が出土した。

III 検出遺構

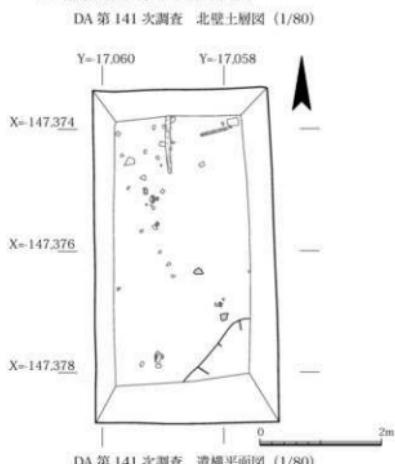
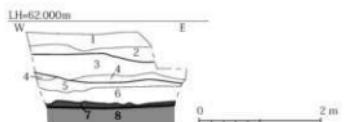
調査区全域が周濠内に収まっていると考えられ、周濠底は平坦であった。調査区南東端で青灰色粘土上面から掘り込まれた落ちを確認したが、調査範囲が狭く、周濠埋め立ての際の単位であるか、遺構であるか不明である。

IV 出土遺物

遺物整理箱7箱分が出土した。5世紀の円筒埴輪・朝顔形埴輪、16世紀中頃の土師器皿・土師器羽釜・瓦質土器捕鉢、近世の陶磁器片等がある。

V 調査所見

調査区は杉山古墳北側周濠内に相当し、古墳時代以降に褐色腐植土が堆積した後、16世紀中頃に埋没する。16世紀中頃の遺物を包含する暗灰色粘土中には、褐色腐植土と地山の青灰色中粒砂のブロックが攪拌されたような状態で含まれていた。周濠内の湿地は以前、蓮根であったといい、文献史料には中世の段階から杉山古墳の周濠を指す可能性がある「(東)池」から蓮が取れたことが記されている（「尋尊大僧正記」康正三年七月十九日条、文正元年六月一日条）。暗灰色粘土層のあり方は、北側周濠の蓮根としての利用を想定せるものといえる。西側外堤で行われた第44・53次調査では、16世紀後半の断面V字形の溝が検出されており、この時期に古墳の二次的な利用がなされていたことが確認されている。今回の調査では、これと同時期に古墳北側でも土地の改変が行われていたことが確認できた。（永野智子）



12. 菅原遺跡の調査 試掘 2016-5・2017-2次

事業名	宅地造成	平成29年9月4日～7日・13日～14日
届出者	三都住建株式会社	(2017-2次)
調査地	菅原町689-11他 (2016-5次) 宝来町1103番3他 (2017-2次)	調査面積 96m ² (2016-5次)、557m ² (2017-2次)
調査期間	平成28年9月5日～6日 (2016-5次)	調査担当者 永野智子・村瀬 陸 (2016-5次) 鍛方正樹・中島和彦・安井宣也 (2017-2次)

Iはじめに

調査地は、平城京西方の西ノ京丘陵東辺部の東へ延びる丘陵上にある。調査地の北側の谷部では、昭和56年に菅原遺跡調査会によって発掘調査が実施され、奈良・平安時代の瓦葺きの基壇建物が1棟確認された。また調査地南約400mの丘陵斜面には宝来横穴群がある。

発掘調査は、北側の基壇建物に付随する遺構の有無、横穴群の有無を確認する目的で調査を行った。なお開発の届出の関係上、平成28年と29年度の2回に分けて調査を行った。

平成28年度は、遺跡範囲外の東側を踏査し、その後遺跡内の丘陵上の3箇所(第1～3発掘区)で試掘調査を行った。またこの際の仮設道路敷設工事の立会調査で、土馬を含む焼土坑を1基確認しこれを調査した。

平成29年度は、丘陵上と丘陵南斜面裾、28年度に確認した焼土坑周辺部分の3箇所(第4～6発掘区)で試掘調査を行い、遺構の有無を確認した。

II 基本層序

丘陵上の発掘区では、厚さ0.1～0.3mの表土層直下で地山の黄褐色土または明橙色砂礫にいたる。丘陵斜面地では、地山上に茶褐色土系の斜面崩落土が0.1～1.0m堆積する。地山上面の標高は、丘陵上の第3発掘区西端が104.1m、第1発掘区中央が101.0mで、丘陵裾の第6発掘区が90.1mである。

III 検出遺構

第1発掘区で満1条、第3発掘区で土坑1基(SK02)、第4発掘区で土坑1基、小柱穴3、第5発掘区で焼土坑1基(SK01)、第6発掘区で土坑1基を確認した。SK01が奈良時代、SK02が江戸時代のもので、その他は出土遺物がなく詳細な時期は不明である。以下SK01とSK02について記す。

SK01 平成28年度の立会調査中に丘陵南斜面中程で確認し、平成29年度にその周辺を調査したものの、この土坑1基しか確認出来なかった。土坑は長辺1.25m、短边0.75mの平面隅丸長方形の土坑で、深さは約0.2mある。周辺の壁面は熱により赤化しているが、底



菅原遺跡 試掘調査発掘区位置図 (1/5,000)

面は地山のままである。埋土には焼土と炭が含まれており、土馬がほぼ完全なものを含め9個体分以上出土した。埋土と構造から、土馬を焼成した窯とは考えにくく、焼成土坑内に土馬を廃棄したものであろうか。単独で存在している点も含め、性格を明らかにするのは難しい。

SK02 一辺2m以上の平面方形と考えられる土坑で、南東隅部分を確認した。深さ約0.7mで、18世紀後半～19世紀前半の国産陶器類とともに、縄銭が出土した。銭は全部で48枚あり、寛永通宝を5点確認している。

IV 出土遺物

遺構に伴う土馬、縄銭と国産陶器の他、表土・崩落土等から奈良時代の土師器・須恵器、瓦類、江戸時代以降の陶磁器類が少量出土したが、遺物整理箱1箱に満たないものである。以下SK01出土の土馬について記す。

SK01出土の土馬は、完形品が5点(一部欠損するものも含む)、胴部2点、頭部8点、脚部が17点あり、およそ9～10個体分と考えられる。いずれも都城型土馬と呼ばれる三日月型の頭部を持つものである。完形品が見られる一方、故意に破壊したとみられる頭部片・脚部片も多い。

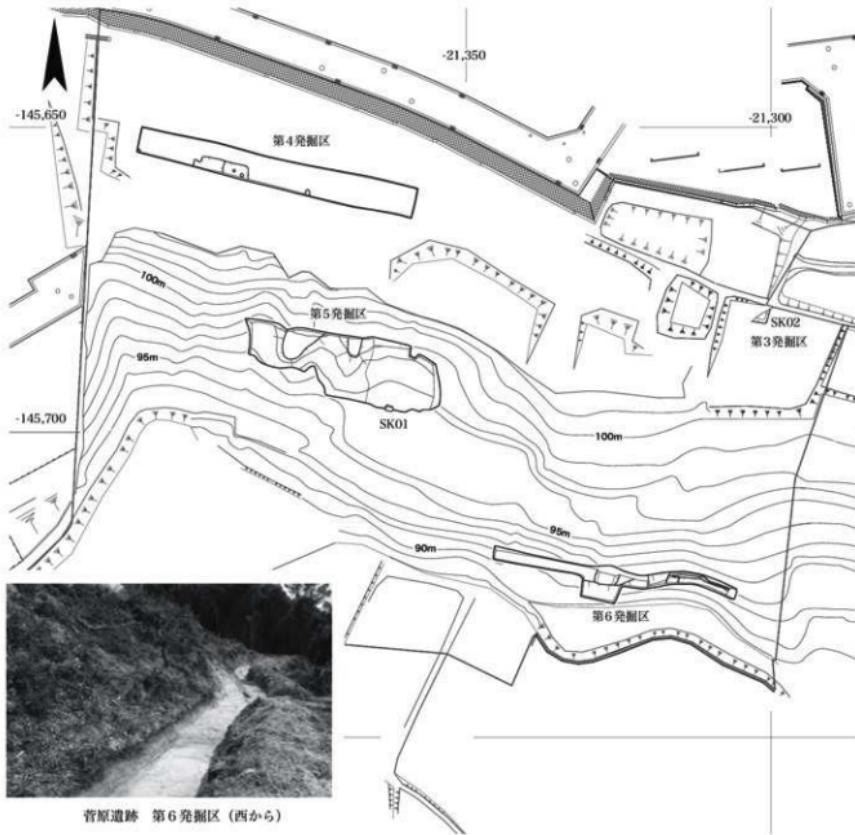
1は完形品、2～5は一部を欠損する。1の脚部・尾部のみハケにより調整痕がみられるが、基本的には指ナデ調整である。3以外は背中部分を指ナデ調整しており、これは鞍を表現している。6・7は頭部片である。7は粘土をつまみ出してたてがみを表現している。



菅原遺跡 第4発掘区（東から）



菅原遺跡 第5発掘区（東から）

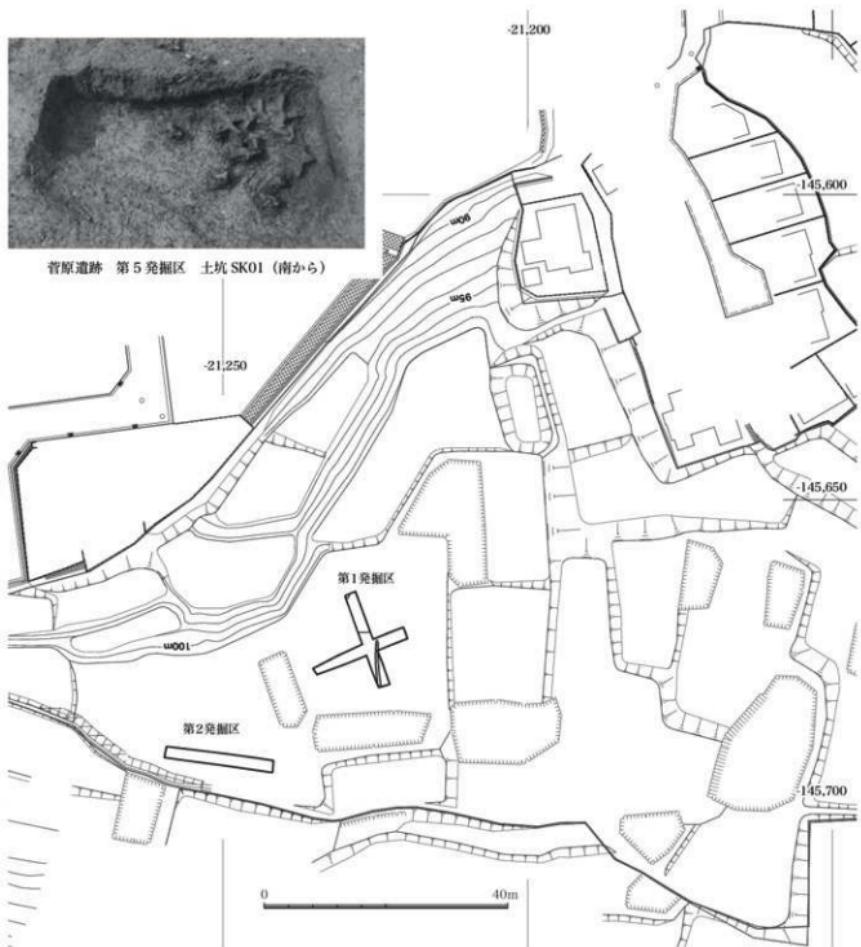


菅原遺跡 第6発掘区（西から）

菅原遺跡 遺構平面図 1 (1/800)



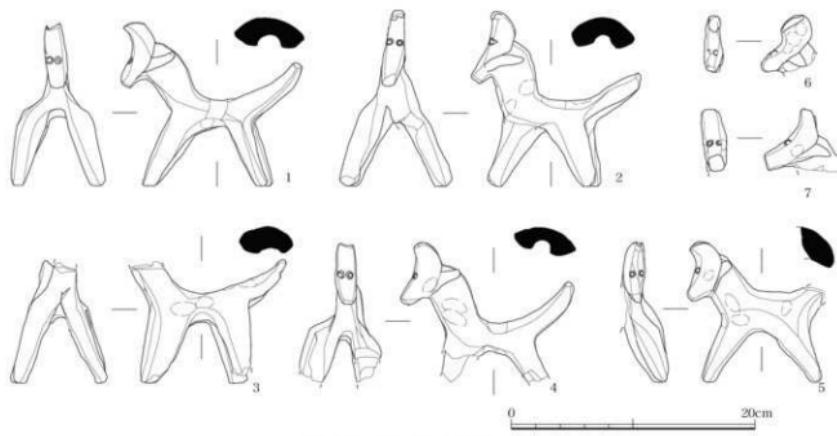
菅原遺跡 第5発掘区 土坑SK01(南から)



菅原遺跡 第2発掘区(北西から)



菅原遺跡 第1発掘区(西から)



菅原遺跡 SK01 出土土製品 (1/4)

胸部が残存する1～4は、厚めの粘土板から頸部・四肢・尾部を成形後、胴体部中央で粘土板を折り曲げ、その後胴部・脚部を成形・調整する。頭部・耳部はこの後に添付し整形する。

胸部の折り曲げに際しては、胸部に棒状工具をあてて、これに巻き付けるように折り曲げるもの(1・4)と、單に折り曲げ側面から押さえるもの(2・3)がある。

前者は、腹部に逆U字の棒状工具の圧痕が残り、左右脚幅に対して胴幅が広くなる傾向がある。後者は、腹部に折り曲げに際する粘土の折り皺が見られ、胸部・腹部がやや逆V字になる特徴をもつ。

5は、断面の粘土接合痕から見て、明らかに頸部・尾部が胴部と別作りであることがわかる。胴部と脚部は、一体で成形されていることから、胴部を折り曲げる成形時に、別作りの頸部・尾部を挟み込み、これを包む形で胴部を成形する製作方法が想定される。

今回出土の土馬は、いずれも上記の製作方法で作られ、同様な土馬は長岡京跡で多く出土しており、木村泰彦氏なども同じ製作技法を指摘している¹⁾。

これらの資料は、いずれも小笠原分類のE形式にあたり、740～760年代のものと想定される²⁾が、5はやや小型で、時期が下る可能性がある。SK01からは土馬以外の遺物は出土しておらず、年代は不明であるが、少なくとも奈良時代後半までには製作されたものと考えられる。

土馬は、都城では主に条坊側溝や東堀河などから出土する事例が多く、水霊信仰関連遺物と考えられている。

一方、平城京内でも土坑から土馬が出土した事例は散見され、金子裕之氏は左京四条四坊九坪のSK2412の土馬出土例などから、「土馬を埋めることも、流すことを通じたようである」と述べている³⁾。今回のSK01については、土馬を使用後に廃棄したものと考えられるが、焼土坑内であるという点で特徴的である。(高岡桃子)

V 調査所見

丘陵頂部からは、顕著な遺構・遺物を確認出来ず、後世に大きく改変されたことが想定され、丘陵斜面には性格不明の焼土坑が1基あるのみで横穴墓等はなかった。

これらのことから、調査地内に遺跡が残存する可能性は極めて低いと考えられる。(中島和彦)

- 1) 木村泰彦「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』同朋舎出版、1986
- 2) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25、物質文化研究会、1975
- 3) 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、国立歴史民俗博物館、1985

*土馬の法量については、向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書第52集 長岡京ほか』2002に準拠した。

菅原遺跡 SK01 出土土馬計測表

番 号	法量 (cm)						色調
	全長	高さ	顔面 幅	顔面 幅	脚左 右幅	脚厚	
1	14.9	13.4	5.4	1.9	7.7	1.3	5.7 棕 (7.5YR7/6)
2	13.9	14.3	5.9	2.0	9.2	1.4	5.1 浅黄棕 (10YR8/4)
3	(12.6)	(9.9)			7.8	1.7	4.3 浅黄棕 (10YR8/4)
4	(14.1)	(11.4)	5.1	1.8	(6.7)	1.0	5.0 浅黄棕 (10YR8/4)
5	(11.2)	11.6	4.9	1.8		2.6	2.6 棕 (7.5YR6/8)
6			4.6	1.6			5.7 棕 (7.5YR7/6)
7			5.1	2.1			黄棕 (10YR8/6)

13. 護国神社前池中古墳の調査 2016-8 次

事業名	太陽光発電所設置	調査期間	平成29年2月1日～28日
届出者	古市町水利組合	調査面積	81m ²
調査地	古市町1848番1	調査担当者	村瀬 陸

I はじめに

調査地は、奈良県護国神社の西側に位置する南北2つの溜池のうち、南側の新池内にある護国神社前池中古墳（以下、「池中古墳」という）である。

周辺の主な古墳は、調査地南東に古墳時代前期の古市方形墳があり、東側には埴丘が現存する護国神社境内1号墳と、横穴式石室をもつ護国神社境内2～4号墳（消滅）などの後期古墳が位置する。

集落遺跡では、調査地北側に古墳時代前～後期の南紀寺遺跡、西側に古墳時代中～後期の古市遺跡があり、古墳がまとまる一帯を囲むように集落が確認できる。

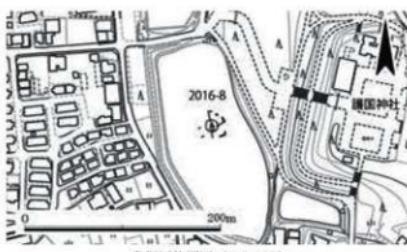
池中古墳については『奈良市史』で、池の水面からの高さが4m、幅が約13mの円墳として紹介されている。また、護国神社造営（1942年創建）の際に参道を造成した土砂中に円筒埴輪片が混入していたよう、当時主として掘り出したのが、池中古墳北部辺の高所であったため、市史ではこれを前方部の名残りとみて前方後円墳であった可能性を指摘している。調査前の踏査では、須恵器・土師器片がわずかに散布するだけで、埴輪は確認できず、古墳であるかは不明であった。

本調査は古墳であるかの確認を目的として実施した。

II 基本層序

黄褐色粘土の地山上に、人為的な盛土を確認した。盛土から布留式後半の土師器片が出土したことから、少なくとも4世紀後半以降に盛土されたことがわかる。

盛土の工程は、確認できた範囲で大きく三工程あり、1区では、地山直上を黄褐色土（48層）で整地し、中心に近い部分を最初に盛土（19～47層）する。この時、下半に旧表土に由来する暗褐色土、上半に黄褐色土が堆積する単位が横方向に連続するのが確認できた。これは、盛土のために運んできた土の塊を反転して積み上げたことに起因し、古墳の盛土によくみられる特徴である。さらにこの外側に中心よりはやや粗い単位の盛土（5～18層）が確認できるが、これより外側は削られており不明で、流土（1～4層）が堆積する。つまり、基底を整地し、中心を固め、周囲へ盛土して成形したことがわかる。この盛土工法および古墳時代のみの遺物を含むことから、古墳である可能性が高い。



発掘区位置図 (1/5,000)

III 検出遺構

古墳1基（池中古墳）を確認した。1～7区で裾の落ち込みを確認したが、いびつな多角形を呈し、埋土が埴丘側の流土最下層と同様の堆積土であることから、裾はすべて削られている。『奈良市史』によれば、護国神社造営の際に池中古墳周辺が削られたことが記録されている。方形に削られているが、古墳の墳形、規模とともに不明である。少なくとも現在削られている部分までは埴丘があったとすれば、全長30m以上の古墳となる。

墳頂部にも発掘区を設定したが、埋葬施設の痕跡はなかった。埴丘周囲と同時に墳頂も削られた可能性が高い。ただし、池中古墳の南約2kmに位置する柴屋丸山古墳のように、埴丘下部に埋葬施設が存在する可能性も考慮し、本調査では墳頂部から約3m下まで掘削したが、埋葬施設に関する痕跡は確認できなかつた。

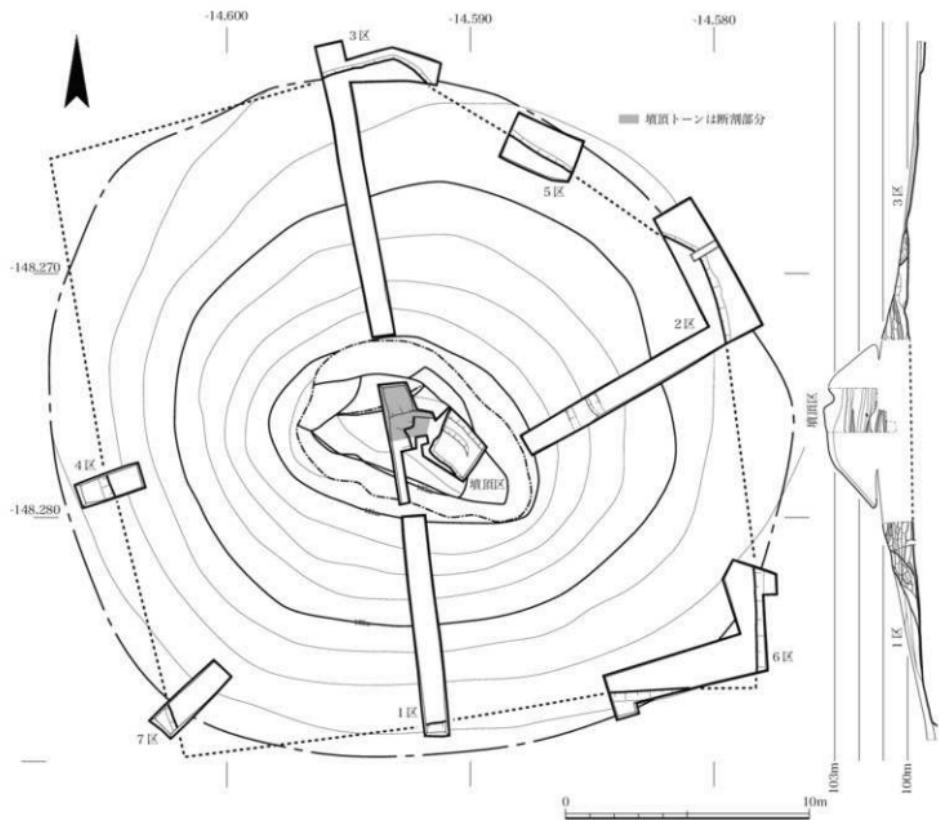
IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分がある。内訳は、4～5世紀の土師器（甕、高杯）、須恵器（甕、壺）がある。盛土中からは布留式後半の土師器のみが出土した。埴丘斜面の流土からは須恵器片、埴頂部の流土からは須恵器壺片が出土し、概ね5世紀の特徴をもつ。

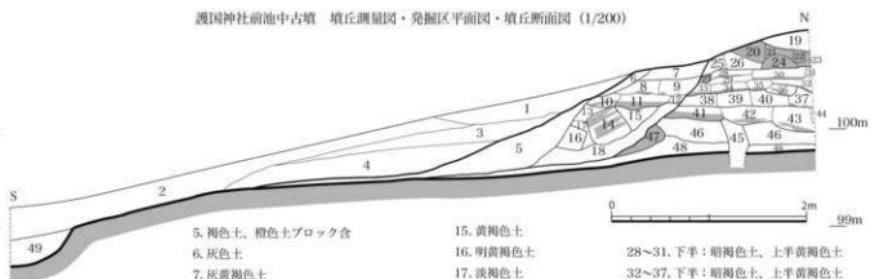
V 調査所見

本調査によって、①盛土が古墳時代に行われたこと、②盛土や流土出土土器から、古墳時代前期後半～中期の古墳である可能性が高いこと、③墳形は確定できないが、全長30m以上の埴丘であったことがわかり、古墳であると考えられる。

（村瀬 陸）



護國神社前池中古墳 塗頭調量図・発掘区平面図・塗丘断面図 (1/200)



- | | | | |
|------------------|--------------------------|------------------|------------------------|
| 1. 灰色砂・黄褐色土ブロック合 | 5. 褐色土・橙色土ブロック合 | 15. 黄褐色土 | 28~31. 下半：暗褐色土・上半黄褐色土 |
| 2. 灰色砂 | 6. 灰色土 | 16. 明黄褐色土 | 32~37. 下半：暗褐色土・上半黄褐色土 |
| 3. 青灰色砂 | 7. 灰黄褐色土 | 17. 淡褐色土 | 38~40. 明黄褐色土 |
| 4. 青灰色粘土 | 8. 灰黄褐色土・橙色土ブロック合 | 18. 暗褐色土・黄褐色土混合土 | 41~44. 下半：暗褐色土・上半明黄褐色土 |
| | 9. 灰黄褐色土・橙色土ブロック合 | 19. 黄褐色土 | 45. 灰黄褐色土(ピット) |
| | 10~12. 下半：暗褐色土・上半オリーブ褐色土 | 20~24. 暗褐色土 | 46. 明黄褐色土 |
| | 13. 黄褐色土 | 25~26. 黄褐色土 | 48. 黄褐色土 |
| | 14. 暗褐色土・黄褐色土混合土 | 27. 暗褐色土 | 49. 青灰色土 |

護國神社前池中古墳 1区 西壁断面図 (1/50)



護国神社前池中古墳 全景（北から）



護国神社前池中古墳 1区西壁 断面（北東から）



護国神社前池中古墳 1区 全景（南から）



護国神社前池中古墳 1区東壁 断面（西から）



護国神社前池中古墳 2区 全景（東から）



護国神社前池中古墳 3区 全景（北から）



護国神社前池中古墳 2・5区 全景（南東から）



護国神社前池中古墳 6区 全景（東から）



護国神社前池中古墳 墳頂区 全景（北西から）



護国神社前池中古墳 墳頂区 盛土断面（北から）

14. 奈良町遺跡の調査 第3次

事業名 医院新築	調査期間 平成28年6月13日
届出者 医療法人まえだ整形外科	調査面積 9m ²
調査地 奈良市紀寺町864番1	調査担当者 鐘方正樹・池田裕英

Iはじめに

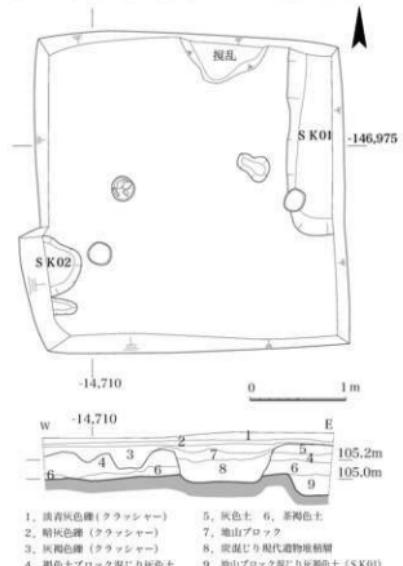
調査地は奈良町遺跡の南東端に位置する。遺跡の境界付近であるため、遺構の有無と遺構面の深さを知ることを目的として発掘調査を実施した。調査箇所は、最も遺構面が高いと想定できる調査地北東隅に設定した。

また、基礎掘削工事と併行して調査を実施したため、工事立会も併せて行い、掘削底（標高104.73m前後）での遺構面（地山上面）の広がりを概ね確認した。

II 基本層序

発掘区内の堆積土層は、現地表面から駐車場造成に伴う礫層（1～3層）、褐色土ブロック混じり灰色土（4層）、茶褐色土（6層）と続き、深さ0.45m前後で黄灰色粘質シルトの地山（標高105.0m前後）となる。

なお、工事立会による基礎掘削底で確認した地山面は、堀削範囲の南東隅から北へ約4m、北西隅から東へ約6mの位置が層の境で、これよりも東・北に向かって



NR第3次調査 遺構平面図 (1/50) 発掘区北壁土層図 (1/50)



NR第3次調査 発掘区位置図 (1/5000)

地山が緩やかに高まり、発掘箇所との高低差は約0.3mである。

III 検出遺構

土坑2基 (SK01・02)、小ピット3基を確認した。

SK01は南北2m以上・東西0.5m以上・深さ0.2mで、発掘区外東へ延びる。SK02は南北0.65m・東西0.4m以上・深さ0.05mで、発掘区外西へ延びる。両土坑の埋土から13世紀前半の土器が出土した。

小ピット3基は、近代以降に掘削されたものである。

IV 出土遺物

13世紀前半の土師器皿・瓦器碗・瓦質土器が少量出土。

V 調査所見

現地表下0.45～0.7mで遺構面が残存しているのを確認した。13世紀の遺構が分布しており、中世にはこの周辺で土地利用が進展したと考えられる。（鐘方正樹）



NR第3次調査 発掘区全景 (北西から)

15. 奈良町遺跡の調査 第4次

事業名 宅地造成	調査期間 平成29年1月11日～13日
届出者 株式会社 リアルアセット	調査面積 68m ²
調査地 肘塚町15番1の一部	調査担当者 池田裕英・村瀬 陸

I はじめに

調査地は、奈良町遺跡の南端部に位置する。遺跡の境界付近であるため、遺構の有無と遺構面の深さを確認することを目的として、発掘調査を行った。発掘区は開発する宅地の道路部分に東西4m、南北17mで設定した。

II 基本層序

層序は上から、造成土（厚さ約0.15m）、茶黄色土（約0.15m）、暗橙茶色土（約0.1m）と続き、現地表下約0.4mで黄褐色砂礫土の地山となる。遺構検出は地山上面で行い、その標高は概ね61.6mである。

III 検出遺構

掘立柱建物（SB01）1棟を検出した。棟方向は不明であるが、国土方眼方位の北で東に振れる。東西1間以上、南北2間以上である。柱穴は、一辺約0.4m、深さ約0.1mの方形掘方で、約1.8m等間で並ぶ。

IV 出土遺物

SB01の柱穴掘方から少量の土師器が出土した。小片であるため、時期は不明確であるが、胎土等の特徴は古墳時代以前のものに類似する。

V 調査所見

調査地付近では、現地表下約0.4mで遺構面が残存することを確認した。ただし、表面に古墳時代～中世の遺物が散布し、SB01の柱穴も浅いことから、遺構面が幾分削られている可能性が高い。

奈良町遺跡に関する遺構はなかったが、古墳時代以前の可能性がある掘立柱建物1棟を検出した。調査地の東側には、古墳時代の東紀寺・南紀寺遺跡が位置し、それらの遺跡に広がりがある可能性を示唆する。

（村瀬 陸）



NR第4次調査 発掘区位置図 (1/5,000)



NR第4次 遺構平面図
(1/200)



NR第4次 発掘区全景 (北から)



NR第4次 発掘区全景 (南から)



NR第4次調査 西壁断面図 (1/100)

16. 平成 28 年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

No.	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	調査期間	踏査所見
1	南庄町 129 亂 9 番 (株) I・T・O	再資源化設置建築	48,179.32 m ²	H28.4001	H28.6.29	遺跡なし	
2	曾原町 189-11 他 三都住建(株)	宅地造成	18,017.27 m ²	H27.4009	H28.8.19	遺物確認。試掘調査 2016-5 を実施。	
3	針町 3900番 1 サンエコ(株)	工場用地の造成	17,916.38 m ²	H28.4008	H28.8.17	遺跡なし	
4	押熊町 2110-1 他 株式会社 八州エイジメント	宅地造成	12,981.11 m ²	H28.4002	H29.1.13	遺跡なし	
5	古市町新池 古市町水利組合長	太陽光発電所新設	9,527 m ²	H28.4005	H29.1.6	遺物確認。試掘調査 2016-8 を実施。	

17. 平成 28 年度実施 工事立会一覧

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
1	H27.3468	左京一条三坊一坪 東二坊大路	法華寺町 1162 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H28.4.1	GL - 0.8 m まで掘削、GL - 0.5 m で灰白色砂質土(地山)
2	H27.3518	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目 3 番 18 号	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.4.2	GL - 0.6 m まで掘削、盛土内
3	H27.3074	右京一条二坊三・四・五坪	西大寺御園町一丁目 2196 番 8	(株) 南都銀行	事務所新築	宅地	H28.4.4	GL - 0.8 m まで掘削、GL - 0.8 m で灰色砂(紅葉用堆積)
4	H27.3511	左京二条五坪北郷 東五坊五間	法蓮町 792 番 4	アーバースト住建 (株) 東大阪支店	分譲住宅新築	宅地	H28.4.4	GL - 0.25 m まで掘削、盛土内
5	H27.3542	左京五条六坊九坪 奈良町道跡	南城戸町 47-1、47-3	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.4.5	GL - 0.6 ~ 0.8 m まで掘削、黒褐色土(表土・陶器片含)
6	H27.3500	左京二条四坊八・九坪	西大寺芝町二丁目 11-30 ~ 若菜台三丁目 7	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管設置	道路	H28.4.5	GL - 0.6 m まで掘削、盛土内
7	H27.3522	左京八条三坊一坪	西九条町一丁目 1-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.4.6	GL - 0.8 m まで掘削、黒褐色土(耕作土)内
8	H27.3566	右京三条二坊六坪	尼辻北町 3294-6、 3294-1	クリエイト開西 (株)	宅地造成	宅地	H28.4.15	GL - 1.9 m まで掘削、GL - 1.5 m で青灰色粘土(地山)
9	H27.3472	左京二条五坊十坪 東五坊五間東小路 奈良町道跡	北市町 55 番 3	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.4.18	GL - 0.4 m まで掘削、暗褐色土(表土)内
10	H27.3521	奈良町道跡	高畠町 1024-7	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管設置	道路	H28.4.18	GL - 1.1 m まで掘削、暗褐色土内
11	H27.3562	左京三条西坊四坪	大宮町三丁目 200 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.4.18	GL - 0.7 m まで掘削、盛土内(黄灰色土の地山ブロック含)
12	H27.3002	右京七条四坊九坪	六条三丁目 1170 番 44	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.6	GL - 1.2 m まで掘削、GL - 0.3 m で黄褐色土(地山)
13	H27.3317	左京二条三坊十三坪	芝辻町四丁目 9-1	三和住宅(株)	共同住宅改築	宅地	H28.5.10	GL - 1.5 m まで掘削、盛土 1.3 m、灰 色砂質土 0.2 m 以上
14	H27.3563	奈良町道跡	肘塚町 22 ~ 17-5	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管管壁	道路	H28.5.10	GL - 0.6 m まで掘削、盛土内
15	H28.3026	左京二条七坊四坪 奈良町道跡	半田横町 6 番 1、6 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.12	GL - 0.6 ~ 0.7 m まで掘削、盛土内
16	H27.3556	右京四条一坊四坪 西二坊間西小路	四条大路五丁目 1035 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.12	GL - 0.4 m まで掘削、GL - 0.25 m で 灰黄色砂質土(地山)
17	H27.1176	史跡法華寺旧境内	法華寺町 882 番	法華寺代表役員	玄関前車椅子用 通路舗装工事	境内地	H28.5.12	GL - 0.15 m まで掘削、盛土内
18	H27.3467	南寺町道跡	高畠町 71-7	(株) 日本中央住販	分譲住宅改築	宅地	H28.5.16	GL - 1.5 m まで掘削、盛土内
19	H27.3505	三条通南路	法蓮町 10-5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.16	GL - 0.35 m まで掘削、黒褐色土内
20	H28.1003	史跡大安寺旧境内 石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1093	個人	廻溝改修工事	廻溝	H28.5.12	GL - 0.2 m まで掘削、盛土内
21	H28.3012	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 1-24 (56-13) ~ 四丁目 1-21 (56-10)	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管理設	宅地	H28.5.18	GL - 0.25 m まで掘削、盛土内
22	H28.3018	左京二条七坊一坪 一条南大路 奈良町道跡	西包永町 24 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.19	GL - 0.3m まで掘削、黒褐色土(表土)内
23	H28.3564	左京六条四坊十四坪 六条三条間南小路	大安寺一丁目 1178 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.19	GL - 0.45 m まで掘削、盛土内
24	H27.3484	左京五条四坊十坪	大森町 38	バナソニック(株) エコソリューションズ シズマーケティング 本部 近畿住建営業部	自家用看板設置	宅地	H28.5.20	GL - 0.15m まで掘削、GL - 0.8 m で 黄色灰色土(地山)

№	受理番号	道路	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
25	H28.3047	古市町域 古市城跡	古市町 1846-39	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.26	GL - 0.3 ~ 1.0 mまで削削、GL - 0.3 ~ 0.6 mで黄灰色砂質土(地山)
26	H27.3027	左京三条四坊九・十 坪	芝辻町二丁目 168-1、 168-6	個人	車庫増築	宅地	H28.5.27	GL - 0.55 mまで削削、盛土 0.5 m、 暗褐色土 0.05 m以上
27	H27.3041	左京三条五坊七・十 坪	三条町 606 番 46-、 606 番 74、606 番 75	三井不動産アリ アンティ(株)	時間貸駐車場管 理機器設置	駐車場	H28.5.27	GL - 0.7 ~ 0.8 mまで削削、盛土内
28	H27.3418	左京三条五坊九坪 三条大路 奈良町通跡	三条町地内	奈良市公共下水 道管理者	下水道工事	道路	H28.5.30	GL - 0.85 ~ 1.05 mまで削削、砂石土 内
29	H28.3009	左京三条五坊北効 一条条間路 東五坊 坊間路	法蓮町 792 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H28.5.31	現況 GL 上に盛土を行う
30	H27.3555	右京七条一坊十五坪	六条町 102-1 施2 番	(医) 康仁会	ポンプ室新築	病院 用地	H28.6.1	GL - 0.5 ~ 0.7 mまで削削、盛土内
31	H27.3493	左京三条五坊七坪	芝辻町一丁目 77 番 3、 6、8、10、76、80 ~ 96、78 番 2	西日本旅客鉄道 (株)	事務所新築	鉄道 用地	H28.6.3	GL - 1.65 mまで削削、GL - 1.15 m で黄灰色土(地山)
32	H28.3006	右京三条二坊十三坪 左京一至三十三坪 一至三十六路 東四坊 大路	尼辻北町 238 番の 一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.6.6	GL - 0.5 mまで削削、GL - 0.3 mで 黄灰色砂質土(地山)
33	H28.3010	右京二条一坊十四坪	法蓮町 707-8、709- 10、2085	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.7	GL - 0.3 mまで削削、盛土内
34	H28.3022	左京三条六坊十二坪	上三条町 28 番 1	ビル・サービス 大阪(株)	店舗新築	宅地	H28.6.8	GL - 0.8 mまで削削、GL - 0.05 mで 黄灰色砂質土(地山)
35	H27.3013	右京五条三坊六坪	五条二丁目 601-85	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.9	GL - 0.1 mまで削削、GL - 0.1 mで 黄灰色土(地山)
36	H27.3539	右京六条三坊十五坪	六条一丁目 889 番 3	個人	分譲住宅新築	宅地	H28.6.9	GL - 0.3 mまで削削、盛土内
37	H28.3037	右京二条一坊十四坪	西大寺国見町二丁目 206 番 64	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.10	GL - 0.85 mまで削削、盛土 0.85 m、 黒褐色土(耕作土)内
38	H28.3019	左京四条四十坪	三条宮前町 59-4 他	個人	共同住宅新築	宅地	H28.6.10	GL - 0.4 mまで削削、暗灰色土(耕作土) 0.3 m、暗褐色土 0.1 m
39	H27.3554	西三坊一至三間西小路 菅原寺跡	菅原町 506 - 6、- 9	個人	共同住宅新築	宅地	H28.6.13	GL - 0.55 mまで削削、暗褐色土(耕 作土)内
40	H28.3061	奈良町通跡	高畠町 829 番 5 の 一部	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.13	GL - 0.2 mまで削削、黒褐色土(表土)内
41	H27.3424	左京二条三坊五坪 東三坊間跡	法蓮寺町 136 番 1、 137 番、138 番 1、 140 番 1	中空商店	駐輪施設新築・ 駐車場造成	宅地	H28.6.14	GL - 1.1 mまで削削、GL - 0.7 mで 灰色砂(河川堆積)
42	H28.3059	右京三条二坊十三坪	尼辻北町 238 地内	関西電力(株) 奈良電力部	電柱支線・支線 建替	宅地	H28.6.16	GL - 2.5 mまで削削、アスファルト 0.05 m、コンクリート 0.2 m、盛土 0.6 m、以下埋土の暗灰色粘土 0.2 m、 灰色粘土 0.5 m、灰色砂
43	H28.3086	西三坊大路 西大寺跡	西大寺町二丁目 4-2 ~ 10-4	大阪ガス(株) 管事業部	ガス管理設	道路	H28.6.17	GL - 0.6 mまで削削、盛土内
44	H28.3063	古市通跡	古市町 1556-3	(株) イースト ホールム	分譲住宅新築	宅地	H28.6.20	現況 GL 上に基礎を組上げる
45	H28.3051	古市通跡	古市町 1215-17	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.20	GL - 0.2 mまで削削、盛土内
46	H28.3046	古市城跡 古墳	古市町 2039 番 1、 2039 番 2、2039 番 5、 2039 番 6、2041 番 1、 2041 番 2 の一部	個人	個人旧宅新築	宅地	H28.6.20	GL - 0.3 mまで削削、GL - 0.15 ~ 0.3 mで黄褐色土(地山)
47	H27.3520	右京五条三坊八坪	五条一丁目 481 - 19	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.20	GL - 0.35 mまで削削、黒褐色土(耕 作土)内
48	H27.3448	左京四条四坊九坪 東四坊間西小路	三条宮前町 1201、 1202	個人	共同住宅新築	宅地	H28.6.20	GL - 1.6 mまで削削、地盤改良工内
49	H28.3021	左京二条五坊五坪	法蓮町 945 番地 ~ 946 番地 3	大阪ガス(株) 管事業部	ガス管理設	道路	H28.6.21	GL - 1.0 mまで削削、コンクリート 0.3 m、盛土 0.2 m、暗褐色土 0.5 m
50	H28.1023	史跡大安寺旧境内 石橋瓦跡跡	大安寺、東九条町	西日本電信電話 (株) 奈良支店	電柱の取替(新 建設)	水田	H28.6.22	GL - 2.5 mまで削削、GL - 1.5 mの 既存電柱形地下で、黄褐色土(地山)
51	H28.3049	四条大路	平松五丁目 548 番 7 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H28.6.27	GL - 0.2 mまで削削、暗褐色土(表土) 内
52	H28.3112	右京七条三坊一坪 西二坊大路	六条一丁目 2419 番 1	個人	青空駐車場造成	水田	H28.7.1	GL - 0.5 ~ 1.1 mまで削削、GL - 0.35 ~ 0.8 mで黄褐色土及び灰色シルト
53	H28.3066	左京三条四坊九・十 坪	芝辻町二丁目 168 番 1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.7.4	GL - 0.65 mまで削削、造成土 0.25 m、 黒褐色土 0.2 m、褐色土 0.2 m以上
54	H28.3064	左京五条四坊六坪	平松四丁目 396 - 39	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.11	GL - 1.0 mまで削削、GL - 0.3 mで 黄白色粘土(地山)
55	H28.3053	左京四条六坊三坪 奈良町通跡	柳町 26 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.11	GL - 0.3 mまで削削、暗褐色土(表土) 内
56	H28.3054	右京北辺北京極大路 26	秋葉三和町二丁目 870 番 26	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.11	GL - 1.4 mまで削削、盛土内
57	H28.3117	古市城跡	古市町 2139 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.12	GL - 0.5 mまで削削、盛土内
58	H28.3074	新業寺跡	高畠町 449-1、466-4 459-1	(株) ヒガワコ ーポレーション	青空資材置場造 成	荒地	H28.7.14	GL - 0. mまで削削、盛土内

No	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	規況	立会調査 結果	
							日付	結果
59	H28.3417	左京二条三坊五坪 東三坊坊間路	法華寺町 264番地の1 奈良市公営企業管 理者	事務所増築	宅地	H28.7.19	GL - 2.9 mまで掘削、盛土 2.6 m、灰 色土 0.3 m	
60	H28.3070	左京三条五坊十三坪 奈良町道跡	今辻子町 36-7、36-9、 37-1、38、39-1	(株) 日本製墨書道	倉庫増築	宅地	H28.7.19	GL - 0.3 mまで掘削、黒色土（表土） 内
61	H27.3558	西四坊大路	西大寺町三丁目 1630番1他 14筆	リアルアセット (株)	宅地造成	山林	H28.7.20	GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.2 mで 黄灰色粘砂
62	H28.3073	右京四条二坊九坪	尼辻中町 1861、 1862の各一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.7.20	GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.7 mで 青灰色粘土（山地）
	左京二条五坊十坪 東五坊坊間路 佐保道路	法華寺町 271番8、 271番3	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.22	GL - 1.15 mまで掘削、GL - 1.05 m で灰色砂礫（川河堆積）	
64	H27.3498	東紀寺道跡	東紀寺町 1-60-1	奈良地方気象台長	樹木移植・伐根	学校 用地	H28.7.25	GL - 1.6 mまで掘削、GL - 1.5 mで 黄灰色粘土（山地）
65	H28.3159	秋頭古墳群	山陵町 587番6、587 番7、587番11の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.25	GL - 0.3 mまで掘削、GL - 0.2 mで 黄灰色粘土（山地）
	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦窯跡	大安寺 2-2-16	個人	建物の除去及び 改修	宅地	H28.7.25 H28.8.1 H28.8.9 H28.10.24	GL - 0.1 mまで掘削、褐色土（表土） 内 GL - 0.45 mまで掘削、盛土 0.35 m、 黒灰色土 0.1 m以上 GL - 0.5 mまで掘削、褐色土（表土） 0.2 m、黒灰色土 0.3 mで灰褐色土 GL - 0.2 ~ 0.55mまで掘削、コンク リート 0.15 m、黒灰色土 0.4 m	
67	H28.1021	史跡 東大寺旧境内	雜司町 89、90 他	奈良市長	犬走り飛去・復 旧工事及び耐震 補強工事に伴う 仮設工事	学校 用地	H28.7.25	GL - 0.1 mまで掘削、盛土
68	H28.3057	古市方形埴 古市城跡	古市町 1846-29 地内、 1846-40	関西電力（株） 奈良電力部電力部	電柱・建物 新設、撤去	道路・ 宅地	H28.7.26	A: GL - 1.8 mまで掘削、暗褐色土（盛 土）、B: GL - 2.5 mまで掘削、黃褐色 砂礫（山地）
69	H28.3528	左京二条七坊九坪 奈良町道跡	東筒井町 8、9	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.26	GL - 0.5 mまで掘削、黒灰色土（表土） 内
70	H28.1023	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦窯跡	東九条町 1349番1	西日本電信電話 (株)	電柱の取替	宅地	H28.7.27	GL - 2.5 mまで掘削、盛土 1.5 mまで 確認
71	H28.3042	左京三条六坊三坪 興福寺跡 奈良町道跡	小西町 20	個人	商店舗付住宅新 築	宅地	H28.7.27	GL - 1.8 mまで掘削、GL - 0.8 mで 黄白色砂礫（山地）
	新薬師寺	高畠町	(大) 奈良教育大学 学長	付属小学校グラ ウンドフェンスの設置、敷水栓 の設置、特別支 援学校空間漏水 対策、付属幼稚 園砂場排水補修	学校 用地	H28.7.27	GL - 0.4 mまで掘削、盛土内	
73	H28.3135	左京二条五坊五坪	芝辻町三丁目 1-6 ~ 1-8	大阪ガス（株） 導管事業部	ガス管理設	道路	H28.7.28	GL - 0.75 ~ 1.15 mまで掘削、盛土内
74	H28.3076	左京二条五坊六坪 東五坊坊間西小路	法蓮町 64番5	個人	個人住宅新築	宅地	H28.7.29	GL - 0.2 mまで掘削、盛土内
75	H28.3055	右京五条一坊十四坪 西一坊大路	五条町 163番1、164 番1の一部、200番の 一部、202番1の一部	(株) ローソン	店舗新築	宅地	H28.7.29 H28.8.16	GL - 0.2 mまで掘削、黒灰色土（耕作 土）内
76	H28.3058	右京五条一坊九坪	五条町 247番5の一部	個人	個人住宅新築	水田	H28.8.1	GL - 1.7 mまで掘削、GL - 1.4 mで 黄灰色粘土（山地）
77	H27.3072	左京四条三坊二坪	三条川西町 3番1号	奈良市長個人	給食室建設	学校	H28.8.3 H28.8.5	GL - 1.25 mまで掘削、盛土内 GL - 1.1 ~ 1.4 mまで、盛土内
78	H27.3567	遺物散布地	出屋敷町 102番5、 102番6、102番12	出屋敷町自治会	集会所新築	学校	H28.8.4	GL - 0.2 mまで掘削、黒灰色土（耕作 土）内
	左京三条二坊十三 十四坪 東二坊大路	西九条町四丁目2番1、 2、11	大和ハウス工業 (株)	工場新築	宅地	H28.8.8 H28.8.31 H28.9.16 H28.9.30 H28.10.28 H28.12.7	GL - 1.4 ~ 1.7 mまで掘削、GL - 1.5 mで灰褐色粘土（山地）通構面 GL - 1.3 mまで掘削、黒灰色土（耕作 土）内 GL - 1.4 mまで掘削、褐色土内 GL - 2.0 mまで掘削、GL - 1.6 mで 灰褐色粘土（山地） GL - 1.8 mまで掘削、GL - 1.7 mで 灰褐色粘土（山地） GL - 1.6mまで掘削、GL - 1.4 mで 黄灰色土（山地） GL - 1.1mまで掘削、盛土内	
80	H27.3060	西大寺跡	若葉町三丁目 1868番 6	ファースト住建 (株) 東大阪支店	分譲住宅新築	宅地 水田	H28.8.8	GL - 0.5 mまで掘削、GL - 0.3 mで 黄灰色土（山地）
81	H27.3314	左京四条六坊三坪 東六坊坊間路 奈良町道跡	柳町 10 - 1	大阪ガス（株） 導管事業部	ガス管理設	道路	H28.8.19	GL - 2.0 mまで掘削、GL - 1.7 mで 灰色砂礫（河川堆積）

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
82	H27.3495	新業舎寺	高畠町 469-1, 470-1, 471-1, 472-1, 473-1	(協) 協同福祉会	福祉施設新築	水田	H28.8.19	GL - 0.3 mまで削削、GL - 0.3 mで黒灰色土(耕作土)
83	H28.3093	秋頭古墳群	山陵町地内	奈良市公共下水道管理者	下水道、上水道工事	道路	H28.8.25	GL - 1.9 mまで削削、GL - 0.65 mで赤灰色粘土(地山)
							H28.8.26	GL - 1.3 mまで削削、GL - 0.5 mで赤灰色粘土(地山)
							H28.9.2	GL - 1.05 mまで削削、GL - 0.55 mで赤灰色粘土(地山)
								GL - 0.65 mまで削削、黒灰色土(耕作土)内
84	H28.3080	左京三条六坊八坪 三条大路	内侍原町 41 番	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.8.26	GL - 0.65 mまで削削、黒灰色土(耕作土)内
85	H28.3119	左京一条三坊三坪	法華寺町 1214 番2	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管埋設	道路	H28.9.1	GL - 1.3 mまで削削、盛土内
86	H28.3176	奈良町遺跡	紀寺町 864-1	大阪ガス(株) 専管事業部	ガス管敷設撤去	道路	H28.9.5	GL - 0.75 mまで掘削、盛土内
87	H28.3099	奈良町遺跡	北京続町 58-8 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.9.6	GL - 1.4 ~ 1.9 mまで削削、GL - 0.85 ~ 1.2 mで黄褐色砂質土(地山)露面
							H28.10.26	GL - 0.7 mまで削削、黒灰色土内
88	H28.3225	左京六条三坊十六坪	六条一丁目 807 番9	個人	個人住宅新築	宅地	H28.9.7	GL - 0.2 mまで削削、盛土内
89	H28.3087	右京三条三坊四坪	五条二丁目 564 番、 566、567 番1 の一部	洋国開発(株)	下水道の敷設、 下路整備	宅地	H28.9.9	GL - 1.3 mまで削削、盛土 0.9 m、黒灰色土(耕作土)0.4 m
90	H28.3043	阿闍寺跡	法華寺町 1 番4 号	(株) 大和流通経済 研究所	宅地造成	慣地	H28.9.9	GL - 0.6 ~ 0.9 mまで削削、GL - 0.6 mで黄褐色砂質土(地山)
91	H28.3065	右京北近辺四坪	西大寺北町 3丁目	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.9.12	GL - 0.6 mまで削削、盛土 0.4 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m、灰色土 0.1 m
92	H28.3174	高塚遺跡	御生町 3014-3、 2014-1 の一部	中井鉄鋼建設(株)	工場新築	宅地	H28.9.12	GL - 1.8 mまで削削、GL - 0.2 ~ 1.1 mで黄灰色砂質土(地山)
93	H28.3178	左京一条四坊十三坪 東四坊大路・一条 間南小路	法蓮町 702 番3 の一部	(株) ヒラサワ	宅地造成	宅地	H28.9.13	GL - 1.5 mまで削削、GL - 1.2 m灰 色砂(河川堆積)
94	H28.3158	阿秀山蛇魔寺跡	鶴鳥町 1丁目 554-7、 554-8	個人	個人住宅・教会 新築	宅地	H28.9.15	GL - 0.25 mまで削削、盛土内
95	H28.3169	右京五条三坊四坪	五条二丁目 561 番、 566番の各一部	洋国開発(株)	下水道の敷設、 宅地造成	宅地	H28.9.15	GL - 0.7 ~ 0.9 mまで削削、盛土内
96	H28.3202	東二坊間路	西九条町 3丁目 2-16、 2-33、2-27	個人	共同住宅新築	宅地	H28.9.15	GL - 0.5 mまで削削、盛土内
97	H28.1118	史跡 春日大社境内	春日野町 160	奈良市長個人	看板の撤去	境内地	H28.9.15	GL - 0.45 ~ 0.60 mまで削削、茶 褐色土(褐色粘土ブロック及 10 ~ 20cmの礫含)
98	H28.3228	左京一条三坊五坪	法華寺町 1270 番地の 一部	(株) フォレスト本 店	宅地造成	宅地	H28.9.21	GL - 1.5 mまで削削、GL - 0.8 mで 黄褐色砂質土(地山)
99	H28.3045	左京二条三坊一・八 坪	法華寺町 1078 番地	個人	宅地造成	宅地	H28.9.23	GL - 1.05 mまで削削、GL - 1.05 m で黒灰色土(地山)
100	H28.3197	左京三条五坊十四坪 東五坊八路	今辻子町 35 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.9.27	GL - 0.8 mまで削削、GL - 0.6 mで 黄褐色土(地山)
							H28.11.2	GL - 0.3 mまで削削、黒灰色土(表土)内
101	H28.3165	左京六条四坊一坪 西二坊大路	六条一丁目 904 番10	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.3	GL - 0.3 mまで削削、GL - 0.3 mで 黄褐色粘土(地山)
102	H28.3195	左京一条三坊七坪 東三坊間西小路	法華寺町 319 番1 の 一部	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.6	GL - 0.3 mまで削削、盛土内
103	H28.3137	左京三条三坊二坪	西九条町 1丁目 3-6	個人	共同住宅新築	宅地	H28.10.6	GL - 0.6 mまで削削、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、灰色土 0.2 m、褐灰色土 0.1 m
104	H27.1159	史跡 平城京朱雀大 路跡	二条大路南四丁目	奈良県知事	進入路撤去	公有地	H28.10.11 H28.10.14	削削を伴わず、現状地盤面
105	H28.3189	左京二条七坊北鄰 12	川上町 565-3、564- 12	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.12	GL - 0.2 mまで削削、黒灰色土(表土)内
106	H27.3204	右京六条四坊五坪	六条三丁目 1174 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.13	GL - 0.2 mまで削削、GL - 0.2 mで 黄褐色砂質土(地山)
107	H27.1159	史跡 平城京朱雀大 路跡	二条大路南四丁目	奈良県知事	進入路撤去工事	公有地	H28.10.14	復旧確認
108	H28.3265	右京七条一条十五坪 西二坊大路	奈良市六条大路 102-1	(医) 康仁会	病院用地の覆り 廊下、駐車場、 倉庫新築	宅地	H28.10.18	GL - 0.5 mまで削削、淡灰色砂質土内
							H28.11.4	GL - 0.65 mまで削削、灰色砂内
109	H28.3168	右京二条一坊十二坪 普原東遺跡	西大寺国見町 2丁目 358 番 16、359 番 1、 359 番 4、359 番 5	(株) ウメダ	共同住宅新築	宅地	H28.10.18	GL - 0.3 mまで削削、盛土内
110	H28.3155	秋篠寺	秋篠町 768 番 1、768 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.18	GL - 0.2 mまで削削、暗灰色土(表土)内
111	H28.3219	右京七条三坊七坪	七条一丁目 422 番 2	個人	個人住宅新築地区	宅地	H28.10.19	GL - 1.5 mまで削削、盛土 1.0 m、暗 灰色土(耕作土)0.2 m、赤褐色土 0.1 m、 褐灰色土 0.2 m
112	H28.3182	一条西三坊南大路	西大寺芝町 1丁目 2472 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.19	GL - 1.3 mまで削削、GL - 0.3 mで 黄灰色粘土(地山)

No	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
113	H28.3290	左京八条四坊六坪西四坊訪問路	東九条町 625-1	(有) ほのぼの	身障者訪問介護施設新設	宅地	H28.10.20	GL - 0.5 mまで掘削、黒灰色土(耕作土) 0.2 m、褐色土 0.1 m、赤褐色土 0.1 m、灰褐色土 0.1 m
114	H28.3249	右京四条三坊九坪	平松一丁目 22番1の一部	個人	賃貸住宅	宅地	H28.10.20	GL - 1.25 mまで掘削、GL 以下盛土 0.75 m、黒灰色土(耕作土) 0.15 m、淡黄色土 0.2 m
115	H28.3160	一条東三坊北大路ウワナベ古墳	法華寺町内	奈良市公営企業管理者	水道工事	宅地	H28.10.21	GL - 2.2 mまで掘削、GL 以下暗灰色土(表土 0.4 m)、以下防砂堆積
116	H27.3568	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 51-8	個人	共同住宅新築	宅地	H28.10.21	GL - 1.25 mまで掘削、盛土内
117	H28.3099	奈良町遺跡	奈良市北京町 58 - 8の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.10.26	GL - 0.7 mまで掘削、砂石 0.2 m、茶褐色土 0.3 m、黒灰色土 0.2 m以上
118	H27.3231	右京六条三坊九坪	六条一丁目 683番	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.26	GL - 0.5 mまで掘削、GL - 0.5 mで灰色粘土(地山)
119	H28.3253	東五坊三条大路	大宮町一丁目 1-7 ~ 5	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管敷設	道路	H28.10.27	GL - 0.7 mまで掘削、アスファルト 0.15 m、以下盛土
120	H28.3079	左京五条二坊五坪	五条町 330番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H28.10.31	GL - 1.15 mまで掘削、盛土 0.75 m、黒灰色土(耕作土) 0.35 m、灰色土 0.05 m以上
121	H28.3208	右京北辺四坊七坪	西大寺宝ヶ丘 6-3 ~ 西大寺電王町一丁目 4	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管理設	道路	H28.11.1 H28.11.2 H28.11.4	GL - 0.85 mまで掘削、GL - 0.45 mで黄灰色砂質土(地山)
122	H28.1004 -1090	史跡 平城京朱雀大路跡	二条大路南三丁目	国土交通省	公園施設の保存整備	公園	H28.11.2 H28.11.4	GL - 0.45 mで掘削、掘削確認 ポックスタクルバート掘削確認
123	H28.3308	小山田遺跡 小山田城跡	郡都小山町 1247	個人	個人住宅新築	宅地	H28.11.10	GL - 0.4 mまで掘削、GL - 0.35 mで黄褐色土(地山)
124	H28.1079	史跡大安寺跡境内附石橋瓦窯跡	大安寺 4 - 5 - 18	個人	仓库解体・離れた新築	宅地	H28.11.11	GL - 1.1 mで掘削、盛土 0.4 m、以下砂山古墳周囲掘削
125	H28.3218	右京五条四坊六坪	平松四丁目 396-26 (1号棟)	(株) アーネストワーク	分譲住宅新築	宅地	H28.11.15	GL - 0.7 mまで掘削、GL 以下灰白色粘土質土(地山)
126	H28.3273	右京三条四坊十三坪 西四坊訪問西小路	宝来四丁目 666番地 -146番 1	(沿) 佛願寺	本堂新築	宅地	H28.11.15	GL - 0.35 mまで掘削、GL - 0.3 mで黄白色粘土質土(地山)
127	H28.3232	左京二条五坊十二坪 三条大路 奈良町遺跡	芝辻町 871番 2-1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.11.15	GL - 0.4 mまで掘削、盛土 0.2 m、黒褐色土 0.2 m以上
128	H28.3310	新薬師寺	高畠町 582-1	個人	個人住宅新築	宅地	H28.11.16	GL - 0.4 mまで掘削、盛土 0.2 m、黒褐色土 0.2 m以上
129	H28.3271	左京四条四坊十坪	三条宮前町	個人	共同住宅新築	宅地	H28.11.16	GL - 0.6 mまで掘削、盛土内
130	H28.3321	左京二条七坊十二坪 奈良町遺跡	南半田東町 12番	個人	個人住宅新築	宅地	H28.11.17	GL - 0.05 mまで掘削、黒灰色土(表土)内
131	H28.3347	右京四条一坊九坪	四条大西四丁目 431-1-28	三甲不動産(株)	事務所併用共同住 宅新築	宅地	H28.11.22	GL - 1.4 mまで掘削、盛土 1.1 m、黒灰色土(耕作土) 0.3 m、以下灰白色土
132	H28.3302	右京二条四坊九坪 西四坊訪問西小路	若葉台三丁目 1895番 17	個人	個人住宅新築	宅地	H28.11.22	GL - 1.5 mまで掘削、GL - 0.3 mで黄灰色粘土(地山)
133	H28.3140	左京四条六坊十四坪 三条大路跡	東城戸町 1番 1号、1番 3号	(合) 城和不動産	共同住宅新築	宅地	H28.11.24	GL - 0.6 mまで掘削、盛土内
134	H28.3134	左京四条四坊十七坪 東四坊訪問西小路	三条大路町 1248-1249-1250	個人	共同住宅新築	宅地	H28.11.24	GL - 2.1 mまで掘削、盛土内
135	H28.3332	左京五条五坊十二坪	西木辻町 155-3 ~ 4	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管理設	宅地	H28.11.24	GL - 0.75 mまで掘削、盛土内
136	H28.3313	左京六条四坊十五 ・十六坪	大安寺五丁目 974番 1、974番 2、976番 5	個人	賃貸住宅新築	宅地	H28.11.24	GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.8 mで青灰色粘土(地山)
137	H28.3287	右京七条四坊五坪 七条三条間南小路	七条西町一丁目 627番 1041-3 (1号地)	(ア) ファースト建 設(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.11.25	GL - 0.35 mまで掘削、盛土内
138	H28.3288	右京七条四坊五坪 七条三条間南小路	七条西町一丁目 627番 1041-3 (2号地)	(ア) ファースト建 設(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.11.25	GL - 0.35 mまで掘削、盛土内
139	H28.1049	史跡大安寺跡境内附 石橋瓦窯跡	東九条町 1325-2	奈良市長	仮設駐車場整地 仮設駐車場復旧	公有地	H28.11.29 H28.11.30	掘削を伴わず、撤去作業のみ 掘削を伴わず、撤去作業のみ
140	H28.3140	左京四条六坊十四坪	東城戸町 1番 1, 1番 2, 1番 4	(名) 城和不動産	共同住宅新築	宅地	H28.11.28 H28.11.29	東半部を GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.5 mで黄灰色粘土(地山) 中央・西半部を GL - 0.3 ~ 0.6 mまで掘削、盛土内
141	H28.3187	右京二条三坊十三坪	菅原町 380番 2	(ア) ファースト建 設(株)	分譲住宅新築	宅地	H28.12.1	GL - 0.4 mまで掘削、盛土内
142	H28.3172	新薬師寺	奈良市高畠町	(国) 奈良教育大学 校長	学校用地	学校用地	H28.12.1	GL - 0.3 mまで掘削、暗灰色土(表土)内
143	H28.3206	左京七条二坊四・五 坪	七条東町 303-3 丸、 294-1、189-12、 179-1先	関西電力(株) 奈良電力部	電柱新築	道路	H28.12.5	GL - 2.0 ~ 2.5 mまで掘削、盛土内

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
144	H28.3369	左京四条二坊十坪	四条大路一丁目 753-1	個人	宅地造成	宅地	H28.12.5	GL - 1.0 m まで掘削、GL - 1.0 m で 黄灰色粘土（地山）
145	H28.3397	左京二条五坊北鄰 番	法蓮町 714 番 3, 728 番 3, 729 番 2, 2084	個人	共同住宅新築	宅地	H28.12.8	GL - 0.8 m まで掘削、盛土 0.7 m、黑 灰色土（耕作土）0.1 m 以上
146	H28.3284	(08B-0141) 古畠	高側町 855 番	個人	個人住宅新築	宅地	H28.12.13	GL - 0.8 ~ 1.3 m まで掘削、GL - 0.8 m で 黄褐色砂質土（地山）
147	H28.3251	鴨池城	郡祁友田町 1516 番 1, 1516 番 2, 1966 番	個人	個人住宅新築	宅地	H28.12.15	GL - 0.1 m まで掘削、GL - 0.1 m で黄 褐色粘土（地山）
148	H28.3280	元興寺 奈良町道跡	北室町 17 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H28.12.19	GL - 0.6 m まで掘削、黒褐色土（表土） 内
149	H28.1163	名勝月ヶ瀬樹林	月ヶ瀬桃香野 4366-1	奈良県奈良市本事 務所長	歩道設置に伴う 梅樹の移植	梅林	H28.12.19	樹木を斜面下間に移植
150	H28.3354	-条条開路	法蓮町 805 番 3, 2045 番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H28.12.21	GL - 0.1 m まで掘削、盛土
151	H28.3300	開福寺跡 奈良町道跡	中筋町 20 番 3、東向 北町 12 隅の一部	個人	店舗併用住宅 新築	宅地	H28.12.21	GL - 1.6 m まで掘削、GL - 1.0 m で 黄灰色粘土（地山）
152	H28.3285	左京四条四坊五坪	大森西町 12 番 3 号	中谷電気（株）	事務所新築	宅地	H28.12.26	GL - 1.1 m まで掘削、GL - 0.7 m で黄 灰色砂質土（地山）
153	H28.3113	中ツ道	北ノ庄町 116 番 4 の 一部	（福）ききょう会	知的障害者施設 新築	宅地	H28.12.26	GL - 0.65 m まで掘削、黒灰色土（耕 作土）0.3 m、灰色土 0.35 m 以上
154	H28.3279	左京三条七坊三坪 五条一条開路 奈良町道跡	花園町 8、9 玄室町 22-2 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H28.12.28	GL - 0.2 m まで掘削、GL - 0.2 m で黑 褐色土（表土）
155	H28.3348	脇原寺跡	脇原町 520 番 1, 520 番 2 の各一部、520 番 4	個人	賃貸住宅新築	青空 駐車場	H28.1.6	GL - 0.2 m まで掘削、碎石 0.1 m、盛 土 0.1 m
156	H28.3245	西三坊七条大路	七条一丁目 679 番 1, 679 番 1 先	関西電力（株）奈 良電力部	電柱新築	道路	H29.1.11	GL - 1.0 m まで掘削、GL - 0.6 m で 青灰色粘土（地山）
157	H28.3356	五条大路東六坊大 路	北京駅町 57 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H29.1.11	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
158	H28.3200	左京三条三坊十五坪	大宮町六丁目 2-1	大阪ガス（株）導 管事業部	ガス管理設	道路	H29.1.13	GL - 0.1 m まで掘削、GL - 0.6 m で 青灰色粘土（地山）
159	H28.3363	西大寺跡	西大寺新地町 1827 番 20	個人	個人住宅新築	宅地	H29.1.13	GL - 0.45 m まで掘削、盛土内
160	H28.3419	右京五条三坊三坪	五条二丁目 535 番 1, 536 番 1	（京）招提寺	庫裡新築	宅地	H29.1.16	GL - 0.25 m まで掘削、盛土内
161	H28.3339	五条大路東七坊大路 東紀寺道跡	東紀寺町一丁目 701-1 他 7 事	（公財）地域医療振 興協会 市立奈良 病院管理者	医療施設（リニア アクセル）増築	病院 内敷地	H29.1.17	GL - 1.1 m まで掘削、盛土内
162	H28.3349	新薬師寺	高畑町 469-1	関西電力（株）奈 良電力部	電線・支線建替	宅地	H29.1.17	GL - 0.75 m まで掘削、GL - 0.45 m で黒褐色砂礫（地山）
							H29.1.18	GL - 0.7 m まで掘削、盛土内
163	H28.3311	右京四条四坊十三坪 四条一条開路小路 平松塙寺	平松五丁目 5-18 ~ 五 丁目 645 番地	大阪ガス（株）導 管事業部	ガス管理設	道路	H29.1.18	GL - 1.0 m まで掘削、GL - 0.9 m で 黄灰色砂質土（地山）
164	H28.3144	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 54-3	（株）奥畠商店	共同住宅新築	宅地	H29.1.19	GL - 1.6 m まで掘削、GL - 0.4 m で 黄灰色粘土（地山）
165	H28.3386	左京四条三坊十四坪	三条松町 390 番 9, 391 番 1 の一部、391 番 7, 391 番 8	個人	宅地造成	宅地	H28.1.20	GL - 1.5 m まで掘削、GL - 1.2 m で 黄褐色粘土（地山）
166	H28.3164	遺物散布地・集落跡	秋篠町 50 番地	（学）奈良大学	防球ネット設置 用地	学校 用地	H28.1.23	GL - 1.0 m まで掘削、盛土 0.2 m、 碎石 0.15 m、盛土 0.45 m、黒褐色土（耕 作土）0.1 m、灰土 0.1 m
167	H28.3179	西大寺跡 西三坊 間東大路	西大寺南町 1-33 地先	西日本電信電話 (株)奈良支店	電話工事	道路	H29.1.23	GL - 1.0 m まで掘削、盛土 0.5 m、灰 色粘土 0.25 m、暗灰色粘土 0.25 m,
168	H28.3329	-一条大路 西三坊 坊間東小路	西大寺南町 2398-1 の 一部	（株）阪奈建物	共同住宅新築	宅地	H29.1.30	GL - 0.4 m まで掘削、盛土内
169	H28.3244	左京五条二坊十六坪 大安寺道跡	四条大路南町 582 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H29.2.1	GL - 1.4 m まで掘削、盛土内
170	H28.3439	左京四条五坊十五坪	奈良市三条町 593-24	（株）シュガーブ エリイ	簡易宿泊所新築	宅地	H29.2.6	GL - 0.45 m まで掘削、盛土 0.4 m、 黒褐色土（表土）0.05 m
171	H28.3445	右京七条四坊十五坪	奈良市六条西四丁目 7 ~ 6 四丁目 7-10	大阪ガス（株）	ガス管入替	道路	H29.2.6	GL - 0.75 m まで掘削、アスファルト 0.1 m、盛土 0.3 m、暗灰色土 0.35 m 以上
							H29.2.6	A 地点：アスファルト 0.05 m、碎石 0.15 m
172	H28.3421	左京二条六坊九坪	法蓮町 1091 番 1 の 一部、1092 番、1092 番 2 の一部	（株）ローソン	店舗新築	宅地	H29.2.7	B 地点：アスファルト 0.05 m、以下盛土 C 地点：アスファルト 0.05 m、盛土 0.4 m、以下黄褐色粘土（地山） D 地点：アスファルト 0.05 m、碎石 0.15 m、以下黄褐色砂礫（地山）
							H29.2.8	E 地点：黒褐色土（表土）0.05 m、以 下盛土
173	H28.3432	左京二条五坊十四坪	奈良市北市町 57-3	個人	店舗新築	宅地	H29.2.7	GL - 0.4 m まで掘削、黒褐色土（表土） 0.4 m

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査 結果	
							日付	結果
174		秋頭古墳群	山越町 233-5 ~ 588	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管理設 道路		H29.1.23	A区: GL - 1.0 mまで掘削、GL - 0.1 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.1.24	B区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.25 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.1.25	C区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.5 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.1.27	D区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.65 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.2.1	E区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.5 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.2.2	F区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.45 mで黄灰色粘土。(地山)
							H29.2.3	G区: GL - 0.85 mまで掘削、GL - 0.25 ~ 0.45 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.7	H区: GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.25 ~ 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.10	I区: GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.2 ~ 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.13	J区: GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.14	K区: GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.15	L区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.2 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.16	M区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.17	N区: GL - 0.9 mまで掘削、GL - 0.45 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.20	O区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.3 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.21	P区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.1 mで埴生及び古墳東側周溝を確認
							H29.2.22	Q区: GL - 0.7 mまで掘削、アスファルト 0.1 m、盛土 0.1 m、褐色土 0.5 m
							H29.2.23	R区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.5 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.24	S区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.2 mで赤褐色粘土。(地山)
							H29.2.27	T区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.35 mで赤褐色粘土。(地山)
							H28.2.28	U区: GL - 0.7 mまで掘削、GL - 0.1 mで赤褐色粘土。(地山)
							H28.3.1	V区: GL - 0.8 mまで掘削、GL - 0.35 mで赤褐色粘土。(地山)
							H28.3.3	W区: GL - 0.7 ~ 0.75 mまで掘削、GL - 0.15 ~ 0.35 mで赤褐色粘土(地山)
175	H28.3404	左京三条五坊八坪	芝辻町一丁目 103番 6、103番 7	個人	個人住宅新築	宅地	H29.2.8	GL - 0.4 mまで掘削、黒褐色土(表土)、 0.4 m
176	H28.3415	右京七条西坊四・五・ 十二坪 七条大路	七条西町 24 ~ 21番 地	西日本電信電話 (株) 奈良支店	電柱新設	道路	H29.2.8	GL - 3 mまで掘削、GL - 0.2 ~ 0.45 mで黄灰色粘土。(地山)
177	H28.3377	左京三条四坊十六坪	芝辻町二丁目 150番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.2.13	GL - 0.3 mまで掘削、盛土 0.3 m。以下 黒灰色土(耕作土)
178		遺物散布地	秋篠町 1181-10	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.2.14	GL - 0.05 mまで掘削、盛土内。
							H29.2.15	南辺から 2 mで地山確認
							H29.2.16	GL - 1.8 mまで掘削、GL - 0.6 mで 黄灰色粘土(地山)
179	H28.3221	左京三条一坊三・六・ 七・十・十四・ 十五坪 朱雀大路 西・大路	三条大路三丁目 1-71 地先・三条大路南五丁 目 3-2-5 地先	関西電力(株) 奈 良電力部	電気工事	宅地	H29.2.14	GL - 0.4 ~ 0.45 mまで掘削、盛土内
								GL - 2.6 mまで掘削、GL - 0.15 ~ 0.2 mで淡黃色砂質土(地山)
180	H28.3307	右京七条西坊四坪	七条西町一丁目 627 番 1	関西電力(株) 奈 良電力部	電柱新設	道路	H29.2.15	GL - 1.0 mまで掘削、GL - 0.6 mで 黄灰色粘土(地山)
							H29.2.15	GL - 1.0 mまで掘削、GL - 0.5 mで 黄灰色粘土(地山)
181	H28.3335	阿弥陀山寺跡	敷島町一丁目	奈良市長	道路排水施設改 良事業(浸水対 策)	道路	H29.3.3	GL - 1.1 mまで掘削、アスファルト 0.05 m、盛土 0.85 m、船舶色土 0.2 m
								GL - 0.45 mで黄灰色砂鉄砂(地山)
182	H28.3390	六条山東道路	奈良市六条西三丁目 2 ~ 4-9	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H29.2.18	GL - 0.75 mまで掘削、GL - 0.35 ~ 0.45 mで黄灰色粘土(地山)
								GL - 1.1 mまで掘削、アスファルト 0.05 m、盛土 0.85 m、船舶色土 0.2 m
183	H28.3292	遺物散布地	奈良市北水井町 278-1	関西電力(株) 奈 良電力部	電柱新設	道路	H29.2.21	GL - 1.1 mまで掘削、アスファルト 0.05 m、盛土 0.85 m、船舶色土 0.2 m

No	受理番号	遺跡	届出・申請地	申請者	事業内容	現況	立会調査	
							日付	結果
184	H28.3440	左京七坊五条御路	奈良市策地之内町1番	個人	個人住宅新築	宅地	H29.2.21	GL - 0.2 mまで掘削。GL - 0.2 mで 黄褐色砂質土(地山)
185	H28.3438	新薬師寺	高畠町	(国) 奈良教育大学 長	アースの取設	学校用地	H29.2.23	GL - 0.6 mまで掘削。GL - 0.6 mで 黄褐色砂質土(地山)
186	H28.3347	左京二条五坊十四坪	北市町69-8、69-9	個人	賃貸住宅新築	宅地	H29.2.23	GL - 0.4 mまで掘削。GL - 0.2 mで 黄褐色砂質土(地山)
187	H28.3246	左京四条四坊十三坪	三条本町1118、 1119、1120	スマットホーム (株)	共同住宅新築	宅地	H29.2.24	GL - 1.6 mまで掘削。GL - 1.6 mで 黒色土(コクス土含)
188	H28.3365	右京北迎西坊七・八 坪	西大寺魔王町二丁目 1495-1、8	-建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H29.2.24	GL - 0.25 mまで掘削。盛土内
189	H28.3376	右京七条四坊十四坪	六条西四丁目1206-3、 880-2	関西電力(株) 奈 良電力部	電柱新設	道路	H29.3.1	GL - 1.0 mまで掘削。GL - 0.8 mで 青灰色砂質土(地山)
190	H28.3281	左京四条五坊十六坪 奈良町道跡	下三条町30番1	個人	店舗村共同住宅 新築	宅地	H29.3.2	GL - 0.8 mまで掘削。盛土 0.4 m、淡 灰色砂質土 0.4 m
191	H28.3449	音原寺跡	音原町520-1～5～ 520-2	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管理設	道路	H29.3.3	GL - 0.75 mまで掘削。GL - 0.45 m で黄灰色砂質土(地山)
192	H28.1184	名勝月ヶ瀬梅林	月ヶ瀬尾山5-1他	奈良市長	梅樹の植樹	梅林	H29.3.7	GL - 0.4 mまで支柱打込み
193	H28.1160	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦塚跡	東九条町1134、 1339-1	奈良市長	保存整備	公有 地	H28.3.8	灰色土(表土)、灰褐色土(包含層) の順で堆積する
							H29.3.9	GL - 0.3 ~ 0.4 mまで掘削。盛土内
							H29.3.10	GL - 0.1 ~ 0.3 mまで掘削、耕作土内
							H29.3.11	腐植土内
							H29.3.13	
							H29.3.16	GL - 0.7 mで地山確認
194	H28.3456	音原寺跡	音原町520-2	関西電力(株) 奈 良電力部	電線支線新設	宅地	H29.3.9	GL - 1.8 mまで掘削。GL - 1.3 mで 灰色砂質土(河川堆積)
195	H28.3451	左京四条四坊十坪 6-41	三条宮前町6-7～ 6-41	大阪ガス(株) 導管事業部	ガス管理設	道路	H29.3.9	GL - 1.15 mまで掘削。GL - 0.75 m で黄褐色粘土(地山)
196	H28.3452	左京四条六坊十四坪	東淨円町1-1、1-2	関西電力(株) 奈 良電力部	電線支線新設	宅地	H29.3.10	GL - 1.5 mまで掘削。GL - 0.7 ~ 1.0 mで黄褐色砂質土(地山)
197	H28.3362	右京六条四坊一坪	六条一丁目948番26	個人	個人住宅新築	宅地	H29.3.10	GL - 1.3 mまで掘削。GL - 0.05 mで 黄灰色粘土(地山)
198	H28.3211	坂原阿弥陀跡	坂原町1028番地1	個人	個人住宅新築	宅地	H29.3.13	GL - 0.1 mまで掘削。黒褐色土(耕作 土) 0.1 m、以下黄褐色シルト混
199	H28.3437	左京二条七坊二・七 坪	西菫町42-3	(学) 奈良教育大学 理事長	職員宿舎構内雨水 排水改修工事	学校用地	H29.3.13	GL - 0.96 mまで掘削。黒褐色土(表土) 0.1 m、暗褐色土(近現代の瓦含) 0.86 m以上
200	H28.3359	水間遺跡	水間町658番地	関西電力(株) 奈 良電力部	供給工事(電柱・ 支線)	水田	H29.3.14	GL - 1.4 mまで掘削。黒褐色土 0.8 m、灰色 砂質土 0.45 m
201	H28.3472	右京六条四坊一坪	六条一丁目976-2の 一部	個人	個人住宅新築	宅地	H29.3.22	GL - 0.2 mまで掘削。盛土内
202	H28.3399	左京三条二坊一・二 坪	芝辻町一丁目117-2、 117-4	個人	共同住宅新築	宅地	H29.3.23	GL - 0.7 mまで掘削。盛土 0.6 m、黑 色土(耕作土) 0.1 m以上
203	H28.3303	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦塚跡	西大寺国見町二丁目 296-900	個人	個人住宅新築	宅地	H29.3.27	GL - 1.0 mまで掘削。盛土 0.7 m、黑 色土(耕作土) 0.3 m以上
204	H28.1204	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦塚跡	大安寺二丁目1146-1、1146- 2、1146-3	個人	建物の除去及び 改修	宅地	H29.3.27	GL - 0.5 mまで掘削。GL - 0.3 mで 黄褐色土(地山)
205	H28.1007	史跡大安寺旧境内附 石橋瓦塚跡	大安寺二丁目1147、 1148-1、1148-2	奈良市長	水路改修(ハイ バース管設置)	水路	H29.3.27	GL - 0.7 ~ 0.9 mまで掘削。盛土内
206	H28.1163	名勝月ヶ瀬梅林	月ヶ瀬桃香野4366-1、 奈良県奈良市木事 務所長	歩道設置に伴う 梅樹の移植	梅林	H29.3.28	梅木を搬影碑の前面に移植	
207	H28.3486	左京二条四坊七坪 二条奈良北小路	法蓮町376番、375 番	個人	駐車場造成	水田	H29.3.29	GL - 0.15 mまで掘削、黒褐色土(耕 作土) 内
208	H28.3520	左京四条四坊一坪	三条添田町110番1	(株) ローソン運営 本部近畿エリアサ ポート部	サインポールの 設地	宅地	H29.3.31	GL - 1.35 mまで掘削。碎石 0.1 m、 盛土 0.6 m、暗褐色土 0.2 m、灰色土 0.15 m、灰褐色土 0.15 m
209	H28.3444	東九条平城跡	東九条町181番2、 182番、183番3、北 之庄町2番1、3番1	辻一建設(株)	店舗新築	宅地	H29.3.31	GL - 1.2 mまで掘削。碎石 1.2 m以上

※遺跡名「平城京跡」については、条坊名を記載

第2章 平成28(2016年)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

平成28（2016）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展示

A. 常設展示

対象：一般

会期：平成28年4月1日（金）～5月27日（金）
平成28年9月2日（月）～10月25日（金）
平成29年1月6日（月）～2月21日（金）
(132日間)

場所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。

内容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：1,185名

B. 秋季特別展「奈良を掘る」の開催

対象：一般

会期：平成28年11月1日（火）～12月28日（水）
(42日間)

場所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣旨：奈良市教育委員会による昭和54年からの発掘調査で出土した考古資料の中から、奈良の歴史を物語る上で特に注目される資料を、5つのテーマに沿ってパネルを交えて紹介。

観覧者数：367名

その他：・案内を「しみんだより」11月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のチラシの作成・配布。
・展示解説書の作成。
・事前に報道機関に資料を配布、内覧会を実施

C. ミニ展示「奈良を掘る」（夏季・冬季の年2回）の開催

対象：一般

趣旨：奈良新聞に平成26年7月から平成28年1月に連載した「奈良を掘る」の記事のひとつを取り上げ、出土遺物を加えて、夏季と冬季の2回に分けて、3施設で巡回展示する。

① 夏季展示「第1回 土師氏と埴輪」

会期・場所：平成28年6月1日（木）～6月30日（木）
(22日間)・埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

平成28年7月4日（月）～7月31日（日）
(24日間)・奈良大学博物館

平成28年8月2日（火）～8月31日（水）
(21日間)・奈良市役所ロビー展示ケース

内容：「奈良を掘る」第23話「土師氏と埴輪」を取り上げ、土師氏との関わりが深い菅原東遺跡の埴輪窯跡群の遺物を展示する。埴輪と陶棺と解説パネルから、古墳時代後期の菅原の地を紹介。

- ・案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。
- ・宣伝用チラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。
- ・事前に報道機関に資料を配布。

② 冬季展示「第2回 離宮と相撲」

会期・場所：平成29年1月10日（火）～1月31日（火）
(16日間)・埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー



秋季特別展「奈良を掘る」



夏季ミニ展示「土師氏と埴輪」

表1 月別来館者数一覧

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
145	169	189	202	180	194	217	203	164	143	164	218

平成29年2月2日（木）～2月28日（火）
 （19日間）・奈良市役所ロビー展示ケース
 平成29年3月2日（木）～4月22日（土）
 （44日間）・奈良大学博物館

内 容：「奈良を掘る」第12話「離宮と相撲」を取り上げ、平城京左京二条二坊十二坪の調査で出土した「相撲所」「左相撲」墨書き土器や三彩瓦等の遺物と、建物配置を解説パネルで展示し、平城京内宅地における十二坪の特異性を紹介。

その他：
 • 案内を「しみんだより」1月号と奈良市役所のホームページに掲載。
 • 宣伝用チラシの作成・配布。
 • 展示リーフレットの作成。
 • 事前に報道機関に資料を配布。

D 春季発掘調査速報展「平松廃寺・平城京跡（左京二条三坊一・八坪）・大安寺講堂の調査」

対 象：一般

会 期：平成29年3月1日（水）～3月31日（金）
 （23日間）

内 容：平成28年度の調査から、初めて寺域内が調査された平松廃寺と、2町以上の利用が想定される平城京左京二条三坊一・八坪の調査を、また2カ年にわたる調査で、平面規模が判明した大安寺講堂の調査を、出土遺物とパネルで紹介。

観覧者数：218名

その他：
 • 案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。
 • 宣伝用チラシの作成・配布。
 • 展示リーフレットの作成。
 • 事前に報道機関に資料を配布。

E 年間観覧者数 2,188名（240日間）。月平均182名。月別観覧者数は表1のとおり。

2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

対 象：近畿共助会奈良市部「歩く会」20名

期 日：平成28年6月8日（水）

3. 講演会 教室の開催

A 埋蔵文化財講演会

対 象：一般

期 日：平成28年11月12日（土）13:30～16:25

内 容：秋季特別展の理解をより一層深めるため、特

別展開催中に市民から聴講者を募集し、専門的な講演会を外部から講師を招いて開催した。

参加者数：68名



埋蔵文化財講演会



埋蔵文化財発掘調査報告会

会 場：埋蔵文化財調査センター講座室
 • 菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）
 「奈良時代の国際交流」
 • 森下恵介（奈良市埋蔵文化財センター所長）
 「奈良を掘る－発掘こばれ話－」
 その他：・募集案内を「しみんだより」10月号と奈良市役所のホームページに掲載。
 • 秋季特別展チラシに掲載。
 • 報道機関に募集要項をお知らせ。

B 埋蔵文化財発掘調査報告会

対 象：一般
 期 日：平成29年3月19日（日）13:30～16:30
 内 容：春季速報展の理解をより一層深める為、速報展開催中に市民から聴講者を募集し、平成28年度に実施した調査の成果報告を調査担当職員がパワーポイントや資料などを使用して報告。
 • 「平松庵寺の調査」
 • 「平城京跡（左京二条三坊一・八坪）の調査」
 • 「大安寺講堂の調査」

会 場：埋蔵文化財調査センター講座室
 参加者数：55名
 その他：・募集案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。
 • 春季速報展チラシに掲載。
 • 報道機関に募集要項をお知らせ。

C 夏休み親子考古学体験

対 象：奈良市内の小学4～6年生の児童とその保護者
 期 日：平成28年8月21日（日）～8月23日（火）・28日（日）
 内 容：発掘現場で調査に参加したのち、出土した遺物の洗浄・写真撮影・記録カード作成を行った。
 会 場：史跡大安寺跡境内発掘調査現場と埋蔵文化財調査センター
 参加者数：約90人
 その他：募集案内を「しみんだより」7月号と市役所のホームページに掲載。案内チラシの配布・掲示。



夏休み親子考古学体験

4. 市民考古学講座

対 象：一般
 期 日：平成28年7月6日（水）～平成29年3月8日（水）、毎月1～2回、全13回（表2）
 内 容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポート者が講師を勤める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。
 受講者数：25名
 その他：・案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表2

回	開講日	内容
1	7月6日	開講式・オリエンテーション 考古学って何？・旧石器・縄文時代の基礎知識
2	7月20日	弥生時代の基礎知識
3	8月3日	古墳時代の基礎知識
4	9月7日	発掘調査の流れ
5	9月21日	発掘調査体験（実習）
6	10月5日	奈良の都 平城京
7	10月26日	平城宮跡をみる（実習）
8	11月9日	古代の瓦
9	11月30日	古代の土器
10	12月7日	舞台裏（整理作業）をみる
11	1月11日	拓本のとり方（実習）
12	2月15日	奈良町と中近世の土器・陶磁
13	3月8日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

5. 市民考古サポーターの活動支援

A 市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していくいただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対象：平成27年度の受講修了者

登録人員：9名（登録総人数93名）

活動開始：平成28年7月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講別展開催中に市民から聴講者を募集

し、専門的な講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動延べ人數：182名

B 「奈良 氷室神社の石燈籠調査報告」の刊行

市民考古サポーター活動の一環として、平成23年度から氷室神社石燈籠の調査を実施し、その調査成果を報告書にまとめ発行した。

6. 体験学習・実習の受け入れ

A 市立高校体験学習

(1)

対象：一条高校人文科学科2年生 40名

期日：平成28年8月25日（木）

場所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場（東九条町）

内容：発掘調査の体験実習

(2)

対象：一条高校人文科学科1年生 40名

期日：平成28年9月27日（火）（整理実習）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

B 中学校職場体験学習

(1)

対象：青翔中学校2年生 男子3名

期日：平成28年7月7日（木）～8日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(2)

対象：登美ヶ丘中学校2年生 男子3名

期日：平成28年11月9日（水）～11日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(3)

対象：都跡中学校2年生 女子2名

期日：平成28年11月16日（水）～18日（金）

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

C 中学校校外研修

対象：渋谷教育学園渋谷中学校3年生 17名

期日：平成28年10月12日（水）

場所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場と埋蔵文化財調査センター講座室

内容：発掘調査現場の見学、埋蔵文化財調査センターの施設見学と拓本

D 体験学習事業

①発掘調査体験学習

期日：平成28年8月30日（火）～9月8日（土）

平成28年9月13日（火）～9月23日（土）

事前説明会実施日：平成28年8月26日（金）

9月9日（金）



発掘調査の体験実習（一条高校）



職場体験学習（都跡中学校）

場 所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場

内 容：事前説明会にて、発掘調査ハンドブックにしたがって、発掘調査方法や安全の為の講習を受講後に、体験を実施。調査を始める前に必ず検出遺構の説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・検出遺構の説明を行った。また、体験期間中は調査現場を常時公開し、見学者に調査についての説明を行った。

参加者数：約149名

その他：・募集案内を「しみんだより」7月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせし、報道関係者対象の発掘調査体験を実施。
・発掘調査ハンドブックの作成。

②大安寺遺跡探訪ツアー

対 象：一般

期 日：平成28年8月30日（火）～9月3日（土）
平成28年9月13日（火）～9月17日（土）

場 所：史跡大安寺旧境内
塔院一発掘現場一南大門一経棲一僧房一杉山古墳

内 容：整備された大安寺の遺構と、発掘現場を組み合わせた見学コースを設定し、広大な大安寺の遺跡を理解しやすいよう案内。

参加者数：約73名

その他：・募集案内を「しみんだより」8月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ。



発掘調査体験学習

7. 文化財学習用キットの貸出し

対 象：奈良市内の小中学校

趣 旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小学生・自主活動グループにも「触ることのできる文化財」として使用する。

資料の内容：

①縄文土器と弥生土器

②縄文時代の石器と弥生時代の石器・石包丁

③古墳時代の埴輪と須恵器

④奈良時代の土器 ④-1 土器A・④-2 土器B

⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の鏡と墨書き土器・和同開珎

貸出

場 所：興東小学校

期 日：平成28年4月19日（火）～4月25日（月）
平成28年5月10日（火）～5月16日（月）

資 料：①・②・⑥

8. 職員の派遣（講師など）

A 一条高校人文学科「総合文化研究」授業

期 日：①平成28年7月12日（火）
②平成28年9月13日（火）

場 所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各1名

内 容：①発掘調査について ②考古学とは何か

B 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催「大和を掘る」土曜講座

期 日：①平成28年8月20日（土）
②平成28年9月3日（土）

場 所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：①②各1名

内 容：①平城京右京一条三坊四坪の宅地利用と井戸
②近世奈良町の刀装具生産と鋳造技術

C 田原本町教育委員会「歴史文化教室」

期 日：平成28年6月10日（金）

場 所：田原本青垣生涯学習センター視聴覚室

派遣人数：1名

内 容：弥生の時代

9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製・木製の遺物について、化学的保存処理を計画的に行ない恒久的な保存を図った。

(保存処理資料)

- ・平城京跡出土の釘 1 点・鉄斧 3 点・雁股式鉄鍔 1 点・刀子 2 点と藤尾城出土刀 1 点

10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 9 件(表3)

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 18 件(表4)

C 学術研究等に関わる資料閲覧 12 件(表5)

表3

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 28.4.1 ~ H 29.3.31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(縄進上木簡1点、骨錢進上木簡1点、豹皮紋付札1点、淡皮鈎削付鈎指簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府逆塗付札1点、錦布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点)、分割(模造品)1点(平城京跡第 167 次調査出土)
2	元興寺文化財研究所	春季企画展「ならまちの南玄関 袖塚・京終の歴史文化」に展示	H 28.4.18 ~ H 28.5.27	平城京跡第 258 次調査出土白磁碗1点・青磁碗1点・小型瓦器碗1点・銅製鏡1点
3	奈良大学文学部文化財学科	講義「考古学研究法」の教材として使用	H 28.5.24 ~ H 28.8.3	平城京跡第 283 次調査出土土器類遺物整理箱 10 箱分
4	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	連続展「大和を觀る 34」に展示	H 28.6.28 ~ H 28.9.17	上ノ山古墳出土繪画埴輪1点・円筒埴輪1点・蓋形埴輪3点・石見形埴輪2点・鞍形埴輪4点・須恵器蓋台5点・西大寺跡第35次調査出土井戸枠1点・須恵器杯1点・須恵器蓋2点・土師器杯3点・十師器1点・十師器小皿1点・十師器高杯1点・黒色土器1点・軒丸瓦2点・平城京跡第688次調査出土蓋付三足壺1点・把手付壺2点・鉢型7点・鉢底3点・砾石1点
5	大阪府立近つ飛鳥博物館	特別展「古代人がみた色と光―色彩と輝きの考古学―」に展示	H 28.7.1 ~ H 28.9.30	赤坂塚穴群3号墓陶棺蓋1点・史跡大安寺境内出土奈良三彩短頭壺1点・平城京跡第622次・A調査出土奈良三彩小壺1点・平城京跡第28次調査出土綠釉軒瓦1点・平城京跡第73次調査出土三彩丸瓦1点
6	大安寺	「大安寺国際縁日」等のイベントに合わせた宝物殿での展示	H 28.8.31 ~ H 28.12.1	史跡大安寺境内第102次調査出土風琴1点
7	泉佐野市立歴史館 いづみさの	平成28年度秋季特別展「奈良の都と泉佐野」に展示	H 28.9.1 ~ H 28.11.27	平城京跡第28次調査出土須恵器杯身2点・杯盖2点・土師器皿1点・「左組」墨書き漆器1点・「右組」墨書き漆器1点・帶金具丸輪1点・帶金具蛇尾2点・軒丸瓦1点・平城京跡第73次調査出土二彩平瓦3点・軒丸瓦1点・平城京跡第52次調査出土須恵器四耳壺1点・須恵器蓋1点・須恵器壺G1点・須恵器平壺1点・須恵器蓋1点・土師器高杯1点・平城京東市跡推定地第4次調査出土土師器人面壺蓋1点・平城京東市跡推定地第6次調査出土土師器1点
8	生駒ふるさとミュージアム	平成28年度秋季企画展「生駒山をめぐる東と西の交流―古墳時代の馬から見た奈良と大阪―」に展示	H 28.10.6 ~ H 28.11.16	法蓮ヤイ古墳出土馬形埴輪1点
9	生駒ふるさとミュージアム	平成28年度冬季特別展「戦国の生駒―北大畠、河内、南山城をめぐる攻防と復興―」に展示	H 29.2.3 ~ H 29.3.21	古市城山遺跡出土土師器羽釜1点・青磁碗1点・石仏1点・多間城跡出土軒丸瓦1点・軒平瓦1点

表4

	申請日	申請者(機関)	使用目的	写真(使用・撮影)等	摘要
1	H28.4.13	合同会社 EditZ	奈良観光情報誌「ならめがは」Vol.4(2016年夏号)に掲載	佐紀古墳群(東群)の航空写真	貸出・掲載許可
2	H28.4.28	奈良文化財研究所職員	古代学協会「古代文化」に掲載	菅原東道跡埴輪窯群出土の獣形埴輪図面	掲載許可
3	H28.5.9	朝日新聞出版書籍編集部	書籍「飛鳥むかしむかし」国づくりに掲載	平城京第148次調査出土須恵器壺(白衣壺)写真(奈文研撮影写真)	掲載許可
4	H28.6.20	元興寺文化財研究所	『元興寺文化財研究所地域連携プロジェクト成果報告書第1集ならまちの南玄関一財塙・京終の歴史文化』に掲載	平城京第258258258次調査井戸SE03出土石製合子1点、副製鏡1点	貸出・掲載許可
5	H28.6.22	若草公民館	「多聞城展示会～写真や図版で見る多聞城～」でパネルにして展示	「多聞城創建軒瓦」写真	貸出・掲載許可
6	H28.7.11	株式会社 新泉社	シリーズ「道路を学ぶ」112巻「奈良山瓦窯群」に掲載	「丸瓦・平瓦」、「棟の復原」、「瓦の名称」、「奈良山51号瓦窯」写真	貸出・掲載許可
7	H28.7.12	奈良民報社	『奈良民報』連載「古代大和の新世界を歩く」に掲載	「古市庵寺の軒丸瓦・軒平瓦」、「古市庵寺出土の法華経軒丸瓦」写真	貸出・掲載許可
8	H28.8.18	ナラスタッフクラブ	奈良県立図書情報館での「おおつかさの大寺とよばれし寺、大安寺」展で、パネルにして展示	「大安寺西塔出土人頭舞」、「大安寺西塔出土鬼瓦」、「大安寺西塔出土水煙」、「大安寺金堂・講堂付造の焼土崩の出土遺物」、「大安寺南門出土の塑像片」、「大安寺出土壁三彩陶枕」、「大安寺出土奈良三彩」、「大安寺出土房東院」、「大寺」墨書き土器」の写真、「平城京の条と復原図」、「大安寺伽藍復元図」、「大安寺の旧境内と伽藍」図面	貸出・掲載許可
9	H28.10.4	株式会社 宮田出版社	論文集『松永久秀』に掲載	「多聞城出土瓦」、「多聞城創建軒瓦」、「多聞城航空写真」写真	貸出・掲載許可
10	H28.10.17	朝日新聞出版書籍編集部	朝日選書「道路と古代国家—ネットワーク制、どう作りどう活かしたか」(仮題)に掲載	「容量を書いた土器」写真	貸出・掲載許可
11	H28.10.24	株式会社 宮田出版社	論文集『松永久秀』に掲載	「多聞城略図」図面	貸出・掲載許可
12	H28.11.9	地域情報ネットワーク 株式会社	『月刊大和ならら』2016年12月号に掲載	佐紀古墳群航空写真4枚、垂仁天皇陵古墳航空写真3枚、杉山古墳航空写真1枚、ウナバ・コナベ古墳航空写真1枚、ウワナベ古墳航空写真1枚、赤田横穴墓群写真1枚、菅原東道路埴輪窯跡群写真1枚	貸出・掲載許可
13	H28.12.14	有限会社 青垣出版	『奈良県の縄文遺跡』に掲載	菅原東道路の石器出土遺構、油坂遺跡の土坑、仮称大森遺跡の竪穴、別所下ノ前遺跡縄文時代石器が検出状態、船ノ用イモツ遺跡縄文土器、打削用と水間道跡の滌盤、水間道跡出土の縄文時代石器、ゼニヤクボ遺跡第8次調査1区全貌、高塚遺跡とゼニヤクボ遺跡の航空写真各1枚	貸出・掲載許可
14	H28.12.23	株式会社 ユニット	テレビ東京BS ジャパン「空から日本を見てみよう Phis」で紹介	平成28年度発掘調査体験の作業風景写真1枚	貸出・掲載許可

15	H28.12.28	近畿グループホールディングス株式会社	『近畿文化』第807号に掲載	大安寺杉山古墳出土家形埴輪写真1枚	貸出・掲載許可
16	H29.1.13	堺市長	第6回百舌鳥古墳群講演会記録集「検証！河内政権論—なぜ百舌鳥に大王陵が築かれたのか—」に掲載	コナベ古墳の地形と発掘区の位置の図面、高塚古墳出土見取図	貸出・掲載許可
17	H29.1.25	近畿グループホールディングス株式会社	『近畿文化』第807号に掲載	大安寺杉山古墳復元図	貸出・掲載許可
18	H29.3.16	株式会社 かみゆ	洋泉社発行別冊歴史REAL『地理と地形で解き明かす古代史の謎(仮)』に掲載のため	五社神古墳航空写真	貸出・掲載許可

表5

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料
1	H28.5.13	櫻原考古学研究所職員	個人研究	長谷遺跡出土土師器の観察・実測・写真撮影
2	H28.5.11	奈良文化財研究所職員	個人研究	西大寺跡第35次調査の井戸枠の観察・写真撮影
3	H28.6.24	大阪府教育委員会職員	個人研究	平城京跡・奈良町遺跡出土白色土器の観察・写真撮影
4	H28.7.5	滋賀県教育委員会職員	個人研究	奈良町遺跡出土近世陶磁器の観察
5	H28.7.19	京都市埋蔵文化財研究所職員	個人研究	多聞城出土軒平瓦の熟観・写真撮影
6	H28.9.29	奈良文化財研究所職員	個人研究	水間遺跡6・9次調査出土土器の観察・写真撮影
7	H28.11.1	日本美術刀剣保存協会会員	個人研究	平城京跡第688次調査出土跨型の観察・写真撮影
8	H28.11.4	奈良文化財研究所職員	類例調査	平城京内出土雲紋軒平瓦（6801・6802型式）と組み合は軒丸瓦（6229・6133型式）と平城京内出土播磨産軒丸瓦（古大内式）の観察・実測・拓本・写真撮影
9	H28.11.14	京都市埋蔵文化財研究所職員	個人研究	平城京内出土東大寺式軒瓦（6235・6732型式）の観察
10	H28.11.29	奈良文化財研究所職員	個人研究	平城京左京二条二坊十二坪出土「麦塊」墨書き思器の観察・実測・写真撮影
11	H28.12.6	上牧町教育委員会職員	個人研究	平城京第258次出土石製合子の実測
12	H28.3.9～3.17	名古屋大学大学院生	個人研究	平城京内出土陶甌383点の観察・写真撮影

第3章 〈資料報告〉菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討

菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討

村瀬 陸

1 はじめに

本稿では、奈良市教育委員会が平成4年度に実施した菅原東遺跡（平城京跡（HJ）第257-2次）の調査で出土した石見型埴輪について検討する。

菅原東遺跡は、奈良市菅原東町等に所在する古墳時代の集落・埴輪生産遺跡である。出土土器から概ね前期中頃～後半（4世紀中頃）に出現し、方形区画溝（HJ第257-3次ほか）を中心とする区画された土地利用がなされる。中期初頭（5世紀初頭）には一度廃絶し、その消長が南約250mに位置する宝来山古墳の築造期間と概ね一致することや、近年宝来山古墳表採埴輪の特徴に酷

似する埴輪を菅原東遺跡で確認した（村瀬2018a）ことから、両者は連動した遺跡と考えられる。

後期（5世紀後半）になると再び集落が営まれ、一角に埴輪窯（HJ第200次）が構築される。『続日本紀』には、光仁天皇が菅原に住む土師氏に菅原姓を与えたとの記載があり、菅原東遺跡の埴輪窯は菅原土師氏の埴輪生産拠点であると考えられる。

以下で報告する石見型埴輪は古墳時代後期に帰属する。菅原土師氏の製作した埴輪であると考えられるが、埴輪窯から出土したものではなく、その西約200mに位置する溝から出土したもので、形態的特徴も埴輪窯出土

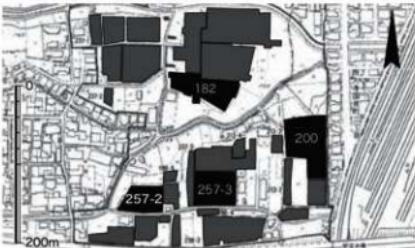


図1 調査地と周辺の発掘区（1/6,000）



図2 石見型埴輪の出土状態（西から）

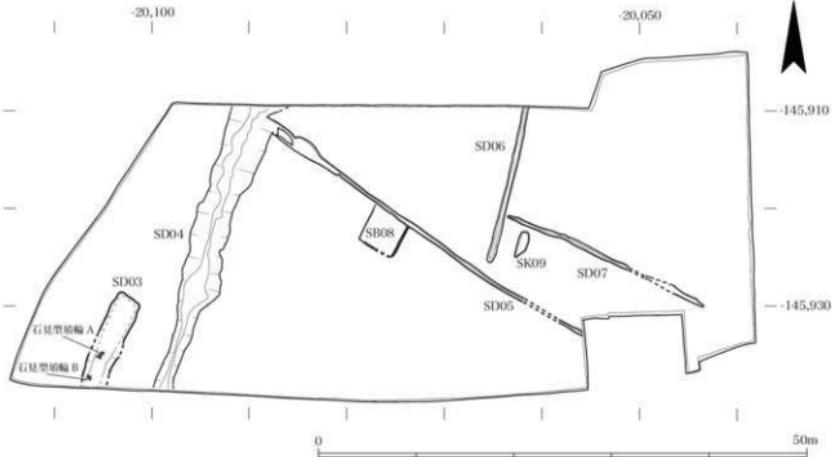


図3 HJ 第257-2次調査の発掘区平面図（古墳時代）（1/500）

品と異なる。よって本稿では資料報告を主な目的としつつ、その意義についても若干の考察を試みる。

II HJ 第 257-2 次調査成果と石見型埴輪

i) 調査の概要

調査地は奈良市吉原東町 48 番地である。近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴い 1460 m² の発掘区を設けて実施した。奈良時代の遺構面では、平城京跡の遺構を検出し、一面で古墳時代の遺構も確認した。

古墳時代の遺構は、溝 5 条 (SD03 ~ 07)、竪穴建物 1 棟 (SB08)、土坑 (SK09) がある。SD03 のみ後期に属し、他は前期後半の遺構である。以下、石見型埴輪が出土した SD03 について述べる。

SD03 は、北で東に振れる溝で長さ 10m 以上、幅 2.5m、深さ 0.5m である。溝の北側が途切れで収束することから、古墳の周溝とは考え難く区画溝と考えられる。概ね SD04 に平行しており、前期後半の区画を踏襲する⁽¹⁾。

ii) 出土埴輪

SD03 出土埴輪は遺物整理箱で 1 箱分と石見型埴輪 3 点がある。石見型埴輪以外に円筒埴輪があるが、外面をタテハケ調整し、底部板押圧や突帯に断続ナデ技法 A か認められる埴輪編年 V 期⁽²⁾ に帰属する。

石見型埴輪 3 点のうち 2 点は、出土状況図により出土地点がわかる (図 3)。両者は一定の間隔をおいて出土しており、廃棄というより立て並べていたものが転落した状況に近い。残る 1 点の出土状況は不明だが、溝の検出状況からみて他 2 点と近接して出土したものである。概要報告書 (奈良市教育委員会 1994a) には、3 点中 1 点のみ報告されているが、改めて 3 点を報告する。な

お、以下で使用する部位名称は図 4 に従って記述する。

石見型埴輪 A 概要報告書で図示されたものである。基部が欠損し形象部のみであるが残存高 88.5 cm (上 1 面: 約 31.6 cm、上 2 面: 約 4.6 cm、中央分割帶: 約 3.8 cm、下 2 面: 約 10.6 cm、下 1 面: 約 37.9 cm 残存) で、3 点中最も残存率が高い。やや焼成が甘く表面は摩滅する。厚みは約 1 cm である。典型的な石見型埴輪の外形を呈し、上下 2 面には厚さ約 0.3 cm の粘土を貼り付けて立体的に段差表現する。この部分は、粘土帯を貼り付けた後、その上下に粘土紐を貼り付けて上下端が中央より突出する形状とする。また、上 1・2 面の接点部分に粘土粒を巻き込むように貼り付けているのが特徴である。外面は全体を不定方向にハケ調整 (9 ~ 10 条/cm) するが、摩滅により不明瞭である。ハケ調整後、中央分割帶以外に弧文線刻を施す。2 条単位だが 1 本ずつ線刻する。施文順は重複関係が少なく不明確だが、上 1 面では頂部をハの字に施文した後に側面側の弧文を線刻していることから、概ね上方から下方へ施文したと考えられる。上下 2 面の弧文は崩れています。上 1 面は弧文 1 型 (和田 2006) の文様構成を概ね保持するが、上 1 面中央上部の縦線 2 条が省略されるなど崩れています。さらに下 1 面は崩れているが、左右対称性が残る弧文である。上下 1・2 面にそれぞれ 3 つ縦長の小孔 (長さ約 1.6 cm、幅約 0.7 cm) が外側から穿たれ貫通する。裏面には線刻等ではなく、補強粘土の貼り付けも認められない。

石見型埴輪 B 残存高 47.5 cm (上 1 面: 約 21.7 cm、上 2 面: 約 9.8 cm、中央分割帶: 約 3.8 cm、下 2 面: 4.2 cm 残存) で、下 2 面以下が欠損する。やや焼成が甘く摩滅する。厚さは約 1.1 cm である。石見型埴輪 A と同様、

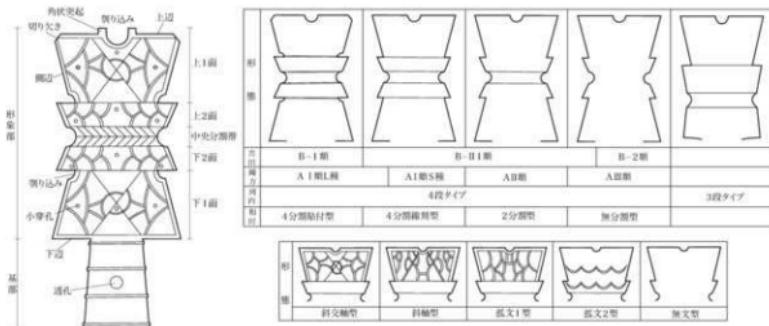


図 4 石見型埴輪の部位名称と分類 (鏡方 1995・和田 2006 をもとに作成)

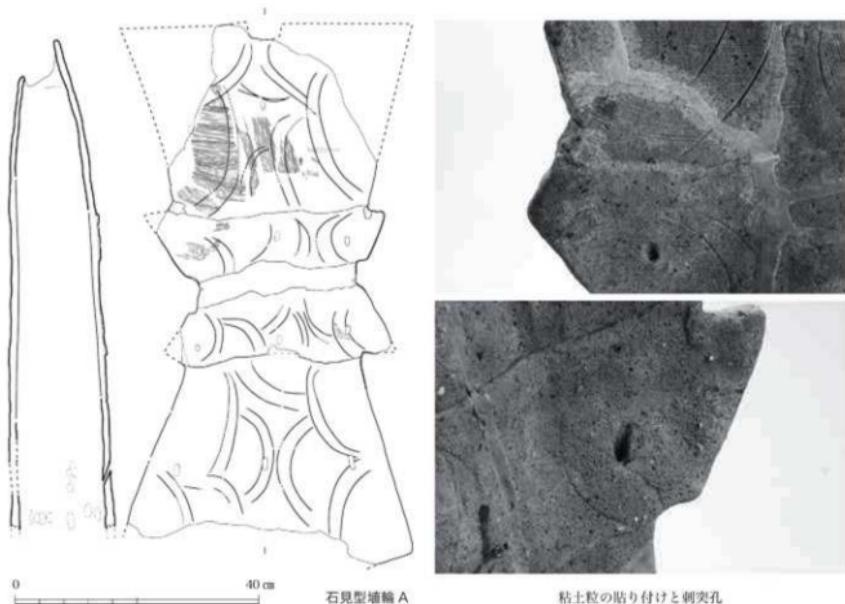
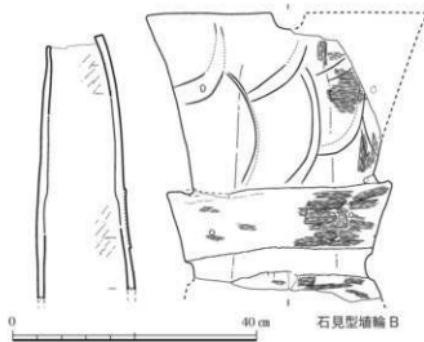


図5 石見型埴輪 A (実測図: S=1/8)

上下2面に粘土帶を貼り付け（厚さ約0.1 cm）立体的に表現し、上1・2面の側面接点に粘土粒の貼り付けがみられる点も共通する。上2面への粘土貼り付けが中央分割帯の割り込みラインよりやや上からとなっているが、下地にヘラ描き線等は認められない。外面はハケ調整（7条/cm）の後、線刻による施文が概ね左から右方向へ上1面に施される。2条単位で1本ずつ線刻される点は石見型埴輪Aと同様だが、左右対称性の残る崩れた弧文1型に比べると、左から右方向へ施文する点が弧文2型

に繋がる順序である。中央分割帯・上下2面は無施文である。小孔は直径約0.8 cmの概ね円形で、外側から穿たれ貫通する。小孔は完存する上2面で中央には穿たれず2つであるが、上1面でも中央にみられないことから各面に2つずつ規則的に穿たれたと考えられる。

石見型埴輪C 残存高64.0 cm（上1面：約29.0 cm、上2面：約12.0 cm、中央分割帯：約8.0 cm、下2面：約9.5 cm、下1面：5.5 cm残存）で、下1面の一部までが残存する。厚みは約1.2 cmである。石見型埴輪A・Bに比べ



粘土粒貼り付け



裏面

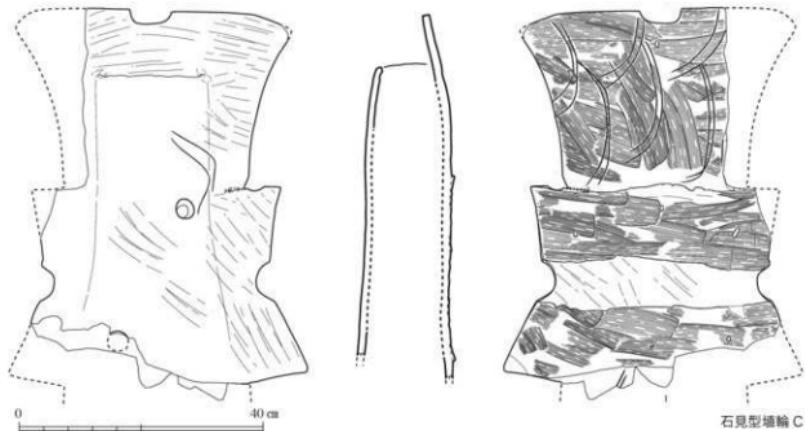


表面

図6 石見型埴輪B (実測図:S=1/8)

て焼成良好で、比較的硬質である。上下2面に粘土帯を貼り付ける（厚さ約0.1 cm）点はこれまでの2点と同様であるが、上1・2面の接点にみられた粘土粒の貼り付

けはない。ただし、この部分をみると表裏ともに刻み目を施している。また、上1・2面の接点に割り込みを入れるものは古相の資料に多いが、この石見型埴輪も若干割



石見型埴輪 C



図7 石見型埴輪 C (実測図: S=1/8)

り込んだような形状を呈する。刻み目の理解は2つ考えられ、①外形成形時に上2面上辺を切り込みすぎて切れ目が入り、それを接着するために刻んだ可能性、②この部分に粘土粒を貼り付けるために刻んだ可能性がある。ただし、粘土粒が剥がれた痕跡はないため、①の可能性が高い。線刻は石見型埴輪Bと同様の弧文がハケ調整(7条/cm)の後に施される。施文順は重複関係より向かって左側から連続的に弧文が施され、弧文I型に比べて崩れた形状であるが規則化されている。中央分割帯はナデ調整のみでハケ調整や線刻はない。形象部表面に穿たれた小孔は、挿し込み角度に起因して円形状のもの(直径約0.8cm)と梢円形状のもの(長さ約1.6cm)があり、上2面で3つあるが、下2面には2つしかない。とくに下2面では中央と片側のみであることから、もう一方を穿ち損ねたものと考える。形象部裏面はナデ調整を基調とするが、2条単位の描き損じたような線刻が一部で確認できる。また、直径3cm程度の小さな透孔が2箇所穿たれている。

製作工程 石見型埴輪A～Cの製作工程は概ね共通するため一括して述べる。なお、基部は欠損するため、倒立技法の有無は不明である。

形象部は基部の上に積み上げた円筒部の左右へ堵状に粘土を貼り付け、最上部のみ鋸の上に積み上げる。この工程のなかで適宜ナデ調整し整形する。次に石見型の外形を形成するために側面をヘラケズリする。その後、上下2面に粘土帶を貼り付けて立体表現とする。ハケ調整のタイミングは石見型埴輪Cで観察でき、これをみると上下1面の各2面に近い部分にはハケ調整が及んでいない。よって、粘土帶を貼り付けた後、各部にハケ調整を2次的に施したことがわかる。最後に表面に線刻と小孔の穿孔を行って完成となる。

製作工人 3点の石見型埴輪は概ね形態・製作工程が類似するもので、比較的近い集団のなかで作られたことが想定できる。このことを、形象部表面に残るハケメバターンの分析から確認する。

図10で、石見型埴輪A～Cのハケメバターンを比較した。これをみると、石見型埴輪B・Cはハケメバターンが一致するが、石見型埴輪Aとは一致しないという結果を得た。このことは、少なくとも石見型埴輪B・Cが同一工具に近いもので調整されたことを示す。この結果は、両者が製作工程・線刻施文で一致する点とも調和的である。一方、施文でも石見型埴輪B・Cとはやや異なる石見型埴輪Aは、ハケメバターンも異なっており区別できる。

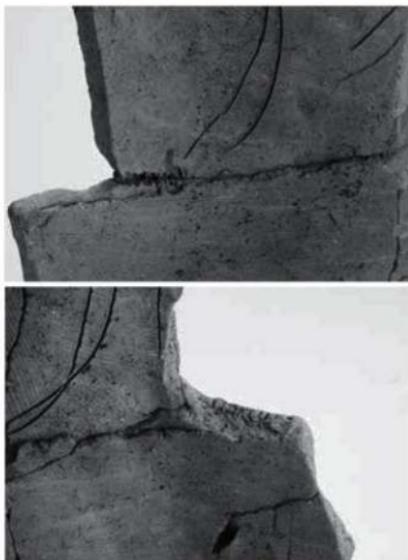


図8 石見型埴輪Cの刻み目



図9 石見型埴輪C裏面の刻み目・小孔・線刻・切り込み

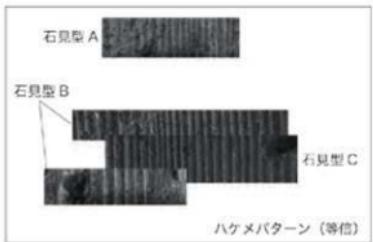


図10 石見型埴輪A～Cのハケメバターン

この差が工人差であるのか、同時期における集団差であるのかは判別できないが、同一遺構内から出土していることから製作時期も近いと考えるのが妥当である。したがって、作り手が異なる可能性が高いが、菅原東遺跡という比較的大規模な埴輪生産工房を含む遺跡からの出土である点を考慮して、同一集団内の別工人が製作したと考える。時期差の有無については以下でさらに検討を進めめる。

III 菅原東遺跡における石見型埴輪とその変遷

i) 石見型埴輪の分類と編年

石見型埴輪は、石見遺跡の調査で認識されてから、分類・編年研究が蓄積されている。分類は、概ね形象部の分削方法をもとに行われており（吉田 1992、鐘方 1995、河内 1999、和田 2006）、和田分類が現状の到達点の成果と言える。編年については、和田分類4分割貼付型が最古相であることは共通認識であり³⁾、大局的な方向性は4分削型から2・無分削型へ変遷すると考えられている。一方で地域性が強く認められることも指摘されており（鐘方 2003、村瀬 2018b）、これをふまえた編年研究は今後の課題である。

ii) 菅原東遺跡埴輪窯跡群出土品について

菅原東遺跡埴輪窯跡群は、HJ 第 200 次調査で検出した埴輪窯で、5世紀後半～6世紀にかけて操業したとされる。窯は6基あり、出土遺物から3→2→1号窯と操業し、4～6号窯は3号窯よりやや

先行する可能性が指摘されている（奈良市教育委員会 1992）。

窯の時期を推定し得た円筒埴輪の傾向は、4～6号窯、またその廃棄土坑と考えられる SK13 から、ヨコハケ調整の残るものが出土地したほか、底部未調整のものや底部調整があつても内面にケズリ調整を施すものがある。このような古相⁴⁾を示す個体が比較的確認できるが、一方でV期の特徴である断続ナデ技法Aや底部板押圧に

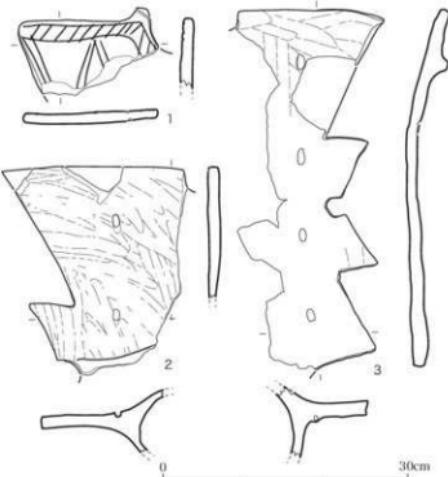


図 11 HJ 第 200 次調査出土石見型埴輪 (S=1/6)



図 12 HJ 第 200 次調査出土石見型埴輪の裏面にみる補強粘土 (左: 図 11-2、右: 図 11-3)

よる調整を施すものも共伴する。3号窯では底部ケズリ調整の個体が確認されておらず、やや新しい傾向を読み取れるが、1・2号窯については出土量が少なく、出土遺物から確実な時期差を認めるには至らない。出土埴輪の多くが灰原からの出土であることからも、窯単位で編年を行うことはやや困難な作業である。よって、すべての出土遺物を対象として型式学的に分析せざるを得ない。すでに蓋形埴輪では、立ち飾りの形状・施文パターンから3段階に区分し、概ね古墳出土資料の変遷とも調和的であることが示されている（鎌方2014）。このことは、円筒埴輪と同様に古墳時代後期を通して製作し、そのなかで型式変化のあった可能性を示唆する。

石見型埴輪については別途報告がある（鎌方1992）。詳述すると、確実に確認できる資料としては2分割型と無分割型がある。2分割型は中央分割帯を沈線によって分割するもので、無分割型は線刻や粘土貼付などの装飾がみられない簡素なものである。また、分割数は不明であるが、形象部に弧文線刻がある破片もある（図11）。

すべてに共通するのは、形象部をナデ調整のみで仕上げていることである。また、形象埴輪のなかでは石見型埴輪が最も多く出土している一方で、確実な4分割型の個体が見当たらないことは、現在見つかっている1～6号窯以外に未知の古い窯が周辺に存在するか、あるいは地域性として製作していなかった可能性が考えられる。これについては後述するが、HJ第257-2次調査出土資料の存在から前者の可能性の方が高いと考える。

のように、菅原東遺跡埴輪窯跡群では一定期間の操業が認められるものの、5世紀後半に遡る資料は限定的であり、概ね6世紀以降のものである可能性が高い。

iii) 比較検討

以上をふまえて、HJ第257-2次調査出土資料と菅原東遺跡埴輪窯跡群出土資料を比較する。

先述の通り、埴輪窯では4分割型が現状見つかっていない。この点からみても、HJ第257-2次調査出土資料が現在見つかっている埴輪窯で焼かれた可能性は低いと考える。このことは、製作技法の違いからも指摘できる。

まず、HJ第257-2次調査出土資料は形象部をナデ調整後、ハケ調整をしてから線刻を施す。しかし、埴輪窯出土資料はいずれもナデ調整のみで調整の省略がある。

さらに、埴輪窯出土資料ではいくつかの資料に、円筒部より上方の形象部を支持するための補強粘土が裏面に貼り付けられている（図12）。補強粘土は、おそらく乾燥工程を十分に取らず製作するための方法であり、より

量産を志向した結果であると考えると後出的要素である。このような調整や技法の差が両者に認められる。

以上の差が時期や製作者の違いであることは明白であるが、HJ第257-2次調査出土資料は、前述の通り資料的なまとまりがあるため、外部から持ち込まれた可能性は極めて低く、型式的にも埴輪窯の資料と比べて古相であることから同一集団内の時期差に起因すると考えられる。報告書でも述べられているように、現在知られる埴輪窯は丘陵頂部に近い立地であり、古墳時代前期後半の溝を利用するなどして無理やり窯を構築している。本来は丘陵斜面が適地であることから、周辺に窯が複数広がる可能性が想定できる。

実際に、HJ第182次調査では谷状の落ち込みに灰原状の灰層を一部確認しており埴輪が出土している（奈良市教育委員会1990）。また、菅原東遺跡で奈良時代の整地土や遺構などから埴輪が散在的に出土することは珍しくないが、HJ第257-3次調査では圧倒的多数の埴輪が出土している（奈良市教育委員会1994b）。これらの状況をふまえてみても、現状みつかっている埴輪窯以外の窯が存在した可能性は高い。

つまり、HJ第257-2次調査出土石見型埴輪は、現在見つかっている菅原東遺跡埴輪窯跡群で焼かれた同製品より古く、周辺により遡る埴輪窯がある可能性を示唆する資料であるとも言える。

iv) 菅原東遺跡を基軸とした石見型埴輪の変遷

以上の検討から、HJ第257-2次調査出土石見型埴輪は、型式的に菅原東遺跡埴輪窯跡群で見つかっているものより古相の特徴を有し、一連の遺跡で製作されたものである可能性が高いことを示した。したがって、これらを連續性のある資料としてみた場合に、どのような型式変遷を追うことができるかを検討する。

まず、最も古い特徴をもつものとして4分割貼付型のHJ第257-2次調査出土石見型埴輪Aがある。形象部への施文は上1面がやや崩れた弧文1型、下1面は左右対称性を保持する弧文1型である。菅原東遺跡出土資料ではないが、大阪府羽曳野市の蛭里4号墳出土石見型埴輪は、4分割貼付型で上1面の隅を切り欠き、上下1・2面の側面に切り込みがあるなど定型化した最古相の資料として位置づけられているものだが、この形象部施文は上1面が弧文1型、下1面が斜交軸型で、上下2面には弧文、中央分割帯には綾文が施されている。この資料を最古相とみるとならば、それよりは一段階新相であるといえる。

次に、HJ第257-2次調査出土石見型埴輪B・Cがある。

4分割貼付型である点で石見型埴輪Aと形態的には同様だが、施文は上下1面が弧文1型から一方向への施文に変化する。さらに、石見型埴輪Aでは上下2面に弧文を施していたが省略されている。これらの石見型埴輪3点は施文方法の違いが認められ、石見型埴輪B・Cは上下2面が無文化する点が2分割型に近い様相を示し始めるものと考えれば後出的である。

このように、菅原東遺跡では弧文1型が崩れていく過程を石見型埴輪Aから追うことができ、さらに上下2面への施文がなくなり、弧文1型の対称性が崩れて弧文2型に繋がる施文へと変化していくことが読み取れた。

次に、菅原東遺跡を中心とする大和北部～山城南部地域では2分割型が地域性をもって展開することが知られているが、このことは事象として理解されるのみで資料的に追求できない。しかし、上述の型式変化からそれが推論できる可能性がある。つまり、菅原東遺跡における4分割貼付型では上下1・2面に施文していたものが、上下2面への施文が省略されるという変化が確認できた。これを単純に文様構成だけで見た場合、中央を境とし上下で分割しているとみることもできる。その結果、後述するようなさらなる工程の省略を経て2分割型へと型式変化したと考えることができる。

この観点で考えた場合に、2分割型の指標的資料となるのが、京都府長岡市塚本古墳出土資料である。塚本古墳出土資料は、中央分割帯に斜格子文を施すことで2分割型とし、上下1・2面には弧文を施す。また、共伴資料に中央分割帯に粘土帶を貼り付けて2分割型とする

無施文の個体もある。

施文を単純な型式学的変遷としてみると、2分割型のなかでも施文のあるものからないものへ変化したと考えることができる。ただし、2分割型が出現したとされるMT15型式期の塚本古墳で両者が共存し、なおかつTK10型式期に下る京都府宇治市菟道門ノ前古墳出土資料は施文を残す2分割型であることから、2分割型出現以降における施文の有無は時期差ではなく系統差と考えるのが妥当であろう。現状、奈良市北部～山城南部地域においては施文を残す傾向にあり、奈良市北部～天理市付近は無文化したものが多い。この差は、史料にみる土師氏の系統（秋篠系・菅原系）に関連する可能性がある。両者は共通する技法を用いており大局的には一体（菅原東系石見型埴輪共有圈⁵⁾）とみることもできるが、今後資料が増加すれば上述のように区分できる可能性が高い。

このように、4分割貼付型から2分割型が出現する過程を述べたが、菅原東遺跡についてみると埴輪窯出土資料は無分割型が多く、2分割型も中央分割帯を沈線で区切るのみの簡素なものである。他の遺跡ではMT15型式期に中央分割帯を装飾することで2分割型とするものが出現するが、そういったものより後出する様相であると言える。埴輪窯出土資料に限って見れば、限りなく省略された横線のみの2分割型と、その線刻さえ省略されて、無分割型に推移する段階を示す資料群であると言える。

以上のように、4分割貼付型から2分割型を経て無

TK23
4分割貼付型



斜交輪・弧文1型
切り欠き・切り込み有
無施文系石見型埴輪共有圈
では多見

TK47



弧文1型が崩れる
中央分割帯が無文化

MT15



弧文1型から崩れているが
規則的な弧文
上下2面が無文化

TK10

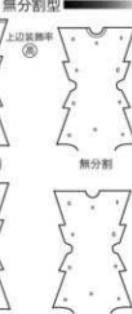
2分割型



秋篠系
中央分割帯に斜格子文



上辺装飾半
(◎)



無分割
無分割



図13 菅原東系石見型埴輪共有圏における石見型埴輪の変遷

分潮型が出現するまでの変遷を示した（図13）。HJ第257-2次調査出土資料の報告・検討によって、弧文I型の省略過程および2分潮型の出現背景に迫ることができ、概ね菅原東遺跡出土資料を中心とする大和北部～山城南部地域出土資料のなかで系統と変遷モデルを予察することができた。これまで、HJ第257-2次調査出土資料のような4分潮貼付型の弧文I型系列と2分潮型は別系統として整理されてきた（和田2015）が、それとは異なる結果となった。石見型埴輪は地域性の発現が特に顕著な形象埴輪であり、基本的にはその地域のなかで系統が追える可能性を資料から示すことができた点は、今後の形象埴輪研究において重要であると考える。

謝辞

本稿に際して、鍾方正樹氏・久保邦江氏には当時の調査状況等のご教示賜りました。鍾方氏には本稿の内容についても多くのご指導を賜りました。また、埴輪検討会員の皆様には見学会の際に貴重なご意見を賜りました。記してお礼申し上げます。

註

- 1) 墓室も前期後半の溝を利用して、その斜面を穿つて窓を構築しているほか、いわゆる首長居館と言われる方形区画溝SX22も、それを踏襲した形状を呈する後期の溝が確認できる。
- 2) 墓室検討会編年（『墓室検討会2003』）による。
- 3) 石見型木製品や宝塚1号墳出土船形埴輪にみられる石見型立物・定型化前の石見型埴輪では、上下2面の部分が立体表現となっており、いわゆる石見型の祖型はこれが本来の表現であると想定されている。
- 4) 後期円筒埴輪の編年は、属性抽出が難しく困難であるが、大和においては底部内面のケズリ調整等が編年の指標となりうることが示されつつある（坂2007・村瀬2018c）。
- 5) 2分潮型が発現する地域性は既知の通りであるが、大和北部～山城南部地域に加えて北河内地域を含むエリアに石見型埴輪の特徴的技法・形態が共有されることから筆者はこれを菅原東系石見型埴輪共有圏と称した（村瀬2018b）。

引用文献

- 鍾方正樹 1992「石見型埴輪の検討」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』奈良市教育委員会
- 鍾方正樹・中島和彦・根上直子 1995「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究（上）（下）」『古代文化』47-5、47-6 古代学協会
- 鍾方正樹 2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪・円筒

埴輪製作技法の観察・認識・分析-』埋蔵文化財研究会

鍾方正樹 2014「杏尻庄1号墳出土の埴輪」『平成24年度埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良市教育委員会

河内一浩 1999「菅田白鳥埴輪室出土の石見型盾形埴輪・古市古墳群出土の紹介も兼ねて」『埴輪論叢』第1号 墓室検討会

直木孝次郎 1960「土師氏の研究・古代の氏族と律令制の関連をめぐって」『人文研究』11（9）大阪市立大学大学院文学研究科

奈良市教育委員会 1990「平城京右京三条三坊一坪の調査 第169.173.182.184次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』奈良市教育委員会

奈良市教育委員会 1992「菅原東遺跡の調査 第200次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』

奈良市教育委員会 1994a「平城京右京三条三坊七坪・菅原東遺跡の調査 第257-2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』

奈良市教育委員会 1994b「平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査 第257-3次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』

奈良市教育委員会 2018「奈良市の埴輪・土師氏の故郷でのハニワ生産-』

埴輪検討会 2003『埴輪論叢』4

坂靖 2007「大和の円筒埴輪」『古代学研究』180 古代学研究会

村瀬陸 2018a「HJ第229・443-7次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳・古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅱ」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成27年度』奈良市教育委員会

村瀬陸 2018b「粘土付加からみた石見型埴輪の地域性」『埴輪論叢』8 墓室検討会

吉田野ケ 1992「石見型盾形埴輪について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会

和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』53-3 考古学研究会

和田一之輔 2015「石見型埴輪の東国波及と上番」『利根川』37 利根川同人

印刷・製本仕様データ

表紙：アートボストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文（表）：ヒラギノ明朝体
製本：左開き・糸かぎり綴じ

©2019 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成28(2016)年度

ISSN 1882-9775

印刷 平成31(2019)年3月17日

発行 平成31(2019)年3月27日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

TEL 0742-331821

FAX 0742-331822

URL <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail maizoubunka@city.nara.jp

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-341111(代)

印刷 株式会社 JITSUGYO

630-8144 奈良県奈良市東九条町6-6

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA
2016

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN 2016.
- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2016

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2019